

目が覚めたらあべこ
べってた

紺南

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あべこべ世界で生きる少年の話

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

124 103 89 77 69 61 52 42 33 21 11 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

313 301 287 278 269 258 242 223 213 200 189 179 144

第1話

昨日まで普通だった。

少なくとも、夜に見たニュース番組に変わったところはなかった。普通に寝たし、引つかかるものはなかった。

それで朝目が覚めて、天気予報を見てたぐらいからなんかおかしいと思い始める。

政治ニュースの議員が全員女だったり、主夫必見とか言う単語が出てきたり。

ドッキリ番組でも流してんのかとチャンネルを変えてもどこも一緒だった。

女性議員の変わらぬ汚職とか、増えない男性議員とか、男性差別とか。

慌ててパソコンにかじりつく。どこの報道記事も微妙なニュアンスが頭おかしかつた。

極め付けはAVサイト。トップページが男の全裸と言う吐き気を催す邪悪が占拠していた。

思わずうずくまった。吐き気がした。がちで。まじで。

「モザイクかけてもありません分るだろ……。薄汚いキノコとかやお。やめてくれや……」

確認のためとりあえず開いた動画は男主体でそんな感じ。もう二度と開くまい。

女の裸が存分に見える動画は、サイトの端っこの方のカテゴリーにひっそり隔離されていた。

目の保養にクリックして、揺れる乳房に安堵した。

「いや、一息ついてる場合じゃねえぞ。なんだこれ」

女性議員が大勢を占めてる時点で日本やばいと思うけど、やってることは男の政治家と変わらなかつた。

元気に汚職に励んでる。

夢中になって情報をかき集めている内に、いつも登校する時間を過ぎていた。

けれどやめられない。例えば地震来たってやめられねえぞ。この世界どうなってんだ。クリックしてクリックしてクリックする。

色々なサイトで情報をかき集めて、一段落した時には10時を過ぎていた。

絶望的な現状が目の前にある。

現実逃避に目を逸らす。携帯に友人から安否確認の連絡が来てた。

『無事か』

文字を打つ。

「俺の頭がやべえ」

『何があつた』

「助けてくれ」

『何があつたんだ』

指が止まる。

この現状をどうやって言葉にすればいいんだろう。

最適な言葉が思いつかない。必死こいて受験勉強したのに何の役にも立たねえ！

「落ちて着け落ちて着け。こういう時こそスクールだろ」

考える。

俺は今一体どういう状況だ？

昨日まで要職は男ばかりだったのに、今や全部女にすげ代わってる。

主婦は主夫になり、手弱女は手弱男になって、益荒男は益荒女になってた。

世界が丸つきり男女引っくり返ってしまっている。そんな中に俺は一人取り残され

たっばい？

まるでオセロだ。リバーシブルだ。

例えるなら、白で埋め尽くされていた盤上が、ど真ん中を除いて黒になっていた様な

状況。

こんなんどうやって伝えるんだよ。伝わる訳ねえだろ。頭どうかしてる。やっぱり

俺の頭がおかしいんだ。

考えに考え抜いた挙句、俺はこの文章を打った。

「男女あべこべってる」

『病院行け』

行つてくる。

病院に行つた。

俺は記憶障害的な何かそんな感じの病気であると女医に診断された。

治療法は、ほっとけば治ると言われた。勘だけど、たぶんあいつやぶだと思う。

そんなわけで特に診断書も貰えず、俺は明日から学校に通わなければいけない。

今日のところは錯乱してることまで先生に伝言を頼んだ。実際してる。

そう言えば、学校とかどうなってるんだろ。

そう思つて『小学校 プール』で検索した。

男の水着姿ばかり出てきたからすぐ閉じた。

何もかも嫌になつて寝つ転がつてると電話がなつた。

『あんた学校サボつたんだつて?』

母ちゃんだ。

「母ちゃん……俺おかしくなつちやつたよ」

『はあ?』

「男尊女卑つて知ってる?」

『あんたそんなフェミニストみたいなこと言つて』

この世界では女尊男卑が一般らしい。元の世界だとそんなこと言つたら鼻で笑われたのに……。

て言うかフェミニストつてfemaleから来てるんじゃないのか。

語源滅茶苦茶じゃねえか。

『不良とか、許さないからね。ちゃんとおしとやかに育て、金持ちの家に婿に行くんだよ。そのために勉強させたんだからね』

「母ちゃんあんま變わんねえな」

元の世界では上場企業に入社して年収1000万稼げとか言ってた。それを考えるとむしろマイルドになったのではとすら思う。

「明日は学校行くよ」

『そうしな。男の価値は顔と性格で決まるからね』

もういや、この世界。

『あ、そうだ』

「……なによう？」

嫌な予感がした。

こういう唐突に思い出したみたいな時はたいてい碌なことじゃない。

前はなんだったか。家に外人軍団押し寄せたときだっけ？

……思い出したくもなかったわ。

切ろうかとも思ったが、聞くのを先延ばしにするだけで何の意味もない。

前もって準備できるのでむしろ助かることもある。

『あんたの妹のことだけど』

「はっ。」

準備も糞もなかった。爆弾発言だ。

もちろんだが、俺に妹なんていない。

今俺は一人暮らししてる。高校生だけど、一人で暮らしてる。家族は電話してる母親一人だけだ。

『ん？ 電波悪いのかな？』

「しつかり聞こえてるよ。でももう一回言ってみろ」

『私が外で作ったあんたの妹のことだけだ』

「おい待てババア」

初耳だった。

いや、知りたくはなかったけど。

外に男作って子供まで作ってたとか、知りたくなかったけど。

『あんだ、母親のことババアって……。私そんな子に育てたつもりないよ!!』

「てめえ自分の身省みてもう一回言ってみろ!!」

『なんちゆう声出すんだい！ あんた本当に大丈夫なの!?!』

「俺の頭がおかしいとか言うな！ おかしいのはてめえの貞操観念だろうが!!」

間違ってるのは俺じゃなくて世界の方だった。

少なくとも、俺は正しいことを言ってるという自信がある。

例えば今がオセロみたいに引っくり返っていても、元の世界で愛人とか不倫とか、あれだけ叩かれるんだから、そこは変わらないだろう。

「どうかそうであって下さい。お願いします。」

『ちっ。うっさいね。ロシアの男つてのはイケメンばかりなんだよ。目の前に餌ぶら下げられて我慢できると思ってたのかい』

『おい、合意だよな？　そこは守ったよな？　人として越えちゃいけない線だぞそこは』
『責任は取ったよ』

『つたりめえだろうがあ!!　責任とかの前に償うようなことしてねえのか聞いてんだよお!!!』

『はあ?!　犯罪なんてしたらこうして電話できるわけないだろ？　少しは考えな』
「……で？」

『被害届出さねなければいいんだよ』

「一回閻魔に舌抜かれたらどうだ」

『閻魔なんて言うぐらいなら、よっほど立派なもん持つてるんだろうねえ……』
だめだ。こんな奴には閻魔も匙投げるわ。

「で、妹がなんだよ」

『んあ？　妹お？　ああ……アーニヤのことだけどね』

涎を啜る音が聞こえる。

『そろそろ日本に定住させようかと思ってね。近々帰るよ』

「あ、そう」

少し考える。

まだ認識の切り替えが上手く出来てないが、何となくやばいってことだけは分かった。

「それってこの家に住むってことか？」

『そうだよ。部屋余りまくってるだろ？　ちゃんと掃除してくんだよ』

「……日本語は？」

『ペラペラさ。日本国籍取らせるつもりだから』

そこはお前が口挟まないで好きに取らせろよ。

で、ようやく気付いた。何がやばいって俺の身がやべえ。この世界性欲も引っくり返ってるんだ。

「それ俺大丈夫なの？　お前の娘だろ？」

『あんただって息子だろ。ま、性別で性欲にも差があるけどね。でも大丈夫さ。あの子私を反面教師にしてるから』

「子供が親を反面教師とか悲しすぎて泣きたくなるわ」

ほんと泣きたい。こんな親持つて。

これで引っくり返る前と全然変わらないってのが余計に悲しい。

性方面が少し奔放になってるぐらいか。前の世界でも愛人の一人二人いてもおかしくない。

さすがに子供は作らんだろうけど。

『仕事の都合もあるから、帰る前にまた連絡入れるよ。楽しみにしてな』

それだけ言つて電話が切れた。

何を楽しみにすればいいんだ。

性欲お化けが来日することをか。

世の男子どもよ逃げろ。

第2話

世界が引っくり返ってから一日経った。

カーテン越しの朝日は昨日までと何も変わらない。なんの変哲も無い朝だ。

小鳥のさえずりから吹く風まで、世界が変わったなんてとても思えない。

でも変わってる。外に出れば一発で分かる。

昨日病院行くときに見た。開放的な女子の居ること居ること。下着見えてるだけならまだいい。乳首見えてる奴も居たぞ。どうなってるんだこの世界。

今、こうして窓から見える所に乳首はなかった。痴女はいない。それにほっとしたような残念なような。

じつくりと外の景色を見ていたら、ぐうーと腹が鳴る。

例えば世界が変わろうと変わらない物もある。腹の虫が鳴るように、どんな時でも腹は減る。

食パンを食って腹を満たす。

テレビでは相変わらず女性議員が汚職を追及されていた。追及している方も女性だ。

キャスターもレポーターも予報士も女だ。寝て覚めても世界は引っくり返ったまま

だった。

寝てこうなったんだから、寝たら戻ってるかもなんて淡い期待は儂く散った。夕べの内に、携帯には体調を心配する連絡が数通入った。

学校行くわと返信した。

バスで駅に行き、学校へ向かう。

道中、通学途中の生徒があちこちに見られた。

偏見かもしれないが、男子は草食動物みたいに肩身が狭そうにしている。

逆に、女子は檻から解き放たれた捕食者みたいに羽を伸ばしていた。

スカートの丈がやけに短かったり、シャツのボタンを第三ボタンまで外しているのも居た。

ブラジャーが丸見えだ。下半身に悪いだろ。きちんとしろよ。

滑りこんできた電車はやっぱり混んでる。

座れたことなんて一度もない。

大人しく隅っこの方で携帯をいじってた。

ガタガタ揺れる電車の中で手すりにもたれて一駅通過した。尻に違和感。触られてる。

はあ？　と思う。男の桃尻触って何が楽しいんだよ。硬いだけだろ。俺だったら金

積まれたって触らない。

こうやって触られても何も感じないし、面倒くさいからリアクションしなかった。

それがまずかったのか、動きは段々激しくなる。手のグラインドは大きくなって、首筋に熱い吐息がかかった。さすがにぞくつとする。

携帯を使つて背後を確認。そこそこ美人な人がやばい目つきで立つてた。興奮しすぎて瞳孔開いてる。触る方が感じんのかよ。関わりたくねえ。

それでやつぱりほつといたら、痴漢は調子に乗つてフアスナーに手を伸ばしてきた。それはダメだろ。引つ叩く。

「……………」

痴漢は思いつきり身を引いた。

息を呑んで我に返つたような顔だ。調子乗んなばあ。

丁度その時駅に着いたので、流れに乗つて外に出る。

痴漢は付いてきて無いようだった。

駅を出る時、貼つてあるポスターが目映る。

『痴女撲滅キャンペーン』

この世界で痴漢は痴女と言うらしい。一つ賢くなつた。けどなんにも嬉しくねえ。

学校は平和だった。

まだ一年も通つてない学校は一見して何も変わらない。

一応進学校のはずだ。スカートの丈は怪しいが、第二ボタンまで開けてるような奴は
いなかった。

ここは下半身に優しい場所だ。

「ういっす」

「おお」

教室に着いて自分の席へ。

俺も早い方だが、早い奴はもう来てる。数人だけど。バスの都合とか色々ある。

いつつ俺より早く来る北村と言う男がいる。何の因果か、波乱万丈の席替えの末に
俺の前の席に座った北村は、声を潜めて話しかけてきた。

「昨日どうした？」

「悪夢見て錯乱した」

「まじかよ」

言葉が出ないようだった。

今も悪夢の中だ。これほど酷い現実があるだろうか。

「ストレスじゃねえの？」

「かもしらん」

「昨日会長来てたぞ」

「まじかよ」

「なんか緊急の集まりがあったんだって」

携帯にはなんの連絡もなかったから知らなかった。

病欠だから遠慮したんだろう。

「副会長は大変だな」

「大変だよ。実際やりたくねえしな」

「自分で立候補したんだろ？」

「生徒会は進学に有利だから立候補したんだ。まさか当選するなんて思ってなかった

し」

いくら二枚あるとは言え、二年生にも三年生にも副会長に立候補した奴はいる。

まさかそれを抑えて俺が当選するなんて夢にも思わなかった。ダメでもともとだったはずなのに。

「何が良かったんだ」

「二年生は何もわかんねえから、とりあえずお前に入れたって奴はいつばいいぞ。一年生で立候補とかヒーローだったからな」

ヒーロー（笑）

これで落選したら笑いものだったに違いない。

少なくとも一年間からかわれただろう。それが間違つて当選してしまったから、本格的に一目置かれた。

見ず知らずの人間と話すたびに距離があるのはそのせいだ。

「それで二年と三年に勝てるわけないだろ」

「潰し合ったんじゃねえの？」

有り得る可能性だった。

票数を思い出しても拮抗していた。本当にそうなら見事漁夫の利を得た形になる。ラッキーだった。

「まあおかげで進学に有利なカードが手に入ったわけだ」

「来年は落選運動だな」

「殺すぞ」

「お前言葉遣い汚えなあ」とぼやかれた。

肩をすくめる。

それはともかく昨日の分のノート見せろと言ったら快く貸してくれた。

ノートを写している間、会話が途切れる。

教室には少しづつ生徒が登校してきていた。

単純作業をしている間、らしくもなく考え事ばかりしてる。昨日から考えてばかりだ。こうしている間も、聞きたいことがたくさんある。

走らせていたペンを止め、窓の外を見ながら素知らぬ顔で聞いてみた。

「なあ、痴女つてどう思う?」

「最低だな」

大真面目な顔だった。

「最低だよあいつらは」と憤懣やるかたないと気炎を上げている。

俺の知ってる北村なら、一度会ってみたいぐらい言っただろう。

特に性欲モンスターの高校生なら鼻息を荒くして熱く語ってもおかしくない。

「最低か」

「ああ。あいつら腕力で勝ってるからって無理やり触ってきやがる。酷い奴は口塞いで来てな。くそつたれだよ」

なんかやけに生々しかった。

たぶんこいつやられたことある。イケメンだから狙われやすいのかもしれない。美的センスは引っくり返ってない。

実際そこんところどうなのか気になったが、しかし聞き逃せなかった。腕力で勝てない？

「……男より女の方が力強いんだっけ」

「当たり前だろ。よっぽど鍛えてないと勝てねえよ、あんなもん」

悔しそうな口調だった。

半信半疑だったがこれで一つ分かった。この世界は腕力も引っくり返ってた。

朝のことを思い出す。腕力で勝てないとなると、あれつてもしかして大ピンチだったのでは？

「なあ」

「ん……？」

「俺今日痴女られたんだけど」

「はあ!？」

大きな声に教室にいた数人が振り向く。

はつと口を塞ぐ北村は声を潜めて聞いてきた。

「お前、まじか？」

「ああ」

「……怖かったろ」

「いや、別に」

北村の憐れむ様な眼差しは変わらない。

頬杖ついてるの見たら気にしてないのわかりそうなもんだが。

「そう言う時ってどうすんの？」

「え、いや、冗談だよな？」

「まじでわからないんだけど」

「箱入りにも程があるだろ……」

嘆くように言われた。

箱入りと言うか引っくり返ったと言うか。無知であることは否定できない。

そこに俺の責任があるなんて一片たりとも思えないけど。

「いいか？　そういう時は痴女の手掴んで痴女ですって周りに知らせるんだ。そうすれば周りの人が助けてくれる」

「ふーん」

対処法に変わりはない。

同じことすれば良いようだ。俺にそれができるかどうかはさて置き。

北村に聞かれる。

「お前駅どつちっ？」

「北村とは逆」

「そうか。そうだったな」

北村は腕を組んで真剣に考えだした。

途切れた会話に殺伐とし始めた雰囲気。

この空気を変えたい。

こういう時エロい話できればなあ。エロは偉大なのに。

第3話

昼休みになった。

北村は用があるからとどこかへ消えた。

一人寂しく自分の席で牛乳を飲んでいたら、放送で呼び出されたので職員室に向かう。

「失礼します」

「あ、来ましたね」

俺を呼び出した担任がカツプラーメンを啜ってた。げつぶをしながら「こつち来いと手招きしている。

「これ昨日の分のプリント」

「あ、どうも」

昨日休んだ分だ。

「タイツを履いた担任はしきりに足を組み替えて、プリントよりむしろそつちが気になった。」

それから昨日あったと言う生徒会の緊急の議題と言うのを聞かされた。

「は？ 痴女被害？」

「そ」

担任はタイトスを引つ張りながら言う。

「最近集団痴女って言うのが蔓延ってるらしくてね。警察からも注意喚起が届きました。犯人集団はまだ捕まってません。電車に乗る人は注意してくださいってお話」

「それがなんで生徒会の仕事になるんですか」

「ポスター作りをお願いしたんです。金折さんは美術部に入ってますから」

「そんな美術部に頼めばいいじゃないですか」

「もちろん頼んでます。ヴァリエーションは欲しいですからね。ただ、美術部にいい感じに生徒会長がいたので、生徒会執行部もお手伝いってことで協力をお願いします。学校一丸となって頑張りましょう」

「はあ」

生徒会なんて名前だけで基本的に雑用係でしかない。

こういう面倒くさい仕事を振られることが多い。

おかげで下校時刻が伸びる伸びる。醸すブラック企業感。

「あなたも他人事じゃないですよ。男の子でしょう」

「ま、そうですけど」

痴漢被害なんて縁がなさ過ぎて実感がわかない。

いや、今朝がた遭ったけど。あれは変質者って感じだったな。

「そういえば、うちにも被害者っているんですか?」

「んー。いや。今のところ報告はないですね。ただ、警察に届けてないだけで被害に遭ってる子はいるかもしれません」

「泣き寝入りですか」

「そういう子もいるそうです。もし被害に遭ったって子がいたらこっさり教えてください。メンタルケアしなきゃいけないんで」

「わかりました」

プリントを担いで出て行くこうとする俺を、担任は「待った」と止める。

「君心配ですね」

「なにかですか」

「他人事なのが」

本当に心配そうな顔で覗き見られる。

「被害が集中している路線、君確か使ってたでしょう。朝何時ぐらいに乗ります?」

「たしか7時半過ぎぐらい」

「時間もびつたり。うーん。大丈夫?」

朝のことが頭に過る。大丈夫だと思うけど。

「出来る限り友達と登校するようにして、もし被害にあつたらすぐ言いなさい。私に言いにくいなら保健室の伏見先生に言いなさい」

「伏見先生？」

「同性ですから、私よりは安心できるでしょう」

保健の先生が男？

保健医つて言つたら白衣の似合う美女つて相場が決まつてるのに、夢壊れるなあ。

「ま、あんまり四の五の言つても仕方ないけど、君はどこか無防備だから人一倍警戒するように。なんでも相談に乗るから。そのつもりで」

それでその場を後にした。

よくよく考えれば朝痴女に遭いましたつて言つた方が良かったかもしれない。

とつさに思いつかなかつたのは、被害者意識が皆無だからだ。

痴漢行為よりも気になるのは、あの目がイッたOL。思い出してもやっぱり気色悪い。顔は良いのに、なぜだろう。

教室に戻る。

北村も戻つていた。弁当を広げている。

「それどうしたの」

明らかにそれは誰かのお手製だった。

一昨日まで、こいつは俺と同じくパンを食べていた。

「どうしたって……なにが？」

「お前いつも弁当だっけ？」

「そうだよ」

「いや。絶対違ったから。俺が知ってる北村は購買でパンを買うのに命かけてるやつだったから。」

「スーパーで前もって買っとけと言っても「購買で買うのが楽しいんだ」って歯牙にもかけない。」

スリルの意味を履き違えてる危ないイケメンだったのに。

「誰作ってんの」

「俺」

「この世界は、本当に……。」

「……男子力たけえな」

「普通だろ？ 男なら」

「普通ですかね。」

でも考えてみれば俺も簡単な料理ぐらいならできる。

男子力を磨こうなんて意識は当然ないが、必要に駆られて最低限食うものは用意できる。

「パンつてき。乳化剤だっけ？　なんか怖くない？」

「なにが？」

「発がん作用とか」

決して知らないわけじゃなかったし、耳を塞いでいたつもりもなかったけど、知り合いに大真面目な顔でそんなことを言われて食う気が失せた。

「気にしてたら外食できねえだろ」

「そうなんだけどさ。まあ、健康に良いもの食べたいじゃん」

これは引っくり返った影響なんだろうか。

単純に北村がきにしーなだけな気もする。

でも引っくり返る前は「添加物がなんぼのもんじゃーい！」とか言ってたんだよね。

北村が弁当を突つつくのを見ながら牛乳を啜る。

「職員室でなんか言われた？」

「プリント渡された。後は特に何も。そう言うお前はどこ行ってたの？」

「ちよつと野暮用」

「ふーん」

言いそうな気配がない。無理には聞かまい。

それ以上特に話題もなかったから、先ほど仕入れたばかりの新鮮な話題を振った。

「そーいえば、今集団痴女って流行ってるらしいぞ」

「……らしいな」

「(こわいよな)」

「……」

無言の北村は弁当を食べる手を止めている。微妙に顔色が悪い。

この反応。こいつ被害者だったりするんだろうか。ちよつと探っておきたい。

「お前さあ」

「生徒会長の金折早織っているだろ？」

そうしたかったのだが、俺の言葉は遮られて北村は話題を変えてきた。

「いるねえ」

忘れられるはずがない。

ほぼ毎日顔を合わせている。

三年生で、背が高く、髪が長い。そんな人。

「あいつに頼んどいたから」

「なにを？」

「お前と一緒に登下校してくれるように」

「何してくれてんの？」

子供の面倒見といて的なのりでお前何言ってるの？

俺は小学生じゃねえんだぞ。

「野暮用ってそれかよ」

「そう。うん。幼馴染だからさ。頼みやすかった」

何気に初情報。でもそれどころじゃない。

「なんだよそれ。余計なことすんなよ。あっちにも迷惑だろ」

「家近いだろ？ 別に迷惑じゃないって」

「それはお前が言うセリフじゃない」

確かに生徒会の仕事終わりとかよく一緒に帰ってるけども。

なんなら歩いて5分の位置に家あることも把握してるけれど。

それにときめいたことも否定しやしないけどさ。

「いいよ。遠慮する。別に痴女とか、一人で撃退できるって」

「お前は痴女の怖さ知らねえんだよ」

「今朝知ったよ」

全然怖くなかった。

手叩けばびくつくような奴らだ。そもそも嫌じゃないし、相手になんないね。

「いいから、一緒に帰つとけ。な？　そうした方がいいって」

「あのなあ……」

あんまりにしつこい。

多分本当に被害に遭ったことがあるんだろう。

もしかしたら集団痴女に悪戯されたのかもしれない。

うらやま……いや、かわいそうだけど。

「会長も仕事あるし、なにより受験あるし。俺のために手煩わせるのはほんといいて」

「早織は推薦で進学するから大丈夫」

お前は推薦の何を知っているんだ。

「大丈夫とは言つてもさあ……」

渋りに渋つて何とか断ろうとしていると、段々北村の顔が暗くなってくる。目に怪し

い光が帯びて、固い口調で問いただしてくる。

「お前、痴女に遭つたんだろ……怖くないのかよ……」

「ぜんぜん。手叩いたら逃げてったぞ」

「……なんだ、それ」

予想外の言葉にがっくりと力が抜けたようだ。

「俺の空回りか？」

「次会ったらグーパンで撃退だな」

「ははっ」

北村は力なく笑った。

「お前すげえよ。俺なんて。俺なんてさあ……」と顔を覆って背中を丸めてしまう。

おいどうしたとその背中を叩くが、微かに嗚咽が聞こえてきて、これはやばいと悟った。

「おい、立てるか。保健室行くぞ」

肩を貸して保健室へ向かう。

異変に気づいた同級生が「どうかした？」と聞いてきた。

「腹壊したんだってよ」と嘘を言う。本当のことなんて俺にもわからない。

碌に歩いてない北村を連れて階段を下るのは難しそうだった。

じゃあなんだ。お姫様だったか？

男一人担げる自信ないぞ。

そうは言ってもやってみた。やっぱり全然軽くない。けど案外いけるもんだ。

筋肉がないってことは体重もないってことだから、それを考えればこんなもんなのかもしれない。なんとかいけそう。

俺が北村を担ぐのに苦勞していた間に、教室の扉付近が混雑し始めていた。

昼休みだからか、急病人が一人出ただけでも噂が飛び散るのが早すぎる。周りにいた奴が興味本位で集まったのか。

ほとんどが遠巻きにしていたが、野次馬を掻き分けて数人やってきた。女子だった。

「保健室行くんだよね？ 手伝うよ？」

「まじで？ あ……いや、いいわ。俺が連れて行く」

筆頭に立つ茶髪は何を気負うこともなくそう言う。

あんまり見覚えのない顔でも手伝ってくれると言われて嬉しかったが、よくよく考えれば女子に手伝ってもらうのはまずいかもされない。

「どいてくれ。おい、どけって。……どけオラア!!」

野次馬してるやつらに怒鳴る。

「緊急事態だ！ 見りやあ分かんだろ、跳ね飛ばすぞっ!!」

こういう時、集まってる奴に性別なんて関係ない。

怒鳴ってようやく道が出来た。走る。

「どけどけどけ!! 急患だ、どけっ!!」

人のたむろする廊下を目いっぱい叫びながら保健室に走った。

途中他クラスの先生に呼び止められたが、この際最後まで走った方が早いだろうと無

視した。

必要なら勝手に追いかけてくるだろう。

「先生っ急患というか、ちよつと聞いてください!!」

保健室の扉をほとんど蹴破つて入室する。

白衣の男性医、伏見先生は眼鏡をずり下げて俺を見ていた。

第4話

とりあえず北村をベッドに寝かせて伏見先生に事情を説明する。

恐らく北村が痴女にトラウマを持つてゐることは分かつていたが、敢えて言葉にはしなかつた。

「たぶん痴女にやられたことあるんじゃないですかねー」とか、憶測なんて口にするものじゃない。

そのせいで説明は要領を得なかつたが、先生は神妙な顔で話を聞いていた。

「後は任せて、教室に戻りなさい。くれぐれも他言しないように」
領いて保健室を後にする。

俺の言葉足らずの説明で状況を理解していたようだから、先生はトラウマのことを知っていたのかもしれない。

もしかしたらここに来る途中声をかけてきた先生も、同じように知っていたりしたかも。まあ、あつちはあつちで勝手に共有するだろう。

さあ、戻ろうと階段を昇つてゐる最中に携帯がバイブレーション。
会長から連絡だつた。

『今日、生徒会室で会議をするから体調が戻っているようなら来ること』

内容はそんな感じ。

行きますと返信する。

そう言えば、北村は会長と幼馴染と言っていた。

伝えた方がいいだろうか。

迷った挙句、北村が保健室に運ばれたことだけ伝えた。

返信はなかった。

教室に戻ったところ、未だにたむろしていた野次馬たちに質問攻めにされた。

「北村どうした？」

「なにかあったの？」

「病気？ 怪我？」

返す言葉は一つだった。

「なんかいきなり腹抑えでした。盲腸じゃね」

無責任で何とも適当な言葉だったが、クラスメイト達は納得している。

「私の弟も盲腸になった事ある。痛いらしいよ」と大声で言っていたのは、「運ぶの手伝

うよ」と申し出た奴だった。

それが随分と調子のいい口調で、他の野次馬たちも好きなように同調して経験談やら

見聞きした情報をあげつらっている。

喧騒を横目に見ながら席に戻る。

一仕事終えた達成感。うーんと伸びをした。

ふと、視線を感じる。

「……」

「……」

さっきの女子と目が合った。

彼女はじつと俺を見つめている。値踏みするような目でじいっと。

俺は不審気に彼女を見返した。その子は俺と視線があつたと気付くや否やウイंकを飛ばしてきた。

……は？

肩をすくめる。

それ以上は特に何もリアクションをしなかった。

視線を横にスライドさせて時計を見る。

食べかけで残しておいたパンを一口で頬張った。

丁度、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

5時間目の授業は国語だった。

先生が教科書を読み、黒板にはこれでもかと言うほど例文と解説が書きつけられる。

その解説がテストの大部分を占めることになるのだが、恐ろしいことに、この先生は書ききれなくなると問答無用で消しに来る。直前に書いた部分も全部真っ白にする。板書を写すにも時間と言うのは必要だ。生徒のことなんて微塵も考えてないオナニーみたいな授業だった。

オナニーすんなとどれだけ文句を言ったって先生はニヤツと笑うだけで聞きやしないので、とにかく板書に集中することになる。

当然、授業中に質問する暇なんてないから。ていうか聞いてる途中も手を止めやがらねえから。聞きたいことがあるれば大抵授業前や授業後に聞きに行かねばならない。

貴重な休み時間を削ってそんなことをしているのだ。果たしてこれが正しい時間の使い方なのか自信がない。しかし聞かねばどうにもならないことだってある。理不尽だ。

もはや習慣がごとく、この日も俺の視線は黒板とノートを往復していた。

自慢じゃないが書くのは早い。先生が書きつけるすぐ後ろをびったりついて行っている。

その代わり死ぬほど字が汚い。暗号と呼ばれるぐらいには汚い。俺がノートを貸し出せば、まずは暗号解析に勤しまなければいけない。自慢じゃないってのはそんな理由だ。

先生が黒板の端まで文字で埋め尽くした。

即座に黒板消しを掴み、手っ取り早く目の前から消し始める。

そう、目の前。なんとあのクソ野郎は、たつた今書いたところから消しやがったのだ。俺はなんとかギリギリ辛うじて間に合ったが、しかし大多数の生徒は間に合わなかっただろう。

ため息と嘆きの声がそこかしこから漏れている。

これがどれだけ理不尽か。お分かりだろうか。

席の場所によつては、先生の身体が目隠しになつてどうしても追いつけないと言う奴もいる。

俺は単に席の位置取りが良かったただけだ。どれだけ早く書いても、まず見ないとどうにもならない。一瞬でも見ればどうにでもなるが、今回みたいに見る機会なく消され

ると、むしろお前を消してやろうかと狂いそうになる。

席替えが波乱万丈になる理由はこんな所にあつたりするのだ。

そんな調子で5時間目が終わった。今日はいつになくハイペースで飛ばしに飛ばした先生は、何一つ言葉を発することなく、最後にニヤツと笑つて教室を出て行った。

その背中を見つめる俺たち。どこかから「……藁人形」という呟きが漏れた。

……ついにやるか。丑三つ時。

疲労感その他諸々溢れるクラスに、一瞬にして活気が戻る。

先生が教師を出て行くのと入れ違いになるように北村が戻ってきた。

何人か仲のいい奴が北村の元へ行き、「大丈夫かよ。盲腸だつて？」と尋ねている。

北村の表情は変わらない。けれど一瞬俺に視線を向けたように思った。あまりに一瞬だったから、気のせいかもしれない。

「まあ、盲腸かは分からないけど、ちよつと病院行つてくる。早退するよ」

「うわあ、いいなあ」

「ならお前が盲腸になつてみるよ」

一笑い起きて北村は自分の席に荷物を取りりに来た。

机の中を覗いて筆記用具を取り出す。

視線は俺の方を向かなかつたが、微かに聞こえた。

「ありがとう」

それ以上は何も言わずに北村は教室を後にした。

その背中を見送っていると、なんとも寂しくなる。

あの北村が……。

俺にとつて北村と言う男は、残念なイケメン代表のような生き物だった。

思い込みが激しく、一度目標を決めてしまったらそれに猪突猛進する男だった。

あいつの勇姿を思い出す。

購買を勘違いして「男の戦場だ」とぬかして乱闘になったことがある。最後まで立っていたあいつの手には、潰れた焼きそばパンが握られていて、なんか格好良かったのを覚えてる。

「最近は虫食が流行ってるんだ」とか知ったかして家庭科室で虫を炒めたこともあった。即行で腹壊してたけど。

校舎裏で女の子に告白された時なんてテンパりにテンパってた。挙句「買い物に付き合えばいいの？」と素で言ってしまったて、女の子を泣かせてしまった。

次の日には『女の敵』になっていて、ついでにモテない男子から『男の敵』認定もされてたっけ。

入学してたった一年足らずだが、あいつは面白い奴だった。

この三年間でどれだけとんでもないことをやらかすのだろうと楽しみで仕方がなかった。なんなら退学になるんじゃないかって微かに思ってた。

だというのに……。北村、お前……。

さようなら、人類の敵・北村。

ギャグ漫画みたいなお前にもう会えないのは残念だけど、俺はこっちの北村と仲良くやってくよ。

言い知れない寂しさを感じている間に休み時間はもうわずかだ。

次で今日最後の授業。これが終われば放課後になる。今日は生徒会に行かなきゃいけない。

金折会長は今日来るんだろうか。

北村がああなったし、そのことを伝えはしたけれど携帯には未だに何の返信もない。

幼馴染だと言うから北村に付き添っているのかもしれない。

もし会議がないようなら前もって連絡があるだろうから、放課後まで待てばはつきりするだろう。

いや、他の役員に言伝を頼んで会長抜きで会議する可能性もあるか。

こうやって色々考えてみても、結局放課後にならないと分からないな。

チャイムが鳴る。

先生が^ぶ入ってくる。
教科書を取り出す。

今日最後の授業は英語だった。

第5話

「ちわーっす」

挨拶もそこそこに生徒会室に入った。雑多感あふれる小部屋。もはや汚部屋と言つてもいい。そんな場所。

室内にはあちこちにダンボールが積んであつて、よくよく目を凝らすと何に使うんだか分からない小物がたくさんある。

ダンボールの中にはいつのしか分からん紙類や、演劇にでも使つたのか衣装が入つていた。

何でこんなもんがあるんだと思いつつ、ストレスがピークに達した時にコスプレして遊んでいる。男も女も関係なく役員皆でだ。壊れかけで頭がおかしくなっているから抵抗なんてない。一種の自己防衛機能が働いているのだろう。

そんな感じで案外役に立っている衣装は置いておいて、紙類はよくよく見ると何気に重要なことが書いてあつたりするので下手に手を付けられない。手を付けるならまず捨てて良い資料とそれ以外を分別しなければいけないのだが、そんな時間は役員の誰にもない。

片付けようにも何を片付けたらいいのか分からないのは、歴代の役員の悩みの種だと言う。

部屋の真ん中に長机と全員分の椅子がある。唯一会長の席だけは個別に置いてあるが、この特別扱いは会長だからこそだろう。文句なんて出るはずもない。

いつもなら飲み物や会議の資料が置いてる長机には、今はスポーツバッグがでんと置いてあって、その前に短髪の女の子が座っていた。その人は生徒会室だと言うのに教科書に噛り付いている。珍しいこともあるもんだと目を丸くした。受験が近いとはいえ、飄々としていたこの人が、いつの間に勉強に目覚めたのだろうか。これも引っくり返った弊害だろうか。

「ちわっす」

「……ちわ」

驚いた。これほど弱っている姿はまだ一度しか見ていない。

いつもはもつと声大きいのに、そのらしからぬ声音には病気じやないかと一瞬動くってしまう。

しかしマスクをつけてないのでその可能性は低そうだ。

では、果たしてどうということなのか。確かめるためにじつと見つめる。

「……」

「……」

見つめている内に、段々とその人の頬に赤みが差した。

教科書の影に顔を隠す。いつだか見たことのある行動にちよつと安心して、それでわかつてしまった。

「テスト勉強ですか」

「……そう」

「熱心ですねえ。ちなみに科目は？」

「……英語」

「ふーん。で、本当のところは？」

「…………0点取ったよ！ 悪いかよ!!」

げろった。

「八つ当たりはかつこ悪いですよ」

「うっ……」

「そもそも赤点とか、仮にも選挙で選ばれる生徒会役員としてどうなんです？」

「うう……」

「どうなんですか？」

「……面目ない」

しゅんとしてしまった。

苛めるつもりはなかったのだが、正論をまくしたてるといじめに近くなる。自重しなければ。

しかし変わってない。

逆境に弱いところとか打たれ弱いところとか。案外泣き虫なところとか。

世界が引っくり返ってもこの人はほとんど変わってない。うちの母親と言い、個性豊かな奴は変わらないのか？

いや、それだと北村が変わってるのはおかしい。あいつほど個性的な奴はいない。北村……。

「……」

「……なんだよ？」

「いえ、変わらないなと思って」

「人のこと馬鹿だと思ってる馬鹿にしてんのか!? どうせあたしは馬鹿だよ、バーカ!!」
言うだけ言って、机にガバツと伏せる。不貞寝だ。拗ねてしまった。

言動が逐一可愛いこの人は土屋葵と言って、こんなんでも立派な生徒会の役員だ。役職は副会長。

運動が出来る、格好良くて、面倒見が良くて頼りになる。そんなもって生徒会の副会

これはやられると、きたる未来に胸が高鳴った。カモン、ボディタッチ！
めくるめく夢見る未来。

しかし、夢にまで見た未来は訪れない。

いつもなら何の躊躇の無い葵先輩は今日に限って躊躇していた。

俺の胸元に手を伸ばした姿勢でピタッと硬直している。

いつもなら散々揺さぶられるのだが、今日はそれ以上してこなかった。

なんだ？ と疑問に思っていると、葵先輩はプルプルと震えながら椅子に座ってしま
う。

「どうしたんすか？」

「うるせえ。………男に掴みかかりそうになった。あぶねえ」

ぼそつと呟いた言葉は聞こえていた。

元の世界で言うとうと、男が女に掴みかかるのはどんな理由があってもアウトだ。法律が
どうこうではなくモラルとか道徳的に。

例え親しい間柄であっても、なんなら同意を得られたとしても、中々そんなこと出来
る奴はいないだろう。

引っくり返ったこの世界では、女が男に掴みかかるのがそういうことになる。

ということは、俺と先輩が散々友好を深めたじゃれあいが今後は不可能ということ

だ。がっかりする。死ぬほどがっかりする。北村がああなった以上にがっかりした。その本心を押し隠して軽愚痴を言おうとした。もう少し煽れば行ける気がしたからその期待もあつた。

けれど、俺が何か言うより早く声がした。入口の方から。

「こら、副会長コンビ。なにやっているの」

腰より長い髪が揺れている。

凜と透き通つた声は、たとえここが体育館であつたとしても、どれだけ離れていても、何不自由なく聞こえることだろう。

なんの根拠もない確信だが、あの目を見るとそう思つてしまう。

扉の前に立つ伶俐な目が俺たちを見ている。

「あたしは何もやってねえよ。こいつが——」

「こらこら葵。下級生の、しかも男の子にむきにならないの。あなた三年生でしよう？ 見本にならなきゃね」

まるで土屋葵とはこう扱うのだと、見本のように諭した。

葵先輩は何も言えない。悔しそうに教科書に噛り付いた。

それを横目に見て挨拶した。

「いんこちは」

その人はニコツと笑う。

その人——生徒会長・金折早織は、俺の知ってる笑顔と全く同じ表情で俺に問いかけてくる。

「身体はもういいの？」

「ええ。大丈夫です。ご心配おかけしました。……会長、北村のことですけど——」
手で制された。目が言っている。『その話は後で』

ならば何も言うまい。俺は口をつぐむ。会長は葵先輩に背を向けて俺と向かい合っ
た。

「あまり葵をからかわないでね。0点取って落ち込んでるのよ」

愉快そうな口調で、普段から知的に光る目には、少しだけ悪戯つ気が含まれている。

「うぐつ」と唸った葵先輩を見て、その笑みは深まった。

「多少の点数なら部活動の成績で大目に見られているけど、さすがに0点を取っては先生方も擁護できないのよ。いくら小テストとは言えね。だって0点なのだから。分かるでしょう？ 0点。私は0点は取ったことがないから想像できないのだけど、きつととても屈辱だと思うの。それに恥ずかしいと思うわ。だって0点ですもの。0点は選ばれし者しかとれない点数なんだから、むしろ誇るべきって友達が言っていたんだけど、私は理解できないわ。だって名前書かなければ0点になるでしょう？ だから0点

を取るのはあまり難しくないと思うのだけど、あなたは どう思う？」

俺は頷いた。

会長の言うことも、お友達の言うことも理解できる。

その上で俺は自分の考えを述べた。

「名前を書いて、真剣に問題を解いて、その上で0点ならむしろ選ばれし者しか取れない点数だと思えます」

「そうね。その通りだわ。というわけだから葵、あなたは選ばれし者よ。誇っていいわ」
言い切った会長は背を向けたまま葵先輩の言葉を待った。

しかし何も聞こえては来ない。不審に思つて振り返る。葵先輩は机に突つ伏して小刻みに震えていた。

俺と話すためにわざわざ背を向けた会長は気づかなかつたが、俺にはずっと分かつていた。

今になって気づいた会長は慌ててフォローに走る。

両手を合わせて拝むように謝っているけれど、葵先輩は一向に顔を上げない。

ついに予先は俺に向き、「どうして教えてくれなかつたの!？」なんて聞こえてきた。

いやいや、会長が長々話している時にはもうこうでしたよと教えてあげる。

「葵〜ごめんねえ〜」と会長の方こそ泣きそうになりながら必死に謝っていた。

この光景もいつか見た。この人も変わってないなあと思って、俺は笑った。

第6話

葵先輩を泣き止ますのは簡単ではなかった。

どれだけ会長が謝っても、どんな言葉を重ねても泣き止むことはない。駄々っ子みたいにイヤイヤと首を振っている。そんなことをしている間に人は集まり始めていた。時間がない。さて、どうやって言うことを聞かせてやろうか。

「先輩情けない姿見られちゃいますよ」

「……」

反応がない。死んでるみたいだ。

「後輩に見られていいんですか？」

「これでも反応がない。まじで死んでる。」

「こんにちは……。あれ、葵ちゃんどうしたの？」

「いつものあれです」

「あれかあ」

いよいよ他の役員たちが集合してしまう。案外慣れている三年生はともかく、二年生の好奇心な目が突き刺さっている。いい加減泣き止んでくれないと会議の進捗にも影響

する。くっそ困る。

会長の助けを求める視線を受け、俺は袖をまくって一肌脱ぐことにした。

とは言っても、引っくり返ったこの世界でこれだけ有効なのかはわからない。一か八か賭けの要素があった。

「……会長」

「……なに？」

「……葵先輩の好物はイチゴパフェですよ」

「……え？ お肉じゃなくて？」

「……前にこっそり食べてる所を見たんです。間違いありません」

青い空高く、日差しは強いが風が涼しい日だった。

美味しいものが食べたくて、ちよつと遠めのレストランに行った。

そこで鉢合わせした。

イチゴパフェを食べていた葵先輩と昼飯を食いに来た俺。

見つめあう俺たち。数奇な運命で結ばれた俺たちはそのまま昼食を共にして、それどころか奢ってもらった。

先輩としての見栄があつたのだろう。固辞する俺に「いいからいいから。奢らせろっ」と快く奢ってくれた。

……は？ 口止め料？ 知らない知らない。そんな情けないことしない。先輩は。奢ってもらったお礼にと、後日イチゴパフェを差し入れて持つて行って、結果念願のボディタッチだ。

思えばあれが初めてのボディタッチだった。イチゴパフェは俺たちの関係を深めてくれたキューピットなのだ。

当然だが、そんな事情は省略した。

半信半疑な会長は顔を伏せて沈黙を保つ先輩にこつそり耳打ちする。

「……今度イチゴパフェ奢るから泣き止んで」

直後、先輩は勢いよく立ち上がる。座っていた椅子が倒れた。派手な音がした。

気にかけることなくぐるりと頭が回転する。俺を見る。涙はない。カラツカラに乾いていた。

一拍見つめあう俺たち。俺はニコツと笑い、先輩は大きな口を開けた。

「言うなつて言つたらろおとおおおおおお!!?」

いよいよ先輩は俺に掴みかかってきた。やってみるもんだ。カモン、ボディタッチ！しかし、やったーなんて思っている余裕はなかった。呆気なく押し倒されたから。

あれ？ そう思った。いつもなら先輩に倒されるなんてことはない。このぐらいの勢いならどうつてことないはずだった。

けれど現に今、先輩は俺の上に馬乗りになつてゐる。その顔は涙目で、眦は赤く、頬は紅潮している。なんかエロい。

いや、そこじゃねえ。それも重要だけでもと考えなきやいけないことがある。

あれ？ 俺こんなに弱かつたつけ？

先輩こんなに強かつたつけ？ あれ？

両腕を掴まれる。

覆いかぶさるようにして、先輩の顔がすぐ目の前にある。

恥辱を耐えて歯を食いしばつてゐる。ふーっふーっど荒い息が顔にかかつた。微かにレモンの匂いがした。

拘束された両腕に力をこめる。

一瞬持ち上がりそうになる。すぐにそれ以上の力で押し返された。期待しただけ落胆も大きい。まったく敵わない。男の矜持が粉々だ。

いくら運動部とは言え、いくら上から圧されるとは言え、いくら葵先輩とは言え。

まさか本気で抵抗してまるで歯が立たないとは思わなかつた。これが男と女の力の差なのか。

知らず唾を飲み込む。先輩の険しい顔が俺を見ている。これだけの至近距離だから、その目に反射した俺の顔がはつきりと写つた。

先輩が何かに気づいて目を見開く。「あ」とか細かい声が声が漏れた。同時に腰を浮かす。

「い、いめ——」

言っている途中で、会長が先輩を背後から羽交い絞めにした。

「何してるの葵っ!!」

すぐに引き剥がされる。

ほとんど間を置かず、三年生も二年生も俺たちの間に割って入った。

主に女子が葵先輩に、男子が俺の元に。

女子は口々に先輩を諫めて叱り、男子は俺に心配する声をかけている。

何も答えられず呆然としていると、二年生の男子が肩を強く掴んだ。いてえつ。顔を顰める。

「平気か!?!」

「いや、痛いつす」

いつもやる気になさそうに見える人だ。

実は中身は全然熱い人で、時々会長と意見の食い違いから口論している。皮肉屋の氣質も相まって激戦になること請け合いだ。

「平気です」

「本当に？」

「うい」

立ち上がる。埃を払う。

会長に羽交い絞めされている先輩は、今にも崩れ落ちそうに脱力している。実際、會長がいなかつたら崩れていただろう。

その表情は後悔に苛まれてる。死にそう。こんなことで死ぬな。生きろ。

「葵先輩」

呼び掛けに先輩は顔を上げた。

「すま——ごめんなさい」

たぶん「すまん」と言おうとしたんだろう。

先輩はいつもそう言う口調だから。

けど言い直した。もつときちんとした言葉遣いに。

そこまでするほどのことか？

疑問に思う。

周りの空気が冷えている。それほどのことなのだろう。

「いやー、気にしてないっす」

一瞬先輩の顔が輝いた。

でもすぐ暗くなる。周りの目が突き刺さる。

「……………ほんとうに?」

「ほんとうに」

チラチラと上目遣いなのが非常に愛くるしい。

それだけでなんでも許せる気がする。実際許す。

「ていうか俺の方が悪いでしょ。約束守らなかつたんだから」

「それは……………だけど……………」

約束が何なのか、周りの役員たちは首を傾げた。

俺は先輩の目の前まで歩み寄ってその肩に手をかけた。

何をされると思ったのか、目を瞑った先輩は小動物みたいにびくつと怯える。

「今回は俺が悪いから許すも何も俺が謝らなきゃいけないでしょうよ。すみません先輩。約束守らなくて」

「いや……………。そんなこと、別に……………」

「今後はキツチリ守らせていただきます」

息を吸い、その場の皆に聞こえる音量で断言する。

「先輩がイチゴパフェ好きなことは誰にも言いません!」

時が止まった。止まったのは先輩だけだ。

他の皆は怪訝そうに俺たちを見ている。「え、そんなこと？」と誰かが呟いた。

「ましてや知り合いを避けてこつそり遠くの店まで食べに行つてるなんて、口が裂けても言いません！」

先輩は俺を見つめるばかりで何も言えない。続ける。

「パフエ食べてる時の顔が本当に可愛くて可愛くて、こつそり写真とってますけど、これも誰にも見せません！俺だけで楽しみます！」

言いながら携帯を背後の役員に渡した。

先輩の口がパクパク開き始めた。

「お、お………」

「パフエだけじゃなくて甘いものなら大体なんでも好きなことも秘密です！」

「お、お………!!」

羽交い絞めを解こうと暴れる先輩を会長がきつちり抑え込む。

後ろでは男子役員たちは大体見終わつたらしく、俺の携帯は女子役員に手渡された。誰かが言った。

「かわいい………」

「………っ?! ……っ!!」

先輩はじたばた暴れている。

真つ赤に染まった顔を両手で隠そうと頑張るが、会長が絶対許さない。直視させる。現実を。

「かわいい」「可愛い」と連呼され、息も絶え絶えの先輩。

止めはこの人が刺す。

「かわいいっすね先輩」

皮肉屋の二年生が、鼻笑混じりにそう言つて、葵先輩の羞恥心は限界に達した。ずるずると崩れ落ちる。両手で顔を覆っている。耳まで真つ赤だ。

俺は繰り返す。

「任せてください。誰にも言いませんからー」

親指を立ててサムズアップ。

そう言えば、これって外国では侮蔑のジェスチャーになるらしい。

いや、そんな意図がないことは先輩も分かっているだろう。

先輩、俺マジ先輩のこと尊敬してますから。

まじ好きっすから。だからまじ気にしないでください。

ほんとかわいいっす先輩。

第7話

葵先輩はトイレに駆け込んだらしい。個室に籠城を決め込んで返事すらしないこのこと。

皮肉先輩が止めを刺した後も、可愛い可愛いいつて追撃食らわせた人が妙に生き生きと報告してきた。爛々と輝く目をパチパチさせて、「天の岩戸作戦いっちゃう？」とルンルン身体を弾ませながら誘ってくる。ポインポインと胸まで揺れていた。

「いいですねえ」とその気持ちには心の底から同意しつつ、でも女子トイレに入ってどんちゃん騒ぎはさすがに出来ねえなど現実的になって考えた。俺は男だ。

「でも俺は女子トイレに入れませんよ」

「えー。誰も見てないしいいよー。校内ほとんど残ってないよ？ なんならあの辺通行止めするからさ。二人で葵ちゃん誘い出そうよ。絶対楽しいって」

非情に魅力的なお誘いだ。懸念していた障害は粉碎されている。今ならほとんどノーリスクで女子トイレに入れるのか。あの聖域に、男が、入れるのか。

どんなことをして誘い出すのかは議論の余地がある。けれど葵先輩を誘い出すと言う一言だけで逸る気持ちが止められない。

想像してみる。

誰も居ない女子トイレの中。一番奥の個室に先輩が籠城している。

何をしているのかは知らないが、多分顔は真っ赤だろう。押し掛かれた時の顔を思
い浮かべる。

俺はトイレの外観をつぶさに眺め、意を決して足を踏み入れる。洗面台が二つ。大き
めの鏡に俺の姿が映っている。左右には個室が並んでいて、一番奥の扉だけが閉まつて
いる。

あそこに先輩が……。

心臓の音を聞きながら、ゆっくりと汗ばんだ手を伸ばす。

手がドアノブに触れるか触れないかと言う所で、なぜか扉は独りでに開き始めた。

ギイツと鈍い音を立てる扉は、まるで誘っているようだった。期待と緊張でつばを飲
み込む。

扉が開ききったその先には――。

「ねえ、行くこうよ」

「はっ……!!?」

妄想を終わらせたのは、現実からの誘いだった。

ただ想像していただけなのに、今までにないぐらい心臓は早鐘を打っている。

それもそのはずだ。今回はちよつと材料が揃い過ぎていた。

女子トイレという聖域。男が足を踏み入れる背徳感。待っているのは葵先輩。トイレに逃げ場はなし——。

——あ、これダメだ。

興奮する。想像するだけですつごい興奮する。これはだめだ。絶対ダメだ。行ったらたぶん俺の中の何かが変わる。

その先に何があるとか想像すらできない。ただ間違いないのは、行くのはよした方がいいと言ふことだ。

「いかねっす」

「いこうよ」

「いかねっす」

「いこうよ」

「ぜったいいかねっす」

ルンルン先輩はしつこい。

その先に何があるのか、この人は分かっているのだろうか。俺には分からない。

「でもさ〜絶対楽しいと思うよ」

「そっすね」

んなことは分かっている。

でも行くのは危険だって魂が叫んでるんだ。

ポイントオブノーリターンなんだ。行っちゃったら後戻りできえねえんだよお！

「葵ちゃんの可愛いとこ見たくない？」

「見たい」

「今行ったらめっちゃ可愛いと思うよ」

「どうして？」

「だって女子トイレだよ？ 来るわけないって思ってるよ。めっちゃ油断してるよ。そ

こに君が行くんだよ？ 君がっ」

悪魔が囁いてくる。可愛い顔して囁いてくる。

一理も二理もあることを囁いてくる。

「葵ちゃんの、無茶苦茶可愛いとこ、見たくない？」

「むっちゃ見たい」

「じゃあ、行くつきやないっしょ？」

歯を食いしばって耐えた。

悪魔の囁きを、これ以上……！！

一向に頷かない俺に焦れて、ルンルン先輩は俺の背後に回った。

座る俺の頭を後ろから抱え込む。がくがくと前後に揺らされた。「行こうよ」と声がする。

後頭部を包む柔らかい感触。

籠城する葵先輩とか視界が揺れて気持ち悪いとか。それどころじゃなかった。

一つ、気づかされた。気付きたくなかった。……こいつノーブラだ。

「行くつきやないよね？　ね？　ね？」

「行きまっす」

それ以外を言っていたら俺は多分死んでたと思う。

今この感触から逃げるには、この先のノーリターンを受け入れるしかない。

だからしようがないんだと自分に言い聞かせる。

「やたっ。けつてーい！」

「わーい！」と諸手を挙げて喜ぶ先輩。

対して俺はそわそわしていた。口でいくら拒否しようが、本心では望んでたんだから。

これから来るであろう未知の快樂を想像して気分は落ち着かない。まるで脱童貞に向かう童貞のような気分だった。

「じゃ、いーいー」と先輩は浮き浮き急かしてくる。

完全に悪魔に魅了された俺は腰を上げかけた。その時だった。

「いらっ」

その一言と共に、ゴチンとルンルン先輩の後頭部にチョップが置かれた。

強い口調と凜とした雰囲気を感じ、自然と背筋が伸びる。目が覚める思いだった。

「いた〜いつ!!」

「後輩を悪の道に誘わないの」

「んや〜早織〜!」

会長はいつも俺の目を覚まさせてくれる。

指針となって俺の進むべき道を示してくれる。女神みたいに。

俺の心は浄化された。一生ついて行きたい、この人に。

「女子トイレに男子が入るのも、男子トイレに女子が入るのも、ダメ」

「う〜。お堅いこと言ってる。自分だってちゃっかり校則破る癖に〜」

「それとこれとは話が別よ」

胸を反らす会長の堂々たる振舞の前に、ルンルンは睨むばかりで何も言えなくなる。

「葵は放っておきましょう。今行っても逆効果でしょうし。いじめ過ぎたわね……。先に会議を始めましょう」

会長の言うことは絶対だ。というか俺たち以外は全員そのつもりでスタンバっていた。

俺たちが話している間、会長は資料の準備をしていたらしい。

俺も待機列に続く。

ルンルンだけが「えー」と不満そうに唇を尖らせている。「裏切り者っ」って目で見られた。

悪魔は呼びびじゃねえんだよデビルルン。

「なにか？」

いつまでも駄々をこねてそうなルンルンだったが、会長がにつこり笑うだけで席に着いた。

その顔は青ざめているような気がする。悪魔を恐れさせるとか、会長さすがつす。

「今日の議題は昨日に引き続き痴女被害について。時間も押してしまったことだし、残りの時間は有意義に使いましょう」

葵先輩をいじるのは有意義ではない、と言う意見には物申したかったが、いい加減生徒会の役割を全うしなければいけない。

葵先輩をいじっているだけで一日終わるとかはさすがにない。

配られる資料に目を通しながら、頭の中のスイッチを切り替える。

さ、仕事しよう。

第8話

有意義な時間は一時間足らずで終わった。

会長が痴女被害について私見を述べて、それについて生徒会としてどういう方針を取るのか。一体何ができるのか。現実的な案としては三つだった。

1. 学校集会を開き注意喚起

2. 生徒会だより発行。痴女被害の多い時間帯や友人と登下校するなどの対策を周知

3. 保護者へ向けたプリントを発行し注意喚起

妥当な案だった。ちなみにこの三つは皮肉先輩が提案した。

これ以上を求めるなら、それは生徒会ではなく大人の仕事になると言う皮肉先輩の発言に、会長含めて誰も異論を挟まず、現状生徒会としてこれ以上出来ることはない。教師と協力して今後の活動を模索していくと言う結論に達した。

この会議に於いて、この結論に達する過程が普段のそれよりあまりに順調だったものだから、また会長たちの間で一波乱あるのではと身構えていた分拍子抜けした。

しかし、聞いたところでは昨日、俺が休んでいた時に実は一波乱あったのだとか。

今日の会議はその決着をつけるために開かれたのだが、思いのほか会長と皮肉屋先輩の戦意が低く、あつという間に決着がついた。皮肉屋先輩の勝ちだそうだ。

勝った先輩は勝利に酔うこともなく淡々と帰り支度をしている。

「それじゃあお疲れ様です」

「ええ、ご苦労様。気を付けて帰ってね」

穏やかにそんな会話までして去って行った。犬猿の仲と言う程ではないが、いがみ合う二人にしては珍しいことだ。帰る先輩の背中をまじまじ見てしまう。

「あれってどういうことですかね？」

頬杖をつくデビルンに聞いてみる。物思いにふけていたデビルンはチラツと横目に見てきて、訳知り顔で頷いた。

「葵ちゃんって可愛いよね」

「確かに」

つまりそういうこと。

わざわざ言葉にするまでもない周知の事実だった。

やがて役員たちは会長と俺とデビルンの三人を残して帰宅した。

しかしまだ一人、葵先輩が戻っていない。

デビルンは先輩を待っているようだ。俺はデビルンが消えるのを待っている。

窓の外を見ていた会長がため息交じりに呟く。

「鍵、どうしよう……。葬はまだトイレかしら？」

「たぶんね。……よし。副会長、行くよ」

「行かねえよ」

これ幸いと悪魔は囁く。失敗したやり口を繰り返すのは頭が悪い。俺は敬語をやめた。

もう目は覚めた。さっきまでの興奮は嘘のように波引いている。今は、下品な言い方をするなら賢者モードだ。

いや、別に出したわけじゃない。神気にあてられて邪気がなくなったのだ。

「デビル——先輩一人で行って来たらどうです」

「うん分かった。でもその前に、今なんて言おうとしたかあつちで話そっか」

基本頭悪いのに変なところで目敏い。

デビルと言いかけたのに気づいたらしい。まさか原型がデビルンルン先輩とは夢にも思いうまいが。

「先輩に舐めた口聞いて〜」と引つ張ってくるのを全身の力で抵抗する。

この人は虚弱体質だ。元々力が弱かった。性差が引っくり返っても早々負けることはなさそう。しかし、そうは言っても性別のアドバンテージはデカい。長々引つ張り

合つてると先に体力が切れかけたのはこっちだった。

これはいかんと喝を入れる。ノーブラ健康法なんかに負けてたまるかよ！

「すんません。デビルン年上つてこと忘れてました」

「言つた！ 今デビル言つた！ そーゆーところが舐めてるつて言うの〜!!」

なりふり構わず体重使つて引つ張つてきた。

さすがにそんなことされたら負ける。だけどデビルンは綱引きに勝つた後のことを考えていなかった。

デビルンは仰向けに倒れて、俺がその上に覆いかぶさる。

「おう」

「わ、おもつ……」

お互いそんな声が漏れた。

俺の胸の下でたわわに実つてる胸がむぎゆつと潰れている。

マシユマロみたいに柔らかい。これだからノーブラは下半身に悪いつて言うんだ。

「……遊ぶのは、後にしてもらえるかしら？」

頭上から呆れた声が聞こえる。

会長がデビルンの頭上に立つて、冷たく見下ろしていた。

命令するような鋭い口調で指示する。

「デビルン、葵の様子を見てきて」

「デビルンいうなあ!!」

俺の下から這い出したデビルンは「ペー」と舌を出して駆け出した。

ぐちぐちと文句は言いつつ、結局は聞いてくれる。根は素直なのだ。中身が少し幼いだけで。

「いくつなの、あの子……」

会長の呟きに同意する。あれで高三は嘘だろう。いいとこ高一ぐらい。

デビルン先輩を一言で言い表すと、『天然を装った策士を気取る天然娘』ってところだ。

間に一つ変なのが入ってるだけで実態はただの天然でしかない。しかも無自覚天然。俺の周りにはそう言うのが多い。

葵先輩にデビルンルン。その二人を天高く突き放す生粋の変態北村。

三人とも高校に入学してからの付き合いだ。この高校変なのが多いな。

デビルンを待つ間暇になった。

俺は席に座って、会長はダンボールを漁っていた。

「紅茶でも飲みましようか」

電気ケトルを取り出す。

白い小さなやつ。学校に備え付けられてるはずもない。会長の私物だ。

「いいんですか、校則違反でしょう」

「いいのよ。私が飲みたいんだから」

似合わない傲慢っぷりについて笑った。会長も微笑む。

こぼこぼと湯の沸く音が静かな生徒会室のBGMになった。

会長は「今日はどれを……」とストックしてあるティーバッグを品定めしていた。

俺は普段紅茶を飲まないのどれがいいとか意見は言えない。言っても「味わかる？」とからかわれる。緑茶派なのだ。

シユコーツとケトルの注ぎ口から蒸気が噴き出した頃、パタパタと上履きの足音が聞こえる。

一瞬、教師かと思つて腰を上げたが、よくよく聞くとこの足音はデビルンのものだったので胸をなでおろした。

少しずつ大きくなる足音は、扉の前で一度止んだ。ひと時の静寂を経て……、

「うわーん！ 葵出てきてくれなーい！」

と悲痛な叫び声と一緒に扉が開いた。

悲しみに打ちひしがれているのか、おぼつかない歩き方。表情は暗く俯きがちだ。

「私悲嘆に暮れています」と自己主張が激しすぎてまるつきり大根役者だった。

もっと上手くできないのかと思うほど下手くそな演技だった。演技がばれてる時点でピエロにしか見えない。いつそ白化粧でもしてきたらどうだ。

「出てきてくれないんですか」

「うん」

「困りましたね」

「うん。だから副会長一緒に来て？」

再三聞いた言葉に、つい吐き出す。

「デビルがっ」

「また言ったな!？」

まるで先ほどのやり取りをリピートしているようだった。

デビルは「先輩の威厳〜！」と頭の悪いことを言っている。

二度目の開戦は、さすがに会長が許さなかった。

「では、副会長。あなたが行ってきなさい」

毅然とした物言いに、若干キレているのが見て取れた。

素直に頭を下げる。「なんで怒ってるの……」とデビルの氣勢が猛烈に削がれた。

「ルンはこっちへ。一緒に紅茶を楽しみましょう？」

「ええ……。ちよつと遠慮……」

「どの道あなたをここから出すわけにはいかないのよ。何するか分からないじゃない」
会長に捕まったデビルンは「あー!!」と大声を上げて逃げようとする。

「なんであつちが良くて私がダメなの!!」と文句を言っている。いや、お前今行ってきたじゃん。

まあ、この期に及んで何を言おうが、虚弱体質が逃げられるはずがない。

この間に俺はトイレに向かう。

「あ、紅茶飲んだらトイレ近くなるじゃん！ トイレ行かせてよ！」

「まだ飲んでないでしょう」

「今飲む。はい、いただきます！」

「ちよ、それまだ——!?!」

背後で紅茶を噴き出す音が聞えた。咽る声と心配する会長の声。

たぶん湧いたばかりの紅茶を一息に呷ったんだろう。

火傷したんじゃないかあの馬鹿。まあ火傷したとしても口の中だからまだましだ。

しばらく物食べる時は地獄の苦しみだろうけど。

扉越しでも聞こえる喧騒から意識を外してトイレに向かう。

葵先輩、外から呼びかけて出てきてくれないかな。

第9話

紆余曲折あって、葵先輩はトイレから出てきたが、俺は少し水に濡れた。

その後、デビルンと一緒に二人は帰り、今、生徒会室には俺と会長の二人だけが残っている。

窓から差しこむ夕日は少しずつ弱くなっている。橙色に照らされる室内は暗がりへと落ちかけていた。もう日暮れだ。部屋の電気をつけ、机の上のそれを認識した途端、漂う紅茶の香りが鼻腔をくすぐった。

俺の前には湯気の立つ紙コップが置かれている。一口、口に含むと、緑茶とは違う何とも言えない味が口の中に広がった。元は同じ葉っぱのはずなのに、どうしてこんなに違うのだろう。

会長も自分の席で紅茶を楽しんでいる。微笑みを浮かべ、たまに堪能するように吐息をついた。それが何とも色っぽい。同世代とは思えない色気がある。

その大人びた顔を見ながら、刻一刻と過ぎる時間に焦りを覚えた。俺から聞くべきだろうかと少し考える。

会長が自分から言うのを待っていたのでは日が暮れてしまうかもしれない。

どうせ帰ってる途中で暗くなるだろうが、日のあるうちに帰りたいたいと思う気持ちがあった。

窓の外を見つめる。太陽はもう地平線の向こうに消えかけていた。

俺の視線を追いかけた会長が囁くように言った。

「暗くなっちゃうわね」

頷く。昼と夜の境目が迫ってきている。黄昏時と言うんだっただか。

魑魅魍魎が動き出す時間だ。そうでなくても悪人は暗闇の中で悪事を企んでいる。

俺の心中を察してかは知らないが、「安心して」と会長は続けた。胡乱気に返事をす

る。

「はあ……?」

「一緒に帰りましょう」

元々、生徒会の仕事がある日は一緒に帰ることが多かった。

家がすぐ近くにあるから自然とそうなった。

これをわざわざ言葉にしたということは、本題に入ったということだ。

会長が紙コップを置く。湯気はもう出ていなかった。

「さて……。光のことなんだけど」

「誰ですか?」

聞き覚えの無い名前だったから聞き返す。

出鼻をくじいた形になった。会長は思わずと言ったふうに微笑んだ。

「北村光。下の名前は知らなかった？」

「初めて聞きました」

実際はどこかで耳にしたことがあるかもしれない。

けど俺にとって北村は北村で、クラスメイトもみんな北村と呼んでいる。

いきなり名前を呼ばれてもすんなり結びつかない。

「知っていると思うけど、病院に行ってたわ。大丈夫だつて連絡があつた」

「そうですか。そりゃあ何よりです」

「あなたが保健室まで運んでくれたんでしよう。ありがとう……つて私が言うのも可笑しいわね」

くすくすと笑いながら、その目は笑っていないかった。

その奥にある機微まではわからない。答えるかわりに肩をすくめる。

可笑しいとは言うけど、北村曰く幼馴染らしいから別にいいんじゃないだろうか。

それがどんな関係かはよく分からない。でも家族みたいなものなのだろう。俺は家族に縁がないからなにがどうとは言えないけど。

「北村が昼に何か言ってますでしたか？」

「ええ。あなたのことを頼むって」

顔を顰める。とことん子ども扱いされてるなと思った。

「一緒に登下校してやってくれて頼まれたわ。急だったから、返事はただけ」

「それは気にしないでください。あいつが変な気をきかせたんです。迷惑でしょう。無視してくれていいですよ」

「とは言っても、それで余計体調を崩されでもしたらと思うと気が重いわ」

頼み事一つ断られたからって体調崩さないだろう。どんだけ繊細なんだ。

会長は手元の紙コップを覗きこむ。もう残っていないらしく、物欲しそうに手首を回してコップを傾けた。

「飲みますか？」

俺のはまだ半分ほど残っている。

全部飲み切れるか不安だった。丁度いい。

会長はピタッと動きを止め、視線を上に逸らして黙りこくった。

わずかな沈黙の後上目づかいで尋ねてくる。

「いいの？」

「いいですよ」

紙コップを手渡した。湯気こそ出ていないがまだ暖かい。

しばらくじつとたゆたう水面を眺めていたかと思うと、意を決したように呷った。一気飲みだ。

「ふう……」

無造作に口元を拭っている。うつすら赤面しているようだった。

さすがにこうまでされて気づかないほど鈍感じゃない。

たぶん間接キスを意識したのだろうが、そこまでと思うほど過剰な反応だった。

「……ありがとう」

「いえいえ」

何となく沈黙してしまう。

変な空気が流れた。おかしいな。なんでこんなに意識されてるんだろう。

イメージの中の会長は常に泰然としていて、ちよつとやそつとのことじゃ動揺しないし、素直な感情を表に出すこともまれだった。

今日の会長はどういう訳か、怒ったり笑ったり、素直な顔を見せている。こうやって照れる姿を見れるなんて夢にも思わなかった。

葵先輩ならともかく、会長に異性として見られるのは慣れない。背中がこちよばしい。

高嶺に咲いていた花が、突然手のかかるところに花を咲かせてしまったようだ。眺め

ているだけで満足だったのに、目の前で咲きほこられては困惑するしかない。

「……それで、ね。痴女のこともあるし、あなたと登下校してもいいかなって思ってるの」

「生徒会帰りはともかく、それ以外も意識して合わすんですか？ 面倒くさくありません？」

会長は苦笑した。

考える間が空く。ゆっくり口を開いた。探るように慎重な口調になっていた。

「光は、理由は教えてくれなかった。どうしてあなたと一緒に帰る必要があるんだろう？ 少し考えてみた。もしかして、私のこと好きなのかなって思ったりした」

暗記していた文を朗読するように、会長の言葉には抑揚がなかった。その目は記憶を振り返るように焦点が合っていない。

自分の中で整理するために、あえて言葉にしているんだと思った。もしかしたら、勇気を振り絞っているのかもしれない。

「……………ごめんなさい」

一拍間が空いた。

「こんなこと。もし違ったら凄く失礼なんだけど……もしかして……」

凄くつらそうな表情で言うものだから、聞いているこつちが辛くなってくる。

何を聞きたいかは大体分かっていた。むしろこつちからカミングアウトするべきじゃないかと思ったりもした。

「……痴女に、その……」

「はい。今朝がた遭いました」

会長は唇をかんで顔を伏せる。

俺の口調は、そもそもがして当たり前なのだが、別段気にしていない軽いものだったと思う。そうするように意識すらした。重く受け止める必要なんてどこにもない。

しかし俺の気持ちなど聞く方には伝わっていないかった。以心伝心ではないのだから、心の内を推し量れというのは無理がある。

「そう……。それで光が……」

「いらん気を回して、なんだか調子崩しちゃったみたいですね。……先輩、あいつもしかして——」

会長は握った拳を口に当てている。緊張で唇は固く引き結ばれ、視線は俺と床とで行ったり来たりしていた。やがて首を振った。

「ダメね」

何がダメなのか。

「私から言えることといえば、ほんの少ししかないんだけど。そもそも言ってしまったて

いいのかどうか……」

「まあ、無理に聞こうとは思いません。言えないなら言わんでいいです」

「そう……。いえ、そうね。あなたは光を助けたし、知る権利はあると思う」

権利がどうか、小難しいことはどうでもいいが教えてくれるらしい。

椅子を引き、脚を組んだ。腕組までしている。鋭い眼光と合わせてまるで戦闘態勢だ。

「光は……むかし、痴女被害に遭ったことがあるの」

「むかし？」

「中学生の頃。たしか、1年生ね」

北村は、中学生になって一人で電車に乗る機会が増えたそうだ。

友達と遊びに行くときや、あるいは一人で買い物をする時など。

小学生の時は許されていなかったことが、中学校に入学して一つの区切りを迎えた。大人になったわけではないが、成長した。それに応じて、親の縛りが少しだけ緩まった。

許されることが増え、それと共にくつと広がった行動範囲。確かめるように、北村は一人電車に乗り込んだ。

「二人じゃなくて集団で、それも計画的な犯行だったらしいの。ずっと狙ってて、光の行動を逐一観察してた。どこから乗ってどこで降りるのか。家も知ってたし、家族構成ま

で調べてた。時間をかけて念入りに。悪質でしょう？ 強制わいせつで逮捕されたわ。全員、今も刑務所にいるはず」

黙って聞いていた。3年前、集団痴漢。最近のことではなかった。

しかし家まで調べてたつて言うのが怖い。それほどの周到さだ。最悪、拉致されて強姦もありえたかもしれない。怖い。気持ち悪くなってくる。怒りで震える。

脳裏に浮かんでしまう、年端のいかない少女が男共に乱暴される光景。その想像は、この世界では逆なわけだ。

ふざけた世界だ。笑えてくる。

「はっ……」と鼻を鳴らした俺を会長は慮るように見てくる。

「あなたも似たような目にあつたのでしょうか？ 私は……私なんか言えることじゃないけど——」

「いえ、俺は違います」

思つたよりも強い口調で、言葉の節々に怒りが込められているのが自分で分かつた。落ち着け落ち着け。クールに行け。

「俺は、集団じゃなかったし、一人で、その人も手を叩いたら撃退できました。だから、北村ほどひどい目に遭つてない」

大きく息を吸つた。

少し支離滅裂だったが、言いたいことは伝わっただろう。俺のことなんか大したことじゃない。

「北村はそのことがトラウマになってるんですか？」

「そうらしいわ。だいぶよくなつたと聞いていたんだけど……」

そこまで言つて首を振つた。いま、北村は病院にいる。

思い出させてしまった。俺が安易に教えたから。

昔の自分に重ねてしまった。俺のことを。

「知つてゐることはこれだけ。あまり詳しくないの。その後、光はすぐに引越してしまつたから」

「いえ。ありがとうございます」

頭を下げる。

もう怒りは冷めた。過ぎたことだ。俺にはどうしようもない。

会長が窓の外を一瞥した。暗い声で呟いた。

「夜ね」

「はい」

いつの間にか窓の外は暗くなつていた。

太陽はどこを探しても見つからない。代わりに街灯が、点々と灯る明かりが小さく見

えた。

太陽に比べれば儂い光だった。それでも街を照らす光は暖かい。

「ねえ」

「はい」

窓の外を見つめながら返事をする。

「私は光を守れなかった。今でも後悔してる」

「……」

「昔はもつと笑う子だった。明るくて元気で、活発な子だった。今みたいになつたのは、あいつらのせい。あいつらが、あの子の人生を狂わせた」

黙って聞いていた。何も言えなかった。俺に向けられた訳じゃない、犯人に向けられた怒りにたじろいでしまう。そうじゃなくても他人の告白に口を挟む気にはなれなかった。

「今度は守りたい。もう後悔したくない。光の代わりじゃなくて、あなたのことを守りたい。私に、守らせてほしい」

会長が振り返る。綺麗な表情だった。

言葉を包んでいた怒りはどこにも見当たらない。

今や自責の念と、確かな決意が共存している。

「ダメ、かな?」

「……いえ」

少し考えた。

正直、守られる必要はないと思う。

俺はこの世界の男子ほど弱くはない。その通り、生きてきた世界が違う。

例え力が弱くなっても、やりようはある。何とでも出来るはずだ。

けれど、会長の頼みを袖にすることはできない。

少しでもその苦痛を和らげられるなら、俺に出来ることならなんでもしたい。

俺は頷いた。

「俺の方から頼みます。実はちよつと、また触られるかもつて不安だったんです」
「任せて」

冗談めかして嘘を言う。

笑うその顔にほつと胸をなでおろす。

この人には笑顔でいてほしい。花を愛でるような、人を慈しむような、優しい笑顔でいてほしい。

いつでも。どこでも。ずっと。一生。

そんな笑顔でいてくれたら、俺は幸せだ。

第10話

生徒会室の鍵を戻しに職員室へ向かう。

カツカツと響く足音が暗い廊下に反響してどこかへ向かい、どこからともなく返ってくる。聞える音はそれだけだった。

廊下から見える景色は、藍色の世界で街灯と家の明かりとが煌びやかに輝いて、昼間見ているものと同じとは思えない。ちよつと視点が変わると受ける印象すらがらりと様変わりするのは不思議なことだった。

様変わり。その単語を口の中で呟き、自分の置かれている境遇を思い出す。苦笑した。

いつの間にかコーヒーの匂いが漂ってきていた。小学校も中学校も、職員室はいつもこの匂いで満たされていた。高校もそれは変わりない。世界が変わってもこういうところだけは変わらぬ。

もう外も暗いと言うのに職員室には教師がそこそこ残っている。

その中には担任も居て、俺を見るや否や「おや」と声をかけてきた。

「七瀬君は生徒会の仕事ですか。頑張りますね」

なんでだか不条理を感じた。

思い返せばこの人の命令で残業を強いられているんじゃないか。

「社畜の先生と変わらないですよ。給料は求めないんで代わりに内申点上げといってください」

「別にかまいませんが、中学校程重要な物でも無いですよ。それと先生は社畜ではなく公僕です」

律儀に訂正してくるあたり真面目な人だ。

この人が担任になってまだ日は浅いが、生徒の努力にはきちんと報いてくれるタイプなんだろう。働き甲斐がある。ボーナス出るならなんだってするみたいな労働意欲が湧いて出る。

だからこそ媚びる時に媚びておかなければいけない。ボーナスに色を付けてもらうためにも心象は大事だ。

「ま、推薦狙うなら大事ですねえ」

担任はそう呟いて会長を見た。会長は会釈で応じる。

「金折さん、勉強は順調ですか？」

「ええ」

「なによりです。分からないことがあれば、いくらでも聞いてください。応援してます」

よ」

「はっ」

「で、七瀬君」

今度は俺に向き直る。

真正面から見つめられる。

「明日ちよつとお話があります」

「またですか」

「またです」

一体何の話だろうか。

事前に予告されると余計な不安を覚えてしまうのだが。身に覚えはないとは言え。

「今じゃダメなんですか？」

「もう遅いですし、明日話しましょう。また放送で呼びますよ」

天井のスピーカーを指さされる。

あれで名前を呼ばれるたびにクラスから注目を集める。視線が集中することの不快

感つたら中々すごい。

行ったら行ったでこの人はカップラーメン食べてるし。

「食生活に気を付けないと腹出ますよ」

「突然なんですか。余計なお世話です」

「もう若くないでしょう。何歳ですか？」

「27ですが。まだ若いですよ。肥満はまだ早い。心配ご無用です」

「三十路ですね」

「それ以上言うなら内申点下げますよ」

俺の軽口はそれで止まった。

隣で俺たちのやり取りを見ていた会長がくすりと笑う。

担任は仏頂面のまま肩をすくめた。

「さあ、若者は家に帰って勉強でもしなさい。先生は仕事があります」

担任はノートパソコンで何かしているようだった。

もしかしたら宿題でも作っているのかもしれない。

「先生も早く帰って寝てください。小じわが増えますから」

「七瀬君。今減った分の内申点を取り返したくば、より一層勉学に励むことです」

しっしつと手で追い払われる。

笑いをこらえながら職員室を後にした。扉を閉める間際、担任が小さく手を振っていたのが見えて、結局笑ってしまった。

学校は人の気配が少なく閑散としていたが、駅まで来ると仕事帰りの会社員や部活動帰りの生徒たちで混雑している。

何の気なしにその顔ぶれを見回していると、やはり女子の割合が多いことに気が付いた。

そうなるかと引っくり返る前は男の方が多かったんだらうか。そんなこと一々気にしたこともない。

滑りこんでくる電車に乗り込む。

中はやっぱり混んでいた。今まで一度だつて座れたことはない。座っている人たちはどの駅から乗っているのだろうと不思議に思う。

そのほとんどが疲れからか眠り込んでいる。

立っている人の中にもうつらうつらと舟を漕いでいる人がいた。偶にガクリと力が抜けて、その度に目を覚ましている。携帯を弄っている人が少ないのは珍しい。

殺到する人波にぐいぐいと押されて、気付かぬうちに隅っこの方にいた。目の前には会長が立っていて、さりげなく周囲からブロックしてくれている。

そのおかげかどうか。朝のように痴女に遭遇することはない。この状況で犯行に及

ぶほど無謀な奴もそういないだろうが。

結果、俺は会長と向かい合って立っている。

会長は俺より背が高いから、自然と見上げる形になった。

会長は手すりにつかまり、焦点のあつていない目でどこを見るともなく窓の外を見ている。

俺は壁に体重を預けてじつと会長を見つめていた。

「……」

「……」

会話は無い。

きまじい沈黙ではない。

お互いが側にいることに抵抗はなく、会話で場の空気をもたせようと気を遣う必要はなかった。

そもそも会長はそれほど喋る性質ではない。比べれば葵先輩の方が喋るし、それよりもデビルンが喋る。

生徒会でもしずしずと仕事をしていることが多い。

それなのに物静かな印象がないのは、やっぱりデビルンが関係するとうしろさくなるからだろう。

電車は時おり揺れながら静かに進んでいく。

目的地までは10分少々かかるのだが、気が付けばあつという間に過ぎ、目的駅に着いていた。

人の流れに乗って電車を降りて停留所へと向かう。

バス停にはすでに人が列をなしていた。恐らくバスでも座ることはできないだろう。列の最後尾に並びながらそう思う。

「会長」

「なに？」

バスが来るまでの間、やはり無言で待っていたが、暇を耐えるにも限界があつたのでなんとなく会長を呼ぶ。

「会長は進学ですよね」

「ええ」

「どこ受けるんですか？」

会長の口から出たのは、自称進学校の我が校と言えども難関と言われる大学だった。年に何人その大学に合格できるのだろうか。

担任の言葉を思い出した。応援してますよとはそう言うことなのか。

「北村が会長は推薦だと言っていました」

「あの子もお喋りね」

「頑張ってください。応援してます」

「ありがとう」

会長は微笑んだ。

その表情には一片の気負いも浮かんでないように見える。

リラックス出来ているならそれに越したことはない。

「会長なら一般受験でも十分通用しそうですけど」

「そうかもしれないわね。でもまず推薦で受けてみる。挑戦できる回数は多い方がいいでしょう?」

まったくそのとおりだ。

推薦と一般で二度チャンスがあるならその分緊張もほぐれる。

もちろん、だからと言って慢心していいものでもないけど。

でもこの人なら多分推薦で受かるだろうな。

なんとなくそう思う。二年生から生徒会に入り、美術部では入賞したこともあるらしい。成績も優秀だそうだ。この人が受からないなら、今年はずちの学校からその大学への合格者は0にしていると思う。

というか誰なら受かるんだと殴り込みに行きたい。もし不合格だった時はデビルン

を矢面に立てて行つてやろう。

そんな話をしているとバスがやってきた。

空気の抜ける音と共に扉が開く。

列は順番にバスへと入つて行き、空いている席から埋まっていった。

ノイズの多いアナウンスが「発車します」と一言述べてバスは発進した。

吊革に掴まりながら窓の外を見る。

車のヘッドライトや街灯が一瞬の間を通り過ぎ、瞼の裏に光の線を描いていく。

よく見知つたこの街では、このバスが次にどこへ向かいどこを通り過ぎるのか、鮮明に脳裏に思い浮かべることができる。

途中事故とか起きてなければ、20分ぐらいで着く。

バスはいつも通りの道をいつも通りに走っている。渋滞は起きていない。なら事故もないだろう。

いつもと違うのは、俺の周りには女性の乗客が多く、そのほとんどが眠りこけていることだ。

この時間であれば当たり前のように毎度いる年配のサラリーマンはいない。確かその人はいつも本を読んでいたはずだ。

横目に車内を見回して、やっぱりその人の姿は見つからなかった。

こっそりと溜息を吐く。

世界は引っくり返った。

北村はああなつて、今俺は会長とこうして一緒に家へと帰っている。

北村の件を除けば、今のところ大きな違いは感じられない。

一昨日までの日常と大差ない。しかしやっぱり違うと感ずるところがいくつもあつた。

その細かな差異がやけに寂しく思えて、もう一度小さく溜息を吐いた。

以前述べた通り、俺の家と会長の家は、歩いて5分程度しか離れていない。

もつと具体的に言うなら、俺が一本早く道を曲がり、会長はそのすぐ後の道を曲がる。だからお互いの家の場所は何となく分かっていたのだが、詳しい位置までは把握していなかった。今日までは。

「(ハハ)？」

「そうです」

俺の家を前にして、会長は立ち止まる。

表札にはしつかり七瀬と書かれていた。

それを認めて、会長は俺の家をつぶさに観察している。

脳裏に焼き留めようかというほど、じっくり見つめている。

「明かりが……」

ぼそつと呟かれた言葉。

俺も家を見上げる。玄関も窓も、どこにも明かりはついていなかった。

「(ハ)両親は遅いの？」

「と、いうよりはいません」

腰ほどの門を開けながら答える。

会長は驚いた顔で「え？」と声を漏らした。

「いない……?」

「年に一回ぐらいは帰ってきます。けどまあほとんど一人暮らしですね」

会長はもう一度家を見る。

やはりどこにも明かりはついていない。人がいないんだから明かりなんてつけてるはずもない。もつたいない。

「そうなんだ……一人……」

眩くその目に奇妙な光が宿った。

見飽きた同情や哀れみや憐憫ではなく、もつと違う種類の光。

なんだろうなあと思う。考えた所で思いつくものもない。

「良かったら寄って行きますか? 大したお構いもできないですけど」

鍵を開けながら訊ねる。家に紅茶はなかったはずだ。ペットボトルの緑茶ぐらいしか。

会長は俺の言葉にはつと我に返り、それから誤魔化す様に手を左右に振った。

「折角だけど遠慮するわ。もう遅いもの」

「俺の家には誰も居ないので遠慮する必要はないですよ」

ああ、でも会長には待つてる人がいるかもしれない。

母親か父親か、どちらかが家で夕飯を作って帰りを待つているかもしれない。

そう思うとこれ以上誘うのはためらわれた。

「男の子の家に上がると言うのもね。ごめんなさい」

「そうですか」

俺は機会があれば全力で会長の家に上がる所存だが。

それが朝であればなお良い。寝起きの顔を拝みたい。

「それじゃあ」

会長は手を振って来た道を戻っていく。

小走りに歩くその後ろ姿に声をかけた。

「会長。また明日」

「ええ。また明日。寝坊はしちやダメよ」

「会長こそ。一分でも遅れたら家押しかけますからね」

「気を付けるわ」

最後に微笑んで、会長は薄暗い道に消えて行った。

その後ろ姿を見送り、家へと入る。

リビングは朝家を出たときと何も変わらない。

床に無造作に置いてある毛布をソファにかけた。

鞆をテーブルの上に置いてぐったり座り込む。

宿題がある。夕飯もまだだ。風呂にも入らないといけない。

やるが多すぎて、さっぱりやる気が出ない。

このまま寝てしまおうか。それはとても魅力的に思えた。

もしかしたら、目が覚めたときには世界が戻っているかもしれない。

寝て起きたら引っくり返っていたんだから、また寝れば元に戻るのではと何となく思っている。

世界が引っくり返って二日目。

案外その可能性は高いように思えるが、果たしてどうだろうか。

時計はもうすぐ8時になるうかとしていた。

こうしている間に時間は過ぎる。今はすべきことをしなければいけない。

墮落への一步はまだ早い。一つ一つ片付けて行こう。膝を叩いてやる気を出す。

立ち上がって台所へ向かう。

家事をする間に夜は更けていく。

明日はどうなるだろうか。期待とも不安ともつかない気持ちを抱きながら、時計の針は刻一刻と進んで行った。

第11話

カーテン越しの朝日が眼に痛い。

白い天井に反射した光が直接目を抉っているようだった。

もちろんそんなのは気のせいだが。

目を覚まして、まずすることと言えばテレビを点けること。

ぼんやり働かない頭にニュースキャスターの言葉が右から左に流れていく。

やがてうつそり立ち上がって壁にかけてあるカレンダーの前へ。

「臭わせるだけ臭わせて、何が変わったかと言うと日付が一日経過しただけでしたとき」

カレンダーを見ながらそんなことを言った。今日は昨日より一つ数字が増えている。

その数字を指でなぞった。もうじき7月か。

赤い大安の文字が憎らしい。こんな日には仏滅ぐらいが丁度いいだろう。

昨日のことを思い出す。これからほぼ毎日、会長と登下校することになった。そう言

えば期限を決めてない。最長でも会長が高校を卒業するまでか。

迷惑をかける。朝はわざわざ俺の登校時間に合わせてくれるというのだから、もう足

向けて眠れない。

昨日のことを思い出す。

「普段は何時ぐらいに登校してるんですか？」

「じつは、結構ギリギリなの。朝弱くてね」

そんな会話。

朝が弱い会長に早起きを強いている。

そこまで献身的になってくれるのだ。なんとか報いたい。

俺もギリギリの時間にしようか。その時はそう提案した。

「平気。いい加減治そうとも思ってたの。どうせ夜更かしが原因だから」

「低血圧だとどうしても朝弱いらしいですよ」

「そうなの？ でも一度ぐらいチャレンジしてみるわ」

そんなわけで、会長に迷惑かけっぱなしな俺としては、その内お礼をするのは決定事項として、T字路で待ち合わせするか、会長が俺の家までやってくるかは結構重要な問題だったりした。

距離自体はそんなに変わらないが、少しでも楽をしてもらいたいので、T字路で待ち合わせを強く推した。しかし会長は家まで来ると言う。

これだけは譲るつもりはない。「とにかくT字路だ！」それでぶった切って、無理くりT字路待ち合わせにした。

待ち合わせに現れた会長は俺の姿を認めて酷く不満そうだった。その内寝起きを拝みに家まで行ってやろうと思う。

その日、学校に着いてみれば北村の姿はなかった。

いつも俺より早く来ているあいつがいない。つまりそういうことだ。

ホームルームの終わり際、担任がそれについて触れた。

「北村くんは入院することになりました」

クラスが騒めく。

「やっぱり盲腸ですか？」

「さあ」

クラスメイトの問いに白を切る担任。

クラスの会話に聞き耳を立てる。

しめしめ。すっかり根付いてやがるぜ。

「検査入院と言うのは聞いています。盲腸だったらそう言うでしょうし、違うんじゃないですか？」

「ええ？」と困惑する声が漏れる。

盲腸じゃないならなんだと、好き好きに素人予想を連ね始める。

やかましくなったクラスを睨め付けて、担任は出席簿で教卓を叩いた。

「はい。他人の不幸を飯の種にしてる皆さんには、あとで宿題追加しておきますね」
「はあ!？」

いつにない暴君ぶりを発揮した担任は、喧々囂々と文句の飛び交うクラスを一切無視して、

「それではチャイムが鳴るまで自習」と宣言し踵を返す。生徒たちは己の無力を悟り項垂れた。

机の中をこそごそ掻きまわしていた俺の耳に「ああ、そうだ」と担任の声が聞こえてきた。顔を上げると担任は俺の方を向いていた。

わかっているよねと言わんばかりに首を傾げて手招きしている。無表情だった。

「なんすか？」

「昨日の予告のあれです。廊下で話しましょうか」

廊下は教室とは違って静かだった。

ひんやりした空気が流れている。人つ子一人居ない。

窓から朝日が差して、床には窓枠の形の影が出来ていた。実に見事なコントラストだ。

他のクラスはまだホームルーム中なようで、微かに教師の声が聞こえてきた。

一番うるさいのはうちのクラスなようだ。

「昼と見せかけて、不意打ちで朝呼んでみましたが、ご気分如何ですか」

「先生と逢瀬を重ねられるなんて感無量です」

「ですか。じゃあ本題ですけども」

担任は無表情のまま話を進める。

「北村くんを保健室まで運んだそうですね。ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いえ」

向かい合う担任は俺より随分背が低い。

しかしその目の力強さにはちよつとドキツとする。

「伏見先生にも言われたと思います。北村くんのごことは他言無用。覚えてる？」

「もちろん覚えてますよ。あいつのことは誰にも言ってます」

「なぜか盲腸説が根強いですが、これは？」

「知りません」

担任は眉をひそめた。

「別に怒ってるわけじゃないですよ。よくやったって背中を叩きに来たんです」

そう言うわりに無表情だ。これ叩かれたらかなり痛そう。小柄なくせしてどこからパワー出すつもりだ。助走で勢いでもつけるのか。

「叩かれたくないです」

「では頭を撫でましょうか」

「ぜひ」

「え、撫でられたいの？」

「はい」

中腰で撫でやすい体勢になる。

担任はおずおず頭を撫でてくれた。母性を感じる。

「セクハラになるから、これ以上は出来ませんよ」

「これ以上ってなんすか？」

「男から女にもセクハラは成立するんですよ。知ってます？」

「これ以上つてなんすか？」

ぴしゃりと頭を叩かれる。

「大人をからかうのもいい加減に」

そう言いながら、顔はやつぱり無表情だ。大人の余裕がある。

「私からも改めて釘を刺しておきます。どこまで知ってるか知りませんが、北村くんのは口外しないでください」

言われるまでもなく誰にも言わない。

しかしこう何度も口止めされるのは面白くない。

「おれ、そんなに信用できませんか」

担任は数瞬じつと見てくる。

ふつとその口元が緩む。この人の笑顔は珍しい。写真を撮ってコレクションに加えない。

ポケットまで伸びた衝動は、なんとかギリギリで抑え込めた。

担任は俺の右手を凝視しつつ、「いいえ」と首を振る。

「即行で盲腸説流布したあなたが、今更喋るとは思ってません」

「じゃあなんでわざわざ念押すんですか」

「言うことに意味があるからです」

「分かるかな」と担任は小首を傾げた。

「どれだけ分かり切った事でも、言葉にするのが大切なんです。分かりあってるなんて、胸の中に留めてる内は妄想でしかありませんから」

「だからあなたも大切なことは言葉にしなさい。自己満足しちやダメですよ」

担任は自分の言ったことに自己満足して、得意そうに頷いている。

我ながら良いこと言ったと自画自賛してそう。聞く俺は大まじめに頷いた。

「じゃあ頭撫でてください」

「セクハラ」

出席簿で叩かれた。「君は仕方ないですね」と呆れられる。

大切なことは言葉にしろって言ったのあんたじゃん。

昼休みになって自分の席でサンドイッチを頬張っていた。

包装にはミックスサンドと書かれている。コンビニで買ったものだが、たった三切れぼつち入ってるだけで300円近くする。

安い弁当なら買える金額だ。もし学校に電子レンジがあつたのなら迷わず弁当を選んだらう。

しかし値段に文句はありつつも、サンドイッチはうまい。

偶に食べたくなる。その偶にが今日だったのだが、これからは食べたくなったら自分で作ろう。それぐらいなら出来るはずだ。

もそもそと食べ進め、時折牛乳でのを潤す。

二切れ目を半分も食べた所で腹は満たされてきた。

世界が引っくり返ってからと言うものの、俺の食欲は日に日に減衰している。

以前と同じ量は受けつけない。今日は他に108円で買ったコッペパンもあるのだが、そちらに手を付けることはなさそうだ。もし手を付けたのならゲロる。何の意味もない。こちとら鶉じゃないんだから。

無人の北村席を見つめながら食べ進めていた。

一度手で口を抑えながら小さくゲップをする。

さあ、後一切れ。牛乳を吸いながらすでに何らかの訓練になりかけているのに気づい

た。たぶん過食の訓練。もしくは細身に栄養は何処まで蓄えられるかの人体実験かもしれない。どっちにせよ良いものじゃない。

何となくサンドイツチに手が伸びず、ただ睨んで数分。

唐突に辺りの空気が変わった。話し声や足音などのざわめきが大きくなったような気がする。

その雰囲気は教室の外から漂ってきた。段々と近づいてくる。

扉が開く。

茶色い髪が目映った。

「やっほ」

制服を着崩して、Yシャツのボタンは第二ボタンまで開けているらしい。

それを隠すように緩くネクタイをしていた。スカートの丈は短め。

自信に満ち満ちた瞳はまっすぐ俺を貫いている。主張の激しそうな顔だ。そいつは不敵に弧を描く笑顔はそのまままで近づいてきた。

「こんにちは」

第一声は誰に言ったのか分からなかったが、今度は俺の目を見つめながら言ってきた。俺に用があるらしい。

こいつの登場で周囲の空気は明らかに変わった。

主に俺に対する目が変わった。怨恨すら感じられるのはなぜなのか。

「その節はどうも」

「ん？ どの節？」

「北村を運んだ節」

茶髪はニコツと笑う。

「大したことじゃないよ。調子悪い人がいたんだから、助けようとはするよ」
「必要なかつたけどね」と同意を求めるように笑いかけてきた。

底なしに明るい奴だ。こいつの周りだけキラキラ輝いているように見える。

生徒会とか言う縁の下にいる身分では、ごてごてのイルミネーションで着飾っているようにすら見える。こんなのが何し来た。

「それよりここのいいかな？」

今は亡き北村の席を指さしている。

「北村の席」と答えると「ならいいね」と座り込んだ。

背もたれに腕を置いて頬杖をかいている。もちろん、その視線は後に座っている俺に向いていた。

見つめられながら食事をするこの居心地の悪さと来たらない。

真正面からだけではなく背中にも無数の視線が突き刺さっていた。

視線に攻撃力があつたら死んでる。この実感は生徒会に当選して以来久しぶりだった。

背後の視線に慄いている間、じつと人を観察するように見つめていた茶髪は、サンドイツチを指さして「食べないの?」と聞いてくる。

「食べる」

「じゃあ早く食べないと。しけるよ」

「はあ」

まあ言ってることはわかるけどさ。

食事ももつと落ち着いて取るもんだろ。見世物みたいなこんな状況で喉を通るとは思えない。ただでさえ腹はくちい。

サンドイツチを見て茶髪を見つめる。奴は小首を傾げた。無言のまま時は過ぎ、視線が強くなるばかりの時間が流れた。

一向に用件を言おうとしない茶髪にしびれを切らして、俺の方から聞いてみる。

「なんか用?」

「んー? んふふ。何だと思う?」

知らねえよ。問うならもつと情報をくれ。クイズ番組だつて問題を告げてから答えを聞く。

とは言つても、いくら待つても状況は動かない。出題者である茶髪はこの状況を楽しんで見るように見える。

仕方ないので、こいつの言動を思い出しそれだと思える答えを導き出す。

「それだ！」と思える答えが一つだけあった。「馬鹿言え」と頭の片隅で異論が上がる。

本当に馬鹿げた答えだった。しかし他に考えられるものもない。

「腹減つてんの？」

「え？」

サンドイッチを差し出す。

「どうぞ」

「あ、どうも」

茶髪は素直に受け取った。

はむと頬張る。レタスを噛みちぎるシャキツと言う音が聞えた。

茶髪が口を動かすたび、シャキシャキと小気味のいい音がする。

ハムとレタスのコンビはサンドイッチにおいては王道だ。

俺が一番好きな具でもある。さらばハムレタス。

あつという間に全て食べきった茶髪は、唇に着いた汗を舌でペロツと舐めとった。

その仕草が妙に艶やかだった。

「もういいか？」

「ん、なにが？」

「用件」

「……あー」

困惑した表情は、すぐに納得の色に染まる。

髪を撫でつつ、言葉を探すように視線は斜め上に向けられた。

ふわつと香水だか何だかの人工系の香りが漂ってきた。

「ひよつとして私が食べ物ねだりに来たと思ってる？」

「違うのか」

「違うよ。私お弁当あるもん」

じゃあなんでサンドイッチ食べた。

返せよハムレタス。

「ん。返してほしそうな顔。でももう食べちゃったからなあ」

うーんと考えていた茶髪は何かを思いついて、にやつと挑発的に笑った。

「あ、でもまだ口の中に少しは残ってるかも」

言いながら身を寄せてくる。

言動から不穏な空気を感じた。接近されただけ身を引いた。

「む」

それが茶髪の癩に障つたらしい。

意地でも近づこうと椅子に膝立ちになつて身を乗り出してきた。

俺は尻を浮かべて逃げの準備体勢になる。

俺の制服を掴もうと用意された手。

もしそれが少しでも伸びてこようものなら俺は駆けだしていただろう。

しかし茶髪はじつと俺の様子を観察して、結局椅子に座り込んだ。

目を閉じ、人差し指は虚空に円を描いている。

奇怪な行動の連続に、俺はもはやへっぴり腰になつていた。

近づくべきではない人種と言うものがこの世界にはいるだろう。

目の前のこいつがそうだ。

「押してダメなら引いてみる、かな？」

呟く声。

引くというなら止めはしない。ぜひとも引いてくれ。

その間に俺は逃げるから。

「七瀬はさあ」

変わらない輝く笑顔。しかし俺の目には人の皮を被っている様に見える。

あの笑顔の下には見るも恐ろしい化け物がいるに違いない。

「好きな人っているのかな？」

「話題の切り替わりが突飛すぎて着いていけない。続きはまた機会を改めて、この場はお引き取りをお願いしたい」

「私は今彼氏いないんだけどねえ」

こいつは人の話を聞かない奴なんだろうか。

彼氏がない発言で周囲のひそひそ声が勢いを増した。

誰か立候補してやれよ。こいつ引き取って下さい。

「もうすぐ夏じゃん。だから早いところ彼氏作っておきたくてね。一緒に海行ったりお祭り行ったり、夏ってイベント盛りだくさんでしょ？ 楽しまなきゃ損だよね」

「否定はしない」

「ありがと。で、今私好きな人いないんだけど。もう時間ないし、少しでも気になる人いたら声かけちゃうよね。『私とかどうですか？』って」

「好きじゃないのに声かけるのか？」

「好きになるのに、いつどこでどうして、なんて理屈は必要ないんだって。ただ側にいる。それだけで好きになることもあるかもしれない。だからとりあえず付き合ってみて様子を見る。それも立派な恋人関係だと思っなあ」

付き合ってみてそれで好きになる、と言うのはわからないでもない言い分だった。そういう話は聞いたことがある。実体験は探せばいくらでも見つかるだろう。

ただ、こいつの場合は言い方が引つかかった。

「でも、側にいて好きになったことではないんだろ」

「ん？ んふふ。なんで？」

笑顔はそのまま。でも口調に棘が生えた。

「勘」

「んふふふ」

笑顔なのに妙なプレッシャーを感じる。

笑ってるのに笑ってない。能面のような笑顔。

「——よくわかったね」

太陽のような笑顔に陰が生まれた。口調にも同じように。

転がせば涼やかな音色を奏でていたボールに不協和音が混じったようだった。

こつちが素なのか。普段は猫を被っているのか。

まだその判断はつかない。ただ綺麗だけじゃやないのは間違いなさそうだが。

「ねえ。放課後空いてる？」

さつきまでと微妙に違う声音で、茶髪は尋ねてくる。

空いているはずなんかない。

「生徒会がある」

「じゃあ明日の昼休み。どこかでご飯食べようよ」

「断る」

「んー」

茶髪は人差し指を顎に当てる。おどけるような調子で言った。

「私、いま他に気になる人いないんだよねえ。いたなら諦めても良かったんだけど。

……ねえ？」

なにか「ねえ？」なのか。完全に脅す時の常套句じゃねえか。

ニヤツと嗜虐的な笑みを浮かべて、ひっそり声を落して囁いてくる。

「ストーカーになっちゃうかも。そしたら面倒じゃない？ 毎回毎回こんな感じだよ」

顎でしゃくられ周囲を見ると、男の颯聲を買うことになるのか。

こいつに付き纏われるたび、男の颯聲を買うことになるのか。

そんなことが続けば心象悪化は免れない。本格的にいじめられるかも。そうなった
らそうなったでやりようはあるだろうけど。

「連絡先よこせ」

「話早くて助かるなあ」

アカウントを交換する。

「それじゃあ後はこれで連絡しようか」

茶髪は携帯を弄りながら鼻唄でも歌いそうな上機嫌になった。
俺も登録する。えつと……。

「お前名前は？」

「……あれ、ご存じない？」

「水戸黄門で登録しとくわ」

「ちよつとやめて」

真顔だった。

今日初めて面皮剥がれたな。

「私は菊池由香。1年E組。以後よろしくね」

き、く、ち、ゆ、か、と。

これで苗字が水戸だったら面白かったのに。

「俺の名前は知ってるんだっけ？」

「七瀬でしょ。知らない方が珍しいよ」

いつの間にか有名人になってしまったなあ。

悪名ばかりが広がっていく。実際は人畜無害なのに。

「じゃあ、菊池。用件は終わりだな」

「本題はこつちでするからね」

丁度そのタイミングで携帯が震えた。

菊池からだった。

『私たち付き合わない?』

なんか段階一気にすつ飛ばしてきたな。

だけど、どうしようが言うことは一緒だ。返信してもいいが、大事なことは言葉で伝えよう。

「お断り」

「そ。それじゃあまた明日のお昼にでも」

「ばいばい」と手を振って菊池は教室を出て行った。

菊池がいなくなつて一瞬静かになつたクラスは、一気にひそひそ声が加速する。大体が俺を見ながら内緒話をしていた。

あいつは自分の人気を理解しつつ、それを無視できる胆力があるのだろうか、それに巻き込まれる方にしてみればたまったもんじやない。

心の準備も出来ていない。こつちのことも少しは考えてほしい。

携帯にメッセージを書きこむ。

『やっぱりお断り』

既読はすぐについた。
返信はなかった。

第12話

生徒会室の棚にはファイリングされた生徒会だよりがある。

歴代の生徒会が律儀に残して行ったものだ。

年数によって文体やフォーマットが異なり、20年以上前のものまであって、そこまですると手書きで書かれていた。偶に抜けているナンバリングもある。

抜けているのは元々無かったのか、それとも単に忘れたのか、あるいは横着したのか。真相は分からないが、そこに歴史と人の痕跡を感じられて微笑ましくなる。

ペラペラとページを捲る。偶に誤字を発見する。暇つぶしには丁度いい。

そんな囁かな楽しみを邪魔するかのように突き刺さる二人の目。

暇なのだろうか。その二人は、俺が生徒会室にやってきてから飽きることなく見つめ続けてくる。

「……」

「……」

じいっと見つめられる。

一人は難しい顔で、一人は愉悦に染まった顔に声付きで。

ただ真つ直ぐ、あるいはニヤニヤと。

そんな視線を受けて、俺としては困惑せずにはいられない。なんだこいつら。

「……」

「シュー」

少し放っておけば向こうから何か言ってくるかと思つたが、葵先輩は顔を難しくするばかりで何も言つてこない。デビルの主張は少しずつ大きくなつていふと言ふのを見習つてほしい。

デビルがあんな顔をしている状況で、こつちから話題を振ると言うのは正直気が進まない。そんなことをしようものならあいつは絶対調子に乗る。

けど、こつちから聞かねばいつまで見つめられるか分かつたもんじゃない。

いつまでも見つめていたいと言ふならそれはそれで歓迎だが、どうにもそんな気配じゃなかつた。

「葵先輩。さつきからそんなに見つめて、どうかしました？ 弄られ待ちですか？」

「……………いや、べつに」

「おら一年坊！ 彼女でできたつて本当か!？」

逡巡の末に言葉を濁した葵先輩。

その葛藤を全て台無しにして、デビルは嬉々として声を大にして訊ねてくる。

あなたには聞いてないんだが。

「は？」

「本当か嘘か、イエスオアノー？」

無邪気と言うか空気読めないと言うか。

愛らしいより憎らしいの方が競り勝つデビルンは、目をキラキラさせて煽ってくる。それが余計憎らしい。

「先輩。そのそれと同じ用件ですか？」

「いや、まあ……うん……」

「ほら、早く答えて！ ハリーアップっ！」

うぜえなデビル。

「それ噂でしょう。嘘ですよ」

「それこそ嘘だねっ！」

デビルンは立ち上がり、机に両手を叩きつけて断言した。

鼻息荒く、頬は興奮で上気していた。にんまりと吊り上がった口角。内から上がる興奮を抑えきれないのか、ピョンピョンと小刻みにジャンプする。胸が揺れる。こいつまたノーブラかよ。

「私ちゃんと君のクラスメイトに確認したもんね。今日の昼休み、女子に言い寄られて

たんでしょ！ そうなんでしょ!？」

「言い寄られはしましたが、告白されてません」

「嘘だねっ！ ちゃんと一言一句聞きました！ 『好きな子いる？』 って聞かれたんだろ!? それもう告白だろ！ 年上舐めんな、ちゃんと裏取りしてるんだからな！ 私のことデビル言ったこと後悔させてやる!!」

ひよつとしてこれは、俺は弱みを握られたことになるのか？

それで唾を飛ばすほど必死になれるのかこのデビルンって言う奴は。

あまりの情けなさに思わず溜息を吐いた。

「自分がモテないからって情けないぞデビル」

安い挑発に、案の定デビルは気炎を上げる。

「私だつてモテる!!」それでいい感じに釣れたので、このまま話題を他のことに移そうと思つたのだが、意外にも葵先輩がデビルンの首根っこを掴んで抑えこんだ。

「それ本当なのか？」そう尋ねてくる。

「まあ、聞かれましたけど」

「じゃあ……」

「脈あるかどうか探ってきただけです。素っ気なくしましたし、脈なしだつて思つたんじゃないですか」

「ダウトオオ!!」

女子にあるまじき雄たけびを上げたのはもちろんデビルン。

いや、世界引っくり返ってるからもしかしたら偶に上げるのかもしれないけど、ともかく俺にとつてはとても聞き苦しかった。人間の醜悪さが全身に出ている。

後輩の恋愛事情に全身全霊傾けすぎ。

「連絡先交換してるとは知ってるんだっ!! 何が脈ないだ、ありありじゃねえか!! キープにするつもりか!?! 薄汚い小悪魔めつ、浄化されてしまえ! アーメン!!」

「すいません。こいつ息の根止めてもいいですか」

「うん」

葵先輩の許可もいただき、デビルンの首根っこを掴む。

暴れるデビルン。抑え込む俺。

しばらく攻防が続き、何度かその胸を揉んだ後、すっかり力の逆転を忘れていた俺はデビルンに取り押さえられてしまった。

「ば、ばかな……!?!」

「あつははっ! いくら私が脆弱だからって、男が女に勝てるわけないじゃない。焦つたね。動揺してる!?! さあ、本性暴こうか!」

俺の背中に馬乗りになるデビルンが高らかに勝利を宣言している。腕を後ろ手に拘

束されているので抜け出せそうにない。

何をされるか、というかこの状況で何かしようものならそれこそ犯罪なので何もしな
いだろうが、デビルンに屈服させられたと言う事実は過去最大の敗北感をもたらしてい
た。こんな奴に……!!

「さあ、吐きたまえ。実はこつそり付き合ってるんじゃないの？　ちゅーぐらいした？

まさかもうセックスまで——」

「してないし付き合ってもいませんよ。人のこと尻軽だとも思ってるんですか」
「思ってる」

「え」

なんかシヨックだ。

生まれてこの方貞操は堅く守っていると言うのに。キスだってまだだ。多分親を含
めて経験一切ないと思う。

そこんところ、きつちり言葉にすれば伝わるだろうか。うりうりと頬を突っついてく
るデビルンには伝わりそうにないけど。

やり返そうにも拘束されているので何もできない。なんだこの屈辱感。

「先輩助けてください」

「で、実際のところどうなんだ？」

俺の助けを求める声を見殺しして、葵先輩は俺の目の前でしゃがみ込んだ。パンツが見える。

しかしその目には憂いが帯びていて、興奮と一緒にちよつと胸が痛んだ。

「なにがですか」

「付き合ってるの？」

「付き合ってますよ。信じてください」

「でもお前嘘ついたらじゃん」

「それは止むに止まれぬ事情がありました——」

なんかもう面倒くさい。

元々隠す意味も特にない。なので全部ゲロることにした。

かくかくしかじかと説明する。

話し終えた後、葵先輩は眉をひそめて呆れかえっていた。

「はあ？ お前それ脅迫じゃん。そんなんと昼飯食うの？」

「まあ、事の成り行きで……」

「止めとけよ。何されるか分かんねえぞ」

「一回だけですよ。それでコテンパンに振ってきます」

「チツ」と舌打ち一回。その後頭を搔いて、「あたしが懲らしめてやろうか？」そんな物

騒なことを言ってくる。

「ちよつと、なにするつもりですか」

「話すだけだ」

「拳で？」

「場合によつては」

迷いなく言い切る先輩。

そんなところが格好いい。しかし受験を控える人が言つて良いことじやなかつた。

そののところを注意しようと口を開き、それに被せるようにデビルンが叫んだ。

「せんば——」

「だめだよ葵ちゃん、そんなこと言っちゃ！ 騙されないでっ！」

ヒロインみたいな台詞と共に背中に膝が突き刺さっている。

執拗に膝でぐりぐり攻撃してくるあたり、今日は一段と殺意が高い。

「こんな小悪魔のいうこと信じちゃダメ！ どうせ嘘だから！」

「おーいデビルー。膝、膝」

「こんな年上を年上と思つてない奴。女遊びで痛い目見ればいいんだよ。ふんっ！」

ぐりつと一層膝が突き刺さつた。

「ぐええ」と情けない声が漏れる。そこはかとなげ憎しみを感した。

「つてえ……。くそデビルが。女遊びなんかしてねえよ。膝どかせ」

「口では何とでも言えるよ！でも普段の言動見れば分かるんだよ!! この小悪魔!!」

「デビルに小悪魔とか言われる筋合いはねえよ！願いやえる前に魂奪いそうな性格しやがって!!」

「なんだとお!?!」

デビルンが全身の力で押し潰そうとしてくる。

ノーブラの胸が背中に押し付けられた。これにはもう慣れた。

しかし誰の胸だろうと胸は胸だから、この至福の時を堪能させてもらおうと言いつけを続ける。

デビルンが俺の首に腕を回して無理矢理海老反りさせたところで、葵先輩がデビルンの頭を叩く。

「いたっ!?!」

「いい加減にしろ」

「葵ちゃん〜!」

「話が途中だ」

泣き真似をするデビルンがもう一度ぴしゃりと叩かれて、俺はようやく海老反りから解放された。

柔らかい感触の名残と背筋の痛み。地獄と天国が並立していた。

「約束は明日の昼だろ？ あたしも一緒に行くよ」

「いや、いいですよ。子供じゃないし一人で出来ますから」

「出来る出来ないじゃなくてな」

先輩は俺に指をさしてくる。

何を言おうとしたのか、口を半開きにして言葉に詰まった。

俺は突きつけられた指を見つめる。細くてしなやかな指だった。

段々と先輩の頬が上気して、ぐつと唇を噛みしめたかと思うと、ぼそりと言葉を放った。

「お前が心配なんだ」

「おお……」

葵先輩がデレた。

羞恥心からぷいっと顔を背けて、それでも俺の反応を気にしてチラチラ横目で見てくる。

なんだかほっこりした。小さなエンジェルが頭上でランラン回っている。

背中で嘆くデビルンがいなければ、愛を告白していたかもしれない。

「なんてことだ……なんてことだ……!!」

嘆きの声。悲嘆に暮れている。

顔は見えないが、その声音でどんな表情なのかは大体分かる。

女の子がしちやいけない顔をしていると見た。デビルンが苦しんでいるだけで飯三杯はいける。その自信がある。

「葵ちゃんが、毒牙にかかる……？ そんなの嫌だ。葵ちゃんが、こんな……こんな小悪魔なんか……」

「おい、ルン。勘違いするなよ」

先輩が声を上げる。

それに乗っかる形で俺も自分の要望を述べた。

「いい加減人を小悪魔扱いするのは止めてもらいましょうか」

「がーっ!!」

しかしながら、俺たちの言葉は奴の耳には届いていないようで、背中の上でそんな雄たけび。野獣のような猛獣のような声だった。

背中に何度か頭突きを食らって、やがて静かになったと思ったら、ぼつりと呟く声が聞こえてきた。

「もう、殺すしか」

背筋にぞくりと悪寒が走る。

「お前を殺してわたしもしぬ」

「溜音先輩と心中は地獄に落ちるより苦しそうなので遠慮します」

「お前に拒否権なんかない!!」

「がおー!」いつもの調子で襲われそうになったが、如何せんうつぶせに押し倒されている。逃げることは出来ない。

半ば死を覚悟した。具体的には首筋辺りにがぶりと噛みつかれることを。

けれど凄惨な未来に描いている間に、「ぶぎゅつ」そんな可愛い鳴き声が聞こえて、バタリとデビルンは倒れた。

「……なにしましたか」

「鳩尾に一発。あたし喧嘩はしたことないけど、結構強いと思うんだよな」

シユツと虚空に拳を突き出す。

それは確かに鋭いような気がした。まあ、相手デビルンだし。人類最弱と言っても良いくらいの弱さだ。参考にならない。

「明日一緒に行くぞ。あたしが守ってやる」

「たかだか告白されるぐらいで大げさですね」

「ただの告白ならあたしだって遠慮する」

言外にただの告白じゃないと主張していた。

菊池由香ってやつが普通ではないのは確かだが、だからと言ってそれほど身の危険は感じていない。

やっぱりただの考えすぎだと思うのだが。

「お守りはいらなかつす」

「お前が何と言おうと同行する」

「先輩、考えて見てください。告白しようと好きな子呼び出したら異性同伴で現れるって状況を。あんまりに酷じゃありませんか？」

「酷だな」

「でしよう？」

先輩は頷きながら「でも」と異論があるようだった。

「極端な話、お前レイプされるかもしれないぞ」

予想していた斜め上の発言に、思わず黙ってしまった。

レイプされるって言う発想はなかった。

なにせ俺は男だし。男がレイプされるってホモに狙われる以外にありえないシチュエーションだ。そんなシチュエーションは考えたくもない。

「ありえませんが。ここ学校ですよ。何を根拠に」

「お前無防備だから」

「めつちや警戒してますから。バリバリです」

「どうかな。暗にひと気のない場所に誘導されてるのに、気づいてないだろ」

「でもここ学校だし」

「学校でもやろうと思えばできるだろ」

出来るか？

レイプだぞ。たかだか一時間足らずで、しかも絶えず人がいる学校で。

そんなことされそうになったら暴れるし大声も出す。そうしたら人が駆けつけるだろう。やっぱりありえない。

「私なら指定した場所に数人待機させとく。それで一斉に襲い掛かって口塞いで手足縛って一丁上がり。まな板の上の鯉だ。何されても抵抗できないぞ。実際何されると思おう？」

「そんなこと聞くんないやらしい。先輩むつりですか？」

「茶化すな」

「調子が外れる」と髪を掻く先輩はじとつとした目で睨んでくる。

それは目論見が外れて不貞腐れた子供のような顔だった。

「こんだけ脅したのに屁でもないって顔しやがって。やっぱりお前無警戒だ」

「考える頭はついてますんで」

「普通少しくらい危機感持つもんだけどな」

「持ってますよ」

「いや、持ってるない」

断言されてしまつてはどう反論したものかと頭を悩ますしかない。

しかし俺が何を言おうと先輩を納得させられそうになかった。実際、担任にも似たような指摘は受けていた。

「お前はもつと危機感を持って。なんでそんなに危機意識薄いんだ」

「あると思いますけど」

「ない」

二度目の断言にむうと唸る。

仮に危機感がないと言うなら、それは世界が引っくり返つた弊害だろう。

俺にとっての常識は、今のこの世界では少しばかりずれている。

それを理解できていない現状、治すこともままならない。そもそも治す気がさらさらないのである。

その辺を忠告してくれる葵先輩の親切心は素直にありがたい。

「明日はあたしも一緒に行くぞ。いいな?」

「ダメです」

だからと言って、男の子には譲れない物がある。

まさしく、告白の場には一対一になるよう赴くのが道理と言う物だろう。

この世界では理解されないのかもしれないが。

「……殴るぞお前」

「どんだけ言われようと決めた物は決めたんですよ、つと」

背中で事切れていた瑠音先輩を投げ出すようにして立ち上がる。

ごろんと転がった瑠音先輩は「むにやり」とわざとらしい寝息を立てていた。

「絶対一緒に行つてやるからな……」

剣呑な目つきの葵先輩。

そんな目で、そんなことを言われてしまうと反抗心が表に出てしまう。絶対一人で

行つてやる。そう思う。

「……」

「……」

バチバチと睨みあう。睨みあうだけでお互い行動には移らない。先輩はこの間のあれを反省したらしい。むやみやたらに手を出してこなくなった。

俺は基本受け身なので、手を出されないのであれば何もすることがない。

そうになると、こんなことを続けるのは不毛でしかない。たぶんこのまま日が暮れるだ

ろう。変に拗れて明日を迎えるよりも、この場で決着をつけた方が後のことを考えると良いはずだ。

「じゃあ勝負しますか。勝ったら好きにするってことで。文句はなし」

「……いいぜ。なにする？」

寛大な葵先輩は勝負内容をこちらに委ねてくれるらしい。

腕相撲など力比べは性別の差で勝負にならない。

かと言って頭を競っては葵先輩があまりに不利だ。

なので、しょうがないのでこうする。

「相手のいいところをより多く言えた人の勝ちにしましょう」

「は？」

「勝負は今この瞬間から。行きますよ」

「おいまして」

「よいいスタート」

大きく息を吸う。

葵先輩は狼狽えている。こういうのはスタートダッシュが肝心だ。勝ちが見えた。

「スポーツしてる時はキリツと凛々しくて、どんな不利な状況で諦めない、主人公みたいな先輩まじ格好いい。でも勉強になると途端に格好悪くなって、涙目で机に噛り付いて

る所なんかギャップも含めて食りたくなる愛らしさ。エッチなことに疎くてその話題になるとすぐ顔赤くして話題変えようと必死になるところは年齢以上に少女感あつてたまらないです。そう言う意味では偶に年下だつて錯覚しちゃうけど、でも肝心なところはきっちり締めてくれるんで、やっぱり年上なんだと再認識。先輩まじ格好良いです。そんな格好良すぎる先輩もイチゴパフエ食べてる時は年齢相応な顔つきになって、目をキラキラさせてますよね。それが見たくて見たくてこの間ついに写真とれたんですよ。見ます？ え？ そうですこの間見せたやつです。いやですよ渡しませんよ。これは溜音先輩にもあげてないとおきなんですよ。いくら出すつて聞いたたら10万つて言ったんですよ。物凄い価値あるんですから。いくら被写体の言うことでもそれだけは聞けません。もっと値段吊り上げて良い頃合いに放出しようと思ってるんですから。絶対に渡しませんよ。携帯壊しても無駄ですよ。10か所に分けて保存してるんですからね。雷落ちたつてなくなりませんよ」

「葵ちゃんマジナイト。白馬に乗つたシャイニーアーマーナイト！ 葵ちゃん以上に格好いい人間はこの世に存在しない！ 男も女も葵ちゃんと比べれば蠟燭の煤以下の存在で、葵ちゃんの吐いたゲロにも劣る。神を崇めろつて言われれば迷いなく葵ちゃんの前に膝をついて一心不乱に葵ちゃんの幸福を願うよ。お天道様に感謝する前に碧ちゃんに感謝しなきゃ。だつて作物が育つのも人が成長するのも日本が平和なのも全部葵

「可愛いよ葵ちゃん。最高だよ葵ちゃんぺろぺろしたい……ああ、ぺろぺろ……」
聞きやしない。けれど諦めずに繰り返す。

「溜音先輩？」

「ぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろ」

ダメだこいつ。

存在がもうダメだ。言動が完全に薬キメてる。正直関わり合いになりたくない。

俺は二人から少し距離を取って、しばらくの間二人の睦み合いを眺めていた。

だが二人のやり取りを見ている内に、葵先輩の恥じらいに我慢できなくなつて参戦してしまった。

どっちがベストショットを撮れるか競争し、それは葵先輩がトイレに駆け込むまで続いた。

トイレの前でカメラを構えているところを会長に見つかつて、溜音先輩共々御用になつた。

無念だが、結局告白云々はうやむやに出来たので良かったと思う。

そう生徒会室で正座しながら思った。

第13話

決戦は金曜日の昼休み。

そんな言葉を思いついたのは当日の朝だった。我ながら実にくだらなれと思つて、登校中にはすっかり忘れていた。決戦なんて微塵も思つていなかったのが分かる。

それで、次にそのことを思い出したのは件の昼休みに入つてからだった。チャイムが鳴つて早々に携帯が震え、表示された文字に記憶が蘇つた。

『美術室で食べよっか。待つてるね』

そのメッセージを見て「ああ、そう言えばそうだった」と一人呟く。

どっこいせつて感じにホットドッグを持って立ち上がる。あと一瞬遅ければ袋を開けていた。

もし開けていたら行かなかつたかもしれない。歩き食いは行儀が悪いし、何より面倒くさい。しけつたら最悪だ。

もし行かなかつたらどうなつていただろうか。それを考えると本当に間一髪だった。教室を出て一歩目は軽やかに踏み出せた。廊下を進む足取りは迷いが無いのに、頭の中では美術室はどこだろうとそんなことを考えている。

入学して三か月余り。美術の授業がなかった。

確か選択科目の一つにあつたと思うが、そんなものは選んでない。だから美術室がどこにあるのかは今一わからない。一階にあるということだけは知っている。

廊下を歩く最中。階段を降りる途中。チリチリと首筋辺りに視線を感じる。

一連の騒ぎが爆速で拡散されているのは知っている。しかし見ず知らずの人間にじろじろ見られるのは気持ちの良いものじゃない。どいつもこいつも、好きに弄れる玩具程度にしか見ていないのだろう。気分は子供に乱暴に扱われるぬいぐるみだ。

好奇心や嫉妬の入り混じった視線と「付き合うのかな？」なんて微かに聞こえてきた声を背中で聞き流し一階へ降りる。

正面玄関口を通り過ぎて、ひと気のない廊下を進んだ。

後ろの方から。パタパタと上履きの音が聞えてきて、間髪入れずに元気のいい話し声が聞えてくる。

きやいきやいと甲高い声が玄関を通り抜け外へと遠ざかって行った。

昼休みに元気いっぱいグラウンドで遊ぶのは女子生徒。男子生徒は教室でお喋りに興じている。

女子が外で遊び、男子が中で過ごす光景にはなんとなく物寂しさを感じる。

美術室と書かれた教室プレートを見つけたのは、それからすぐのこと。

日の照らさない薄暗い廊下。もう話し声すら聞こえてこない。昼休みと言う時間帯を考えれば、不思議というよりは不自然だった。学校と言えどもひと気のない空間もあるところにはあるということか。

美術室の隣には当然のように美術準備室があつて、中に先生はいるのだろうかと少し気になった。

プレートを覗んで、扉の前で仁王立ちする。

耳を澄まして感覚を研ぎ澄ます。人の気配は感じられなかった。周囲を目で探る。やっぱり人が隠れているような気配はない。

そもそもこの廊下は一本道だし、隠れられるスペースもない。

昨日葵先輩に散々脅されたのだが、やっぱり考え過ぎだろうと結論に至る。

やれやれ、あの人も心配性だねと笑ったところでまた携帯が震えた。

葵先輩からだった。

『いまどこだ?』

短いメッセージは先輩の激情を現しているようで怖かった。

昨日のあれじゃやっぱり諦めなかったようだ。思い返すと、やってる方が楽しい以上の意味はなかったし。

後でイチゴパフェ奢りますと心の中で詫びて、扉に手をかける。

えいやと気合を入れて開けてみたら、すぐ目の前に菊池由香が待ち構えていた。まさしく目と鼻の先。予想外に距離が近くて、思わず一步下がる。

最初無表情だった菊池は、俺の顔を見てすぐに笑顔を作った。花が咲いたような華やかな笑みだった。

菊池は人好きのする笑顔はそのまま、何も言わず無言で俺を見ている。

ホストである菊池は何も言わない。招かれた客である俺はつばを飲み込んだ。

沈黙ばかりが過ぎていく。変な空気にあてられて、何か言わねばとあらぬ焦りを感じてしまい、口を衝いて出たのはこんな言葉だった。

「……待った？」

「待ってないよ。今来たところ」

思わず変なやり取りになった。

昼休みに入って10分と経ってない。待つはずなどないのは当たり前だ。

「さ、入って」

言われるがままに足を踏み入れる。

初めて見る美術室は、想像していたものと似通っていた。

天板の白い机が部屋の大部分に置かれ整然と並べられている。その机の上に四角く角ばった椅子が逆さまに置かれていた。

近づいてみると、遠目には白く映った机は至る所に汚れが付着して、所々剥けている。これではとても清潔とは言いがたい。美術にそんなものを期待している人も居ないとは思うけれど。

教室の後方には誰かの書きかけの絵がいくつか無造作に置かれている。恐らく美術部員の物だろうと思う。壁には完成品と思われる作品がずらりと飾られていた。

そして、鼻を刺激する独特な匂い。

元の匂いは絵具だろうか。けれど他にも色々な物が入り混じって、なんとも言葉にしづらい匂いが部屋中に充満している。

決して良い匂いではないが、悪臭と言うわけでもない。

10分も居ればこの匂いも気にならなくなるのは経験で知っていた。中学も高校も場所は違えどこの匂いだけは変わらないようだ。

俺が部屋の中を観察している間、菊池は環境づくりに勤しんでいた。

窓を開け、椅子を降ろし、机をくつつける。

たったそれだけのことなのに、菊池は大仕事を終えたと言いたげに胸を張っていた。

「そこ座って」

「はいはい」

示された椅子に座ってから気が付く。

さつきから俺は一々指示を受けて行動している。まるで指示待ち人間になったようだ。

主導権握られてる。ちよつとこれはまずいんじゃないか。ならどうすると言う。プランもないのだけど。

「今日はいい天気。風がきもちいい」

ばたばたと風でカーテンが靡いている。もう7月だと言うのに、夏を全く感じさせない涼しさだった。

菊池は髪を押さえて笑顔のまま窓の外を見ていた。

肩ぐらいの長さの髪でも、風に煽られれば鬱陶しく感じないだろうか。

実際、俺は前髪が乱れて非常にうざったい。一々目の辺りをチクチクと刺激してくる。

「見て。サッカーしてる」

美術室の窓はグラウンドに面している。

菊池の言う通り、遠くでボールを蹴り合う女子の姿が見えた。

じつとそれを見ていた菊池からふつと息を吐く音が聞えた。

「元気だね」

頷く。

ここからでは豆粒大の大ききさでしか見えないが、ちよこまかと動き回っている。顔も分からなければ声も聞こえない。ただ何となく楽しそうに思える。

そんな彼女たちのことを見ていて、一つ気になった。

「あれ、スカートのままか？」

「そうじゃない？ 一々ズボンに履き替えるのも面倒でしょ」

ふーんと相槌を打つ。

そんな俺を菊池は意味ありげに流し見た。

「なにか？」

「いやあ、そうだねえ。……当てるあげよつか」

「なにを」

「パンツ、見えるかもね」

思わず言葉に詰まる。動揺してしまった。見事に内心を言い当てられたから。

むふふと笑う菊池はしてやったりと口端が吊り上がっている。

「女子のパンツなんて興味あるんだ？ 男の子なのにいやらしいんだあ」

「なんの証拠があつてそんなことを」

「まあ気持ちはわかるよ。私も七瀬のパンツ興味あるから」

視線が下に向いた。なんだかりアルな身の危険を感じる。

葵先輩の脅しが急に現実味を帯びてきた気がする。

「ご飯、食べよっか」

「おう」

心理的に距離を取りつつ、椅子を引いて物理的にも距離を取る。

菊池は青い包みで包まれた弁当箱を取り出した。俺はホットドッグの袋を開ける。

ぱかっとながたが開いたら、卵焼きやウインナーといった定番のおかずが詰まっていた。

「それなに。自分で作ったの？」

「まさか。私料理出来ないもん」

「威張んな」

じゃあ誰が作ったのだろう。

聞くとあつさり答えてくれた。

「弟」

「おとうと？」

「ブラザー」

「リアリー？」

「いえーす」

ああ、そう言えば弟がいたんだったか。

例の盲腸になったとか言う弟だろうか。いつだかそんなことを言っていたのを思い出した。

「お姉ちゃんも居るけどねえ。うちの家庭、女子はみんな料理出来ないから」

「珍しい家庭だな」

「今時は珍しいかもね。でも、別に困ってないし。よそはよそ。うちはうち」

最近、巷で男女平等なんて言葉がはやっている。男も女も家事は出来た方がいいし、仕事も平等に行きましようってやつだ。

相対的平等とか絶対的平等とか、色々種類はあるのだろうけど、引っくり返っても平等は平等だった。

ただ平等の秤がどちらに傾いているのかということなのだろう。どれだけ突き進めても、やっぱりどこか偏ってる所はあるのだから。

「そう言う七瀬はパンばかりだね。作ったりしないの？」

「めんどい」

「男なのに」

「それ差別」

「しってる」

それからには特に会話はせず無言で食べ進めた。

美術室で飯食べるなんてと最初は思ったが、いざ食べてみると案外悪くない。

人がいないと言うのが一番で、二番目は風が気持ちいいこと。

もつと清潔な場所だったらさらに良かっただろう。つまりわざわざ美術室である必要がない。

ここをチョイスした理由が謎だ。

「菊池つて美術部？」

「え、違うよ」

「じゃあどうやってここ借りてんの？」

「友達が美術部なの」

「コネで鍵借りたのか」

「特別に横流ししてもらった」

そういうことを誤魔化すことなく白状する辺りにこいつの性格が伺える。

たぶんばれなきや犯罪じゃないって思ってたそうだ。

「犯罪者め。共犯もろとも職員室に自首してこい」

「恩恵を受けてる七瀬も共犯じゃない？ それにばれなきや犯罪じゃないよ。露見しない犯罪は完全犯罪だからね」

余計な文言をくつつけて、はつきりと言ってきた。

完全犯罪なんて単語は久しぶりに聞いた。有名な探偵アニメで聞いて以来だろうか。

「露見しないってことは、損した人がいないってことだよ。得した人はいるだろうけど」

「いやどつかにはいるんじゃないか。本人も周りも気づいてないだけで」

「自覚のない損は、果たして損なのか。なんて思っちゃったり」

自論を述べる菊池はテーブルの上で指を組み、その上に顎を乗せた。どつかで見たポーズだ。

「逆に言うなら、露見するような犯罪を犯す人って犯罪者として二流だって考えも一理あると思わない？」

「犯罪者に一流とか二流とか、やっちゃまった時点でただの犯罪者。それに優劣なんかつけたところで、ゴミとカスはどっちがましかって話にしかない」

「団栗の背比べってね。でも犯罪の程度に差をつけるなら、犯罪者にも差をつけたっていいんじゃない？ ほら、どんなものにもスペシャリストっているじゃない。そこから得られる有意義な情報ってあると思う」

「犯罪のスペシャリストって聞くだけでぞつとする」

「世界ではそれが当たり前だと思うんだよねえ」

にっこりと笑顔こそ浮かべているが、話している内容が恐ろしい。

犯罪をこれだけ肯定できる奴は将来100%やると思う。偏見とか差別とか、細かい主観は抜きにしてそう思う。

思えばこの場をセッティングされたのだから脅されて無理矢理だった。既に半ばそつちの世界に足を踏み入れていると言つて過言なさそうだ。

例え俺がここを逃げ出そうとも、こんなこと言う奴とはなるべく関わりたくないって本音。まともな思考してる奴なら理解してくれるだろう。

「今回は縁がなかったということだ」

縁切りはお早めにといいことで早々に立ち去ろうとした。

けれど手を掴まれ引き留められる。

「ああ、待つて。冗談冗談。ぜんぶ冗談。かるーい中二病話だつてば」

今までの会話全部笑つて済まそうとしている。

仮に言葉は冗談で済んでも、昨日の脅し文句は冗談じゃ済まない気がする。済ませちゃいけない気がする。

「出会つて幾ばくもない相手に中二病話は、ハードル高すぎてむしろ潜在的競技になつてるぞ」

「リンボーダンスを競技つて言つて良いのかは微妙だけどね」

いくら振りほどこうとしても、掴んだ手を離してくれそうにないのでとりあえず椅子

に座った。

窓の外は良く晴れている。それを背に座る菊池は中々映えるのだが、何だか得体のしれない雰囲気を感じてきてしまった。

「で、何が冗談だって?」

「ぜんぶ」

「つまりお付き合いどうのつてところもか」

「行き過ぎ。さっきの犯罪がどうのこうのつてところだけ」

多少菊池の語気が荒くなつた気がした。

からかわれて自分のペースを乱されるのが嫌なのかもしれない。

だとするとこいつとんでもなく自己中なんだが。

「まあ、今言つたけど、私いま中二病なんだよねえ」

「いまっ..」

「ずつと」

そんなところを訂正されても困る。

「小学生の頃からかれこれ4年ぐらい」

「根深い」

「精神的な病気つて、ゆっくり時間をかけて治療する物じゃない?」

「中二病なんてくしゃみやみ一つで治りそうなものだ」

「そうはいかないから病氣なんだよきつと」

言いながら人差し指で机をトントン叩き、その顔には張りつけたような笑顔が乗っかっている。

本人は無意識なんだろうが、こういう細かい仕草で気が付くことがある。こいつ実は短気っぽいとか、表面上の友達づきあいには上手くても、それを掘り下げるのは苦手なんだろうとか。まだ入学したばかりだからそうでもないけど、その内一人ぼっちになりそうだからか。

こんなのあくまで推測でしかないが、それほど大きく外している気もしない。少し自信過剰かもしれない。

「で、さ。こういう話をする理由って言うのがね。やっぱり付き合ったら自然とばれちゃうものじゃない？ 普段の言動色々」

「よくよく見ると性格歪んでるのは隠しようがないもんな」
「違くて。中二病つてところがね」

俺が指の動きを見ていることに気が付いて、菊池は机を叩くのを止めた。

代わりに身動きをして椅子に座りなおした。机の下のことだからはつきりとは分からないが、足を組んだようだ。

「中二病だから、他の人と違うことがやりたくなるの。告白にしても話題にしてもね」

「その格好も中二病の一環ってことか」

「あたり」

菊池はネクタイを引つ張つてワイシャツの胸元を見せた。

やっぱりボタンが二つばかり開いている。

「ここお堅いからさ、こういうのやつてる人あんまないし、夜遊びなんて言語道断だよ
ねえ」

「そんなことまでやってるのか」

「昨日もナンパしちゃった」

「やはりご縁はなかったようで」

「冗談だつてば」

机の向こうからぎゅつと腕を掴まれる。

さつき掴まれた時と違い、かなり力が籠っていた。

菊池の目にもはつきりとした意思が感じられる。まあ、逃がさないつてところだろう。

「どこまで冗談？」

「昨日はナンパしてないよ」

「昨日は？」

「昨日も」

「それも冗談だったりしないだろうな」

「冗談に冗談は被せない主義なの。品がないでしょう」

「とか言っておいて冗談だったり」

「よくわかったね」

話すだけ無駄な気がしてきた。

無意味な脱力感を覚える。きっと、今までの会話にも嘘が山ほどあったのだろう。

例えば、付き合ってくださいって言葉も嘘だったのかもしれない。

「帰っていい？」

「本題にも入ってないのに」

「前提ぶっ壊したのお前だろ」

誠意ある告白なら、こっちも誠意をもってお断りしたのに、ケチをつけたのは菊池自身だ。

まさかこの短時間でこれだけ冗談を言っておきながら、俺が告白を受け入れられるなんて思っていないだろう。

「じゃあ好きです。付き合ってください」

「じゃあつてなんだ。お断りします」

「友達からでも」

「嘘つきの友達はいりません」

「なら知り合いでどう?」

「それは俺が選べるもんじゃないんで」

「そっか。私たちもう知り合いだ」

やったーと心にもなさそうに言っている。

ポケットから携帯を取り出した。

「じゃあメッセージ送ってもいいよね」

「たまになら」

「一日10件ぐらい?」

「1年で一つぐらい」

「それなんかもうレアモンスターじゃん。正月に会う親戚みたいな」

「お前はテレビでちよくちよく見そうだから、それほどレアつてもんでもないだろう」

「え? どういうこと?」

「いや、お前将来捕まりそうだから」

一瞬きよんと目を丸くした菊池は、突然腹を抱えて笑い出した。

「私が犯罪者？　なるにしても二流にはならないかな。目指すは超一流」

「ぞつとする。裏のドンがお好みか」

「闇に紛れて暗躍。響きが格好いいと思わない？」

「思う」

「まじか」

肯定したら驚かれた。「えー？」と疑り深い声。

笑ったり驚いたり、疑ったり。切り替えの早い奴だ。

じろじろと、靴先から頭のとっぺんまで見られながらパンを齧る。

「世の中色んな男の子がいるもんだねえ。こんな話、引かれたことしかないのに」

「多様性が保証されてる社会だからな」

「変わりもんだ」

俺にとっては世界の方がだ。

菊池は背もたれにもたれて、椅子の前脚を宙に浮かせた。

ぐらぐらと前後に揺らすのは見るからに不安定で、こつちの方がハラハラした。

「振られちゃったー」

天井を見上げながら呑気な声。

俺はパンを飲み込んで、空になった袋を雑に縛る。

「おつかしいなー。なんでかなー」

語尾を伸ばすのは間抜けに聞こえる。

さつきまでこんな喋り方じゃなかった。狙ってやってるのか。

何が目的で、何を引き出したいのやら。

「最初から脈なんかなかっただろ」

「どうかなー。私顔は良いから、案外告白通ることもあるんだよね」

「顔よりも性格を重視する性質なもんで」

「なら余計におかしいなー。性格も抜群に良いって評判なのに」

「表面だけな。その内化けの皮が剥がれるだろ」

「そっか。中二病がだめなのか」

バンッと凄い音を立てて椅子が元に戻った。

音の大きさから分かった通り、かなり勢いをつけたらしく、前かがみになっていた菊池はゆっくり顔を上げた。

無表情と目があう。一拍見つめあって、品なく舌を出された。

「なんて冗談」

「なにが？」

「中二病」

「告白は？」

「それはどうだろうね」

とぼけられる。

ほんとなんなのこいつ。生態がよく分からない。

「ついでだし、いくつか聞いていいかな」

「答えるとは限らないけど」

「年下と年上どっちが好み？」

「年上」

「何歳まで？」

「四く五歳」

「なるほど。じゃあ、最近誰かにいいことした？」

いいことつてなんだろう。単語だけ聞けば浮かぶのは年頃ゆえのピンクな妄想。

絶対違うと分かっただけはいいが、頭の中にはそれ以外浮かび上がらなかった。

「してない」

「人助けは？」

「北村のことなら——」

「それ以外」

少し考える。

やっぱり思い浮かぶものはなかった。

「ない」

「ふーん……。落とし物届けたりしなかった？」

「生まれて一度もない」

「ふーん」

菊池は顎に手を当てて考え込む。

少し待って、今度はこつちが質問した。

「この質問なに？」

「七瀬のこともっと知りたいと思って」

「他に隠された意図がありそうだけど」

「ないない」

手を振って否定しているが、最早それを信じることも出来ない。

すつとぼけるのは得意そうだ。嘘を隠すのが上手いんじゃないかと本音を喋らないのが上手いって方向に。

「昼飯食ったし、俺もう行くわ」

「えー、もうちよつとご一緒してかない？」

「用件は？」

「写真を撮ろう」

菊池が握るスマホからシャッター音が響いた。それは机に向けられていた。ちよつと安心する。

「はい、いま撮った」と言おうとして、読んでいたのか先んじられた。

「ツーショットを撮らない？」

「お前に写真を渡すと悪用される危険があるから断る」

「ツーショットだよ？」

「最近の写真の加工ぐらい簡単に出来るそうじゃないか」

「残念。私は頑張る必要がないので、やり方知らないの」

「じゃあプリントした写真を半分破るとか」

「それは簡単だ」

くすくすと笑う菊池。

目が笑ってないので、本気で笑ってるわけじゃない。

こういう顔してる奴って何するか分からない怖さがある。

「じゃあこうしない？ 私の——」

——トントン。

菊池が何か言おうとして、それを遮って扉がノックされた。

二人で扉を見る。またトントンと聞こえた。軽い音だった。

「は、い？」

「あ、（こら）」

思わず返事をしたら菊池に諫められた。

そう言えば、鍵は横流しされたのだった。

主犯は俺じゃないが、ランチを共にしている以上俺にも少しの罪はある。

こんなところを先生にでも見つかったら説教だ。最悪指導室行きになるかもしれない。
い。

どうしようかと顔を見合わず俺たち。そんなこと知った事じゃないとノックは続き、その内扉の向こうから声が聞こえてきた。

「開けてくれる？」

聞き覚えのある声に、思わず身体が強張る。

菊池を見る。声の主が誰なのか分かっていないようで、しかたないと言う風に肩をすくめていた。

「どなたでしよう？」

「美術部の部長」

藁にもすがる思いでの確認。決定してしまった。
まじか。思わず天を仰いだ。

どうして会長が今ここに来るのだろう。

罪の意識が押し寄せる。悪いことをして現行犯逮捕されたような気分だ。

「いま開けます」

「はやく」

急かされ、慌てて鍵を開ける。

開けたそこにはやっぱり会長が立っていた。その眉根は吊り上がっている。

それに対して俺が出来ることと言えば愛想笑いしかなかった。

会長は大きな溜息を吐いた後、俺を押しつけて美術室へ入ってくる。

「こんにちは」

「あー……」

会長の顔を見て、ようやく事態を悟ったらしい。

やっちまったと表情が歪んでいた。

「生徒会の会長ですよね？　確か金折先輩。美術部だったんだ」

「ええ。部長なの」

会長は教室の隅に置かれた書きかけの絵を見た。

「触れないわよね？」 訊ねる声は問いただす様な口調だった。

「触ってません。見ただけです。それ以外は本当に指一本触ってません」

「そう。あなたも？ 菊池さん」

「はい。それに興味ないので」

「みたいね」

つかつかと未だに椅子に座ったままの菊池に歩み寄ると、腕を組み上から見下ろす様にした。

後ろで立っているだけの俺にすら凄い威圧感を感じるのに、菊池は平然と会長を見上げている。凄い胆力だ。

「ここは昼食をとる場所じゃないの。悪いけど、出て行ってもらえるかしら」

「はい。もちろん」

菊池は素直に立ち上がった。

会長が手を差し出す。

「鍵を」

「はい」

白いネームタグがついた鍵が手渡された。

ネームタグを確かめる会長の横を菊池は通りすぎ、突っ立ったままの俺に笑顔を向け

てくる。

「いこっか、七瀬」

「いや、俺は……」

「——悪いけど」

会長の鋭い声が差しこまれる。

「副会長。あなたはここに残りなさい」

「はい」

直立不動で即答した。イエス以外の返事なんてありえない。

目の前で菊池が面白くなさそうな顔をしている。

「金折先輩。七瀬が残る理由ってなんででしょうか？　もしお説教なら私の方を——」

「——」

「用があるの」

「その用って——」

「あなたには関係の無いことよ。それとも、鍵の件で職員室に行く？　一之瀬さんと一

緒に」

菊池の表情が分かりやすく変化した。

迷うように視線が惑い、目が一瞬スツと細まったかと思うとニコツと笑顔になる。百

面相だ。この場の空気と相まって、見てるこっちは怖くて仕方がない。

「わかりました。大人しくお暇します。——じゃあね七瀬。また後で話そ」

「もう話したくない」

扉の向こうに消えた背中を見送ってその場に立ち尽くす。

会長と二人つきりになった空間で何を言えいいのか逡巡し、やっぱり謝った方がいいだろうと口を開いた。

「あの、会長」

「なに？」

「美術室勝手に使っちゃってすいませんでした」

「そう」

素っ気なかった。

怒ったり悲しんだり、そう言う反応をしてくれればまだ救いがあったのだが、これほど素っ気ないといいたたまれなくなる。なんだか失望させてしまったような気がして、何とか挽回する術はないかと頭を働かせる。

「そんなことより、こっちに来てくれる？ 見せたいものがあるのよ」

教室の後方、書きかけの絵が置いてある場所に向かう会長。

その背を追いかけて訊ねた。

「……なんですか？」

「この絵。まだ途中なんだけど、どうかしら」

見せられたのは下書きだった。

女性らしき人の腕を掴んで、「この人痴女です」と男が周りに叫んでいる絵。

それだけなのになんだか面白い。思わず笑ってしまった。

「……なにかダメだった？」

「いえ、ダメなところなんてないです。けど面白い絵ですね」

「そう……？　面白い？」

首を傾げ、絵をしげしげ眺める会長の横顔を盗み見る。

その表情は怒ってない。少なくとも表面上はそう見える。

「会長。美術室を勝手に使った件は怒ってないんですか？」

「それは怒ってないわ。私が知ってるだけでも、やってる子結構いるもの。わざわざ目くじら立てるのもね」

怒られないのはありがたかったが、理由についてはなんだそれと思った。

「こんなことやってる奴他にいますか？」

「空き教室で異性とご飯なんて素敵なシチュエーションじゃない。恋人がいる身なら憧れるみたいね」

夢のシチュエーションだから一度はやってみたい人がたくさんいるらしい。

正直分かる部分もあるが、実際やってみてトキメキなんて微塵も感じなかったのも、その意見には異を唱えたい。

「そんな良いものじゃなかったですよ。引つ張りまわされて翻弄されただけで、嫌なところしか見えなかった」

「隣の芝生は青く見えるってことかしらね」

もしそうなら、見た奴は多分青が良く見えないんだろう。

ドス黒かった。何もかもが。

「そう言えば、あなたたちどういう関係なの？ 告白されたって聞いたけど？」

「なんか揶揄われただけっぽいです。告白も冗談でしたって感じで」

「全校で噂になってるのよ？」

「ああ、そうか。……あいつ俺のこと嫌いなんじゃないですかね。悪戯目的でやったとか」

「酷い子ね」

下書きの絵を、上下左右色々な角度から見ていた会長は、改めて正面から見据えて眉間にしわを寄せた。

面白いと言われたことが納得いかないと云う風体だった。

「この絵ね。痴女撲滅ポスターの絵なんだけど、笑ってしまふようなら書き直した方がいいかしら」

「これ見て笑う奴は世界で俺一人だけなんで書き直す必要はないですよ」

「どうして笑うの？」

「感性が変なんです」

「そう。なら仕方ないわね」

納得した会長は先ほどまで菊池が座っていた席まで行き腰かけた。

その前の空いている席を指さす。座れということだ。

俺が座つてすぐ「私がここに来た理由だけ」と何の前置きもなく切り出された。

「実はね、あなたを探していたのよ。葵に頼まれて」

「葵先輩が？ どうして？」

「昨日話したんでしよう？ あの子、意地でも一人にさせないつもりだったのね。前

もつて色々頼まれたわ」

「諦め悪い人ですね」

「くだらないこととして煙に巻いたのはあなたよ。誰だつて諦めぐらい悪くなるわ」

会長の語気が強いのは、あんまり調子に乗っているとしつぺ返し食らうぞつて言う説教かもしれない。身に染みる。

「いちごパフェで機嫌治るかな」

「誘い方次第でしょう。デートしましょうって誘ってみればいいんじゃない？」

「遊びに行きましようでなんとか」

「好きにきなさい」

会長は呆れたような溜息を吐いた後、ビツと指を突きつけてきた。

「葵のことは終わり。次は私」

「えつと……やつぱりなんか怒ってませんか？」

「ええ、もちろん、怒ってる」

「怒ってないって言ったじゃないですか」

「美術室の件は怒ってない。でも他のことを怒ってる。何を怒ってると思う？」

少し考える。ぱつと思いついたことを恐る恐る口にした。

「あー、女の子と二人つきりになったことですかね……う？」

「もつと具体的に」

「……えー、レイプがどうか、そう言うことですか？」

「そうね。そのことでちよつと怒ってる」

会長は一度目を瞑って大きく息を吸った。

次に目が開いたとき、そこに怒りの炎がぼうぼう燃えていた。

「私が頼んだこととは言葉、何のために一緒に登下校してるか分かってると思ってるけれど？」

「もちろんわかっています。毎日ありがとうございます。足向けて眠れません。ほんとに感謝してます」

「感謝は別にいいのよ。私がやりたいからやってることだし、感謝されるのは違うと思う」

「こんな時でもそこだけはきっちりしておくのは流石だ。もう常に頭を向けてたいぐらい。」

「とは言え、足向けたくないのでベッドの場所教えてくださいなんて言えそうな空気ではない。」

「でも、葵が言っていた通り、危機感が足りないんじゃないかと思うわ」

「あります。バリバリあります。危険予測は自信があります。信号無視だつてしたことありません」

「そんなこと言ってるんじゃない」

ちよつと怒られてしゅんとする俺に、「周りを見なさい」と周囲を指さした。

「扉には鍵がかかかって、密室で二人つきり。あなた閉じ込められてたのよ？」

「鍵は内鍵だし、隣には美術準備室ありましたよ」

「美術の先生は、昼休みにそこにはいないわ。加えて、ここは学校の外れだからひと気が全然ないの。つまり、本当にあなたはあの子と二人つきりだったわけね。どう？ 身の危険感じた？」

「感じませんでした」

「本当に？」

「少しだけ感じました」

睨まれて素直なところを白状した。やっぱり人間素直が一番だ。

会長指摘は一々ごもつともで、俺自身美術室に入る前に一通り考えたことだ。

その上でのこのこ乗りこんだわけだが、それが気に食わないらしい。

「あなたが痴女に遭う理由が何となく分かってきたわ。無防備なのよ。傍から見ても分かるほどに」

「まだ一度しか遭遇してませんが」

「きつと、これから何度も遭遇するわ。あなたがちゃんとした危機意識を持たないうちは、何度も何度も繰り返しね」

世界が変わり、世間が変わり、俺は変わらず。

この世界の常識と俺の常識は少しのズレがある。

そんな分かり切ったことはもう何度も考えた。仕方ないことだ。答えはそれしかない

い。危機意識なんて一朝一夕で身につけられることじゃない。

「これから、少しずつ身につけて行きますよ」

「今更身につけられるの？」

「まだ高校生ですから」

探るようにじつと俺を見つめていた会長は、やがてふつと笑みを浮かべた。仕方ないと言おうように眉尻が下がった。

「あなたって、やっぱり変わってる。年のわりに妙に達観しているし。本当にこの前まで中学生だったの？」

「昔は15歳で成人だったらしいですよ。俺は一人暮らし長いんで、周りより多少大人かもしれません」

「そうね。一人が長いと、やっぱり……」

同意する会長は目を伏せている。

その目が少し悲し気な瞳をしている気がして、どうしたのだろうと気になった。

「ご両親とは——いえ、ごめんなさい。なんでもないわ」

「そうですか」

出過ぎたと思つたのか、途中で言葉を引つ込めてしまった。

別に聞いてもらつても構わない。母親のことなら笑いながら話せる。種違いの妹が

できたんですよなんて、聞いたらきつと驚くだろう。

ああ、でも。父親のこととなると、まだ少し無理かもしれない。

今考えただけで少し胸が痛んだから。

「教室に、戻りましょうか。もう時間ですから」

「そうね。ちゃんと葵に謝るのよ」

「ちよつとやばかったですつて言った方がいいですか？」

「言わない方がいいわ。ここだけの秘密にしましょう」

笑い合いながら美術室を後にする。

自分の教室に戻って行った会長と別れ、階段を上りながら少し考えた。

結局、俺と菊池の関係はどうなったのだろうか。

間違いなく恋人ではない。友達も違う。ならやはり知り合いつてところだ。

全校に噂が拡散した割に、そんな曖昧な結果に落ち着いたと言うのは少し納得できないが。

とは言え、無理やりにも納得しないとまたあらぬ噂が立つかもしれない。

その事を考えると、やっぱりあいつと話すのは、1年どころか10年に一度ぐらいで十分だ。

第14話

菊池の件がとりあえず一区切りついて、面倒くさいことが一つ片付いたと胸をなでおろす。

正直油断していた。そんなときに不意打ちを食らってしまったのだから、堪ったものじゃない。

今日最後の授業、数学。本日の授業内容は予告なしの小テスト。

一応は100点満点で、問題数は二十問ほどであった。

単純に考えて一問5点配分になるのだろうか。しかし最後の方の問題がやけに難しかったので、そう単純な配分じゃないのかもしれない。

ただでさえ立て込んでるのにこんな余計なことしやがってと、ここ数日勉強に身が入っていないかった事実を愚痴と一緒に痛感する。

最近習ったはずの応用問題に頭を抱えている内に時は残酷に過ぎて行き、アラームが鳴って教師の号令で回収される。

後ろの席から回ってくる解答用紙に自分の用紙を重ねて溜息を吐いた。

なんとか全ての答えを埋めることは出来たが、満点を取れたかどうかは怪しい。

このテストも会長なら余裕で満点を取るのだろうか。たぶんとるんだろう。

会長以外でも溜音先輩も案外頭が良いらしく、もしかしたらあの人でもこれぐらいの復習問題は満点をとれるのかもしれない。葵先輩については言及するだけ酷なのでも言わないけど。

こう考えてみれば生徒会の三年生は才色兼備が揃っている。

二年生にしても成績優秀者が多いと聞く。唯一の一年生で、平々凡々な俺としては肩身が狭くなる思いだった。

そもそも当選したこと自体間違いだつたと言う意見もある。北村の言葉を借りるなら運が良かっただ。この運がいつまでも続くとは思えない。来年はどうなるだろうか。当選できるだろうか。出来なかつたらどうしよう。

考えていて段々不安に駆られた。今考えても仕方無いことだとは分かっているのだが、一度こうなつてしまうと悪い方向にばかり考えてしまう。

いつもならこんな不安簡単に笑い飛ばしてくれる北村はいない。

じゃあどうするか。胸の内に溜めて悶々とするのは健康によくはない。

と、いうわけで放課後、俺は生徒会に行く前に二年生の教室へ向かった。

「聞いてくれますか」

「なに、急に……」

窓拭きをしていた二年の先輩に突拍子なく声をかけた。

先輩は突然現れた俺を鬱陶しそうに迎える。

「ここ二年生の教室だけだ」

「二年A組ですよ。知ってます」

「だったら入ってくんないよ……」

これ見よがしに大きな溜息を吐いて窓に向き直る先輩。

俺もその辺に転がっていた雑巾を持って先輩の横に立った。

「で、なに？」

「聞いてくれるんですか？」

「ちやつかり掃除までしてるくせに……」

まあ、俺も逃がすつもりはないのだが。

「で、どんな話？」

「相談というか愚痴です」

「友達にでも言ってるよ……」

「数少ない友達が休みなんです。しばらく学校きそうにないんで、早めに発散させて

おきたいなって」

「それで何で僕？」

「先輩皮肉屋の熱血漢じゃないですか。わかりにくいド正論でぶん殴ってくれるかなって」

「君僕のことそんな風に思ってたのか」

窓の上の方に腕を伸ばしながら、先輩は横目に睨んでくる。

「三年の先輩方なら真摯に聞いてくれそうだけど……」

「それ溜音先輩も含まれてます?」

「あの人だつて、別に君のこと憎んでるわけじゃない。真面目に相談すれば真面目に聞いてくれるよ。たぶん」

「弱みを見せたら一生弄られますよ。あれにマウント取られるなんて絶対嫌です」

「一生ね……」

先輩は何故かいつも以上のニヒル風味で笑った。

その笑いの意味が今一わからず先輩を見る。

チラッと一瞥されたと思いきや、「ふん」と小馬鹿にするように笑われた。

「まあ、いいや。言いたいなら勝手に言いなよ。こっちは掃除の合間に、暇つぶしで聞いてやる」

「あざっす」

一度先輩を向いて頭を下げる。それから窓に映る自分を見ながら切り出した。

「将来のことです。将来って言うか一年後ですけど」

「あー……」

「それを僕に聞くかあ……」と先輩は嘆きに近い声を上げた。

来年、二年生は受験だ。先輩としても思う所はあるだろう。でもそんなこと俺にとつてはどうでもいいので、無視して話を進める。

「俺一年生のくせに運よく生徒会入れたじやないですか。まあ入りたくて入ったんで、それは嬉しいんですけど、来年も入れるのかって不安になりました」

「んー……」

「生徒会の三年生つて学校で一番二番を争う人たちばっかりで、二年生だつて凄い人ばっかりだ。それに比べて俺つてどうですか。普通じやないですか」

「はー……」

「さつき小テスト受けてきたんですけど、結構難しくて満点取れそうにないんですよ。でも、こんなテスト会長なら楽勝で満点何だろうなあつて思ったらなんか不安になりました。俺来年大丈夫なんだろうかって」

「あー……」

話をしている間、先輩は相槌を打つ代わりに手が動いていなかった。

その分俺が手を動かす。

「先輩どう思います?」

「それはさあ……」

「はい」

「僕に聞くなよ」

心の底から嫌そうに先輩は言った。

「三年生については僕も同じ気持ちだよ。背伸びしても手を伸ばしても逆立ちしても、足元にすら届かない人がいる。僕は来年この人と比べられるのかと思うと鬱になる」

「まあ、そういうのもありますかね……」

先輩の口ぶりでは誰か個別の人物を上げているようだったが、具体的にそれが誰なのか分からなかった。

詮索しようにも、今俺は相談している身だ。余計な口は挟まずに黙って話を聞いたほうが良いだろう。

「この間テストあつただろう。君何点とれた?」

「主要科目の平均で76です」

「そうか。僕は79だ」

さらっと自慢されたが、俺よりも高得点なところはさすがというべきか。

この人の性格で実力伴わなかったら馬鹿にされるだけだし。

「76点か。この学校でそれだけとれば十分だ。頑張ってるじゃないか。で、噂だけで、会長はほとんど満点に近いつて話。柏木先輩はその一つ下らしい。あれを満点つて、どんな化け物だよ」

「下つて言うのは順位がですか？」

「たぶん」

となると溜音先輩もほとんど満点を取っていることになる。

受けたテストの難易度を思い出し言葉を失う俺に、先輩の口端が吊り上がった。

それはいつも通りのニヒルな笑みのはずだが、話している内容のせいか、自嘲しているようにも見えた。

上から見れば、俺たち二人の点数なんて団栗の背比べだ。

「二年後、僕があの人たちみたくなれるとは思わないけど、だからって卑下するもんじゃない。僕ぐらいでも成績はトップクラスだ。君だつてそうなんじゃないのか？」

「順位は分かりません。聞いてないので」

「ふん。そうかい。とにかく、絶対評価なんだからテストの点数で負けようが平均評定で4.3以上とればいいんだ。できれば4.5……欲を言えばそれ以上は欲しいけど」

「先輩も推薦狙いですか？」

「そのために生徒会に入ったんだよ」

鬱憤を晴らすように力強く窓を拭き始めた先輩は、その語気までも力強いものになった。

「男とか女とか関係ない。頭が良い奴が勝者だ。学歴社会ってそういうもんだらう？」

「まあ、そうですね」

「そうなんだよ、絶対」

この人も結構こじらせてる。

女に対して敵愾心を抱いてるように見える。

男だからで差別されたことでもあるんだらうか。

「……俺、来年生徒会はいれるかな」

「それを決めるのは僕じゃないから知らないけど……」

「ですよねえ」

別に解決を望んで話した訳じゃないが、先輩に話してみても気持ちが悪くなったりはしなかった。

会長たちの凄さを教えられただけだ。凄い人たちだと改めて思う。満点とかどうやったら取れるんだ。

無言で窓を拭き、こちらも一心に拭いていた先輩の動きが急に止まった。

チラツと横目に見てくる。それで窓ふきを再開しながら――。

「まあ、僕としても多少見知った人の方がやりやすいから、頑張れよ」

そう言ってくれた。

「はい。頑張ります。じゃあ俺はこれで」

「おい、待て。話聞いてやったんだから、君も少しは誠意見せるよ」

「金ですか？」

「ちつがう。最後までやってけ」

ぞうきんを絞って窓を拭く。水滴のついた窓の向こうでは、たゆたう雲がゆつくり動いている。

開いた窓からは風が吹き込んで、涼やかな陽気を運んできた。

青い空に一点の黒。鳥が一羽飛んでいた。カラスだろうか。奴は大空を気ままに飛んでいる。

いくら先のことを心配したところで、結局その時が来ないとどうなるかなんてわからない。

俺に出来ることは、今できることを全力でやることだけだ。

それにも、先送りだとか考え無しとか色々異論はあるけれど、とりあえずはそんな感じで、この不安は決着としよう。考えなきやいけないことは他にもたくさんある。

そんな事を思いながら、ぞうきんを絞った。

第15話

約束と言うのは大事なことだ。

一度交わしたのなら守らなければいけない。

そんなこと一々考えずとも当然のことで、だけどついつい忘れがちになってしまふ。だから、わざわざこうやって心に刻んで、次は忘れないようにしなければいけない。そう心を新たにすることがあつた。

数学で卑怯な奇襲を受けた日の放課後のこと。葵先輩と一つ約束をした。

それは単純に何の捻りもなく、『一緒にいちごパフェ食べに行こう』という約束だ。

丁度約束した日は金曜日だったので、週末土日どうですかと誘つたのだ。少し遠めのスイーツ店の検索結果を携帯に表示させながら。

生徒会の行事中、仏頂面ですつとパソコンと格闘していた先輩。それは何も不本意な仕事を押し付けられたと言うばかりではないだろう。

今日、昨日のわだかまりが尾を引いているのは火を見るより明らかだった。

仕事に区切りがついて、役員のほとんどが下校した後、見せられた検索一覧に心魅か

れたようで、今度はそっちを熱心にスクロールしていた。

非常に強い手応えを感じた俺は、後ろに控える溜音先輩をけん制しながら葵先輩の言葉を待った。

「これいいなあ……」

「行きますか？」

「行きたい……。でも、週末かあ……」

「ご用事でも？」

「部活」

6月が終わり、もう夏だ。8月にはまた大会があるらしい。

先輩の場合冬の大会にも出られるらしいが、それでも高校三年間で3回しかない夏の大会だ。いつでも行けるスイーツ店よりそっちが優先だろう。

大会が近いから土日は大体埋まってるらしい。かと言って放課後にちよつと足を延ばせる距離でもない。困った。

「7月は期末もあるし、近いうちはちよつと無理だな」

「うーん。残念ですねえ。じゃあまた今度ですか」

夏休み、大会が終わった後ぐらいなら空いてるだろうか。

未来に思いを馳せるが、それもその時が来なければ分かるまい。

「それなら、とにかくこれで機嫌直してください」

「あ？　なんだこれ」

「イチゴ大福です」

ピンクの外装は、よくコンビニに売ってる生地がモチモチのやつ。

別に俺はイチゴが好きってわけではないが、これは結構好きだ。モチモチだから。

「なんだってこんなの持つてるんだ」

「昨日のあれで怒ってるだろうなあ。ご機嫌取りアイテムですね」

「抜け目ない奴」

瞬間湯沸かし沸騰機などところのある先輩は、瞬間冷凍機の性質も兼ね備えているので、こんな1000円そこらの袖の下でも満足したようだった。

噛んではみよーんと伸びる生地に大層ご満悦で、食べ終わるころには俺への怒りはさっぱり消えていた。

それが昨日の話。

今日は土曜日。学校は休みだ。あくまで建前上は。

うちの学校は自称進学校らしく土曜日も授業がある。

それ自体、自由参加とは銘打っているものの、その実土曜日の授業でしか習わない箇所も平気でテストに出題されると言う鬼畜っぷりだ。

これに出席しなければ満点なんて狙えない。平均8割もいかない俺が逃せる理由なんてなかった。

というわけで、土曜日もいつも通りの時間に起きて食パンを齧っていたのだが、一つ忘れていたのを思い出した。

会長と一緒に登下校すると言う約束だ。

土曜日の自由参加授業のことは一度も話し合ったことがない。恐らく会長も土曜日は登校しているはずなのだが。

試しにメッセージを送ってみる。

数分待つて、既読はつかなかった。

ならば電話をとかけてみて、留守番電話サービスに繋がる。

これから得られる答えは一つである。もしかして、会長はいま寝てるんだろうか。土曜日の授業は出ない？ どうやって満点取ってるの？ 謎だった。

これが平日だったら俺は喜び勇んで会長の家に向かうのだが、生憎今日は土曜日。普通の学生にとっては休日だ。

休みの日に、寝ている人を起こす気にはなれない。

会長はこのまま寝かせておいて、帰ってきたら話をしよう。

土曜日だし、電車もそれほど混んでるわけではない。

わざわざ会長に守ってもらふ必要もなさそうだ。いざとなれば秘策もある。刑事ド
ラマを見ていて思いついた事だ。

勝手な判断を下しバツグを担いで家を出る。

外は昨日と比べて少し暑かった。

この分ではセミが鳴き始めるのもそう遠いことではない。夏が来たな。

バツグを担ぎ直しながら思った。

駅で電車を待つ時間。

土曜日だと言うのに、世間は休日と言う雰囲気ではない。

学生の姿はぐんと減るが、スーツを着た会社員の数自体はいつもと変わらないように思える。男女の比率が記憶と食い違っているが、それにももう慣れた。

たぶん、社会人は日曜日が休みという人が多いんだろうが、学生の身分では週休一日と言うのは想像して楽しいものではなかった。

俺も土曜日に授業があるとは言え午前授業だし、昼には帰れる。明日は休みだ。半日と言うのは結構デカイ。

電車を待つ列の最前列に並び、たまに電光掲示板を見上げる。

間もなく電車がまいります。心の中で文字を読む。

欠伸をしてから前を向いた。

遠くから、電車の近づく音が聞える。

向かい側のホームはこちら側と比べてあまり混んでいない。

それでも10人以上は人がいる。並んでいると言うよりはバラけているが。

何の気なしにその人たちを眺めていると、階段を下って人がやってきた。

女性だ。ハイヒールを履いて、丈の長い白いスカートに純白のブラウス。

その人は眼鏡をかけていた。遠目から見ただけだが、どこかで会った気がした。

女の人はずつくりと歩き、俺と向かい合う位置まで来ると立ち止まり目を合わせてきた。

知らない人と目が合ってしまったことが気まずくて、思わずこっちが逸らす。

それでも視界の隅でちらちらと見ていた。やっぱりどこかで見た気がする。

考える俺に向けて、女性はおもむろに携帯を構えた。

シャッター音は聞こえてこなかった。

でも、もしかしたら聞えなかっただけかもしれないし、動画を撮っているのかもしれない。何にせよ、カメラを向けられて良い気持ちなどしない。思わず彼女を凝視する。

眉を顰める俺を見て、女は笑った。

笑いながらゆつくりと手を持ち上げる。その手が眼鏡に触れる。外した。

素の顔が露わになった。

眼鏡一つで印象はかなり変わるものだと思った。美人だった。目つきが鋭く強気な性格が顔に出ている。

そして、やっぱりその顔には見覚えがあった。思い出した。

あの時はスーツだった。今は私服を着ている。気付かなかった理由の一つがそれだ。いつか遭遇したやばい目つきの痴女が、そこに立っていた。

痴女は俺に手を振ってきた。笑顔で、親し気に。

いやいや待てよと心の中で突っ込む。なんでそこにいんの？　なんでそんなに好感触？

次々に言いたいことが流れ、言葉にならず消えていく。

何も出来ずに呆然と見つめて数瞬。直後に電車が滑り込んでくる。強風に吹かれ、咄嗟に目を閉じる。

目を開けたとき、目の前には電車が止まっていた。

空気の抜ける音がしてドアが開く。それを前に一瞬動けず、後ろから押されてようやく我に返った。

急いで電車の反対側の窓に噛り付く。

痴女はまだそこにいた。窓越しに俺を見つけて小さく手を振っている。

「なんで……」

思わず零れた声に答える人はいない。

間もなく電車が発車し、俺と痴女の距離は離れていく。

見えなくなるまで、痴女は俺に手を振り続けていた。まるで知り合いに振るようになりにこやかに。

揺れる電車の中で心臓がバクバク早鐘を打っている。

思わぬところで、思わぬ人と会った。

二日前、痴女行為を働いてきた犯人。

また会ってしまった。もしこれを会長が知ったら怒るだろう。

土曜日も一緒に登校すると言いかねない。これ以上迷惑を掛けたくない。土曜日ぐらいゆつくり眠ってもらいたい。

会長の怒った顔を想像して落ち着いてきた。心拍数も元に戻っている。

しかし、つくづく反対ホームで良かったと思う。

もし今また痴女られたら少し面倒になっていた。少なくとも、学校には行けなかっただろう。

本当に、反対ホームで……。

「あ……」

嫌な予感を覚えて声が漏れた。

あの女はこんな朝早くにあの駅にいた。

前に会った時は同じ電車に乗り合わせただけだ。

どこの駅から乗ったかなんてわかりっこない。

けれど、もしあの日俺と痴女が同じ駅から乗り込んでいて、もしホームにいた時点であいつが俺に目を付けていたのなら――。

先ほど呆気にとられた俺と違って、あの痴女に驚きはなかった。

むしろ最初から俺がここに居ると知っていたように、笑顔で手を振ってきた。

冷や水を浴びせられる。そんな感覚に襲われた。

最初からあいつは俺の最寄駅は知っていたのか。

もしかしたら、俺が知らないだけで昨日もあの痴女はどこかで俺のことを見ていたのかもしれない。

平日の雑踏の中から見られていても気づけるはずがない。

俺も会長も見られているとは知らず、話し込んでいたわけだ。昨日は菊池の件に触れられたくなくて、風呂で最初に洗う部位とか、変な話題を振りまくっていた。あれを聞かれていたなら恥ずかしい。

今日はたまたま痴女行為は働かなかったようだが、これからは言い切れない。

顔を覚えられてるし、その内また狙われる可能性はある。最初に思いっきり撃退してるから、その可能性はあまり高くないだろうけど、あの目を思い出すと妙に不安になる。まったく予想だにできなかったことを仕出かしそうな怖さ。

犯罪者の心理なんてわからない。中には本当に頭のいかれた奴もいるらしいし。

理解しようとしてこっちまでいかれたら元も子もない。あんまり考えるのはよしたほうがいいかもしれない。

あー、でも……菊池ならなんか分かつちやいそうだな。

あいつ一流とか二流とか独特の価値観持ってるし。

昨日の菊池との会話を思い出して、機会があればそれを聞いてみようと思頭の片隅に書き留める。

まさか俺の方からあいつに話すことがあるなんて。

10年に一度だなんて考えてた昨日の自分に聞かせてやりたい。

たぶん、全力で否定するのだろうが。

第16話

土曜日の授業は平日の授業より10分長い代わりに授業数は一つ少ない。

おかげで少しばかり早く帰れるのだが、内容は教科書に載っている問題から一步踏み込んだものが多く濃密だ。数学で言えば発展、応用、偶に発展の発展って感じ。

テストに出てくる問題にそんなもの出してくるなど言いたいが、この授業を受けなくてもきちんと勉強すれば平均点は取れるようになっていってしまう。

鬼畜の癖に絶妙な手加減が上手いものだ。もうちよつと別のところを手加減してほしいが。

土曜日の授業は体感早めに過ぎていく。

集中しているから時間が過ぎるのが早い。気がついたら11時を過ぎていて授業終わりのチャイムが鳴った。腹の虫も鳴きそうになる。

頭を使った後は糖分を取ると良いらしい。コンビニでイチゴ大福でも買っていくかと席を立つ。

廊下から見えるグラウンドではサッカー部がボールを蹴っていた。

他に陸上部がバーを跳んでいる。葵先輩は今ごろ体育館か、もしくはロードワークだ

ろうか。

様子を見に行こうかと思ったが、部外者が行っても邪魔でしかないから遠慮する。大会が近いのだ。一秒一秒が貴重だろう。

頑張ってくださいと心の中で応援した。今度直接伝えよう。

玄関で靴を履き替え、校門に向かいながら携帯の電源を入れる。

いくつかメッセージが届いていた。

それは全部送り主会長で、一番新しいのは『校門で待つてる』だった。

校門に目を向ける。

遠くの方、帰る生徒たちに混じって私服姿の女子がいる。あれがそうなのか。

クラスメイトと思しき人と話をしているようだった。

まだこつちには気づいていない。

知らんぷりしてこつそり横を通ろうと思えば通れそうだ。

後が怖いから絶対しないけど。

友人と喋っている会長にゆっくり近づく。

邪魔するのも何だから少し待とうかと携帯を開いた。丁度その時俺に気づいたらしく、友人に手を振ってこちらへ向かってくる。

いつもより歩幅が大きく、真っ直ぐ俺を見据えていた。止まる気配がない。ぶつかる

んじゃないかと思ひ、無性に道を譲りたくなつた。

「こんにちは」

「こんにちは」

俺の目の前で立ち止まつた会長は声に抑揚がなく表情は全く動かなかつた。

会長の私服は初めて見る。ジーンズに白いシャツ。カーデイガンを羽織つていた。手には紙袋を提げている。似合つてます、会長。

「どうかしたんですか？」

「携帯持つてないの？」

「いや、今電源入れたところなんです。ああ、いくつか届いてますね」

確認しようと目を落す俺を会長は「いいわ」と遮つた。

「あなたこの後予定はある？」

「家帰つて飯食うぐらいしかありません。デートですか？ 喜んで」

「違うけど」

少しばかり冷たく否定された。

機嫌が悪いようだ。軽口には付き合つてくれそうにない。

「光から連絡があつたのよ。今家にいるつて。週明けから学校に来られるそうなんだけど、一度顔を見ておこうと思つて。もし暇なら、あなたも一緒に行かない？」

「行きます」

北村関連だとは予想だにしていなかったが、考える間などなく即答した。

会長は頷いて「じゃあ行きましょう」と先に歩き始める。

早足で追いついて隣に並んだ。

会長の私服を堪能している内に、自分の身なりが気になった。これから友達の家に見舞うわけで、俺は制服だ。着替えた方がいいだろうか。

「俺制服なんで一回帰ってもいいですか？」

「そのままでもいいわ。駅、逆方向なの。行ったり来たりは面倒でしょう？」

「まあそうですね。じゃあ何か買っていったほうがいいですよね」

「あるから」

会長は紙袋を持ちあげた。

中身を覗くとクツキーのようだ。用意が良い。

「いくらでした？ 半分払います」

「これぐらい別にいいわ」

「そういうわけにも」

「ねえ、七瀬君」

食い下がろうとしたら名前を呼ばれ、会長は足を止めた。

「私は年上ね」

「はい」

「女ね」

「そうですね」

「君は男の子よ」

「はあ」

何が言いたいのか今一ピンと来ない。

困惑しながら、取りあえず財布を取り出した腕をがしつと掴まれ、そのままポケットに誘導される。

「私の顔を立てなさい」

年上の矜持だとか面子だとか。

そういうので顔を立てることはやぶさかではない。

ただ、先ほどから会長の言動がどことなく俺を責めているような気がして、易々従うのは抵抗感があった。

「じゃあ男の顔も立てください」

「なによ、それ」

払う払わないで半ば睨みあい、しのぎを削り始めた俺たちを通りがかる生徒たちが好

奇の目で見てくる。

中には当然俺たちの顔を知っている人もいて、「生徒会長と副会長が見つめあつてると噂していた。

よく見ればそんな甘酸っぱい状況じゃないのは分かるだろうに。

「いくらしました？ 4000円ですか？ 5000円ですか？」

「あなたねえ」

「なにを怒つてるんですか、会長」

会長が言葉に詰まった。

この隙をついて財布を逆の手に持ち返る。

掴まれてる腕で逆に会長の腕を掴む。

「で、いくらですか？」

「……」

会長は掴まれた腕を目つき悪く見ていた。

それを気にしつつ財布の中を覗くと1000円札が4、5枚ある。

小銭はどれだけあるだろうかと、片手が使えないので振ってみた。

音からしてそんなにない。

「会長？」

「……どうして今日、勝手に行ったの？」

「連絡はしましたよ」

「そうね。履歴残ってた」

何か口を衝いて出そうな物を必死に耐えているようだった。唇を噛みしめて自虐的な顔をしている。自嘲すら浮かんだ。

「油断したわ。土曜日も授業があつたのね。忘れてた」

「俺も忘れてました」

「二人とも落ち度あり、か……」

ため息を吐いた。諦め顔になる。

なおも湧き上がってくる感情を何とか抑えようと必死らしかった。

「なら私が君に怒るのはただの八つ当たりね」

「ですな」

「……分かっていても、そうやって開き直られるのは癪に障る」

忌々しそうに睨まれる。

なるほど。知らず知らず逆撫でてたか。言動には気を付けよう。

「じゃあ八つ当たりしてみますか。俺は別にいいですよ」

「八つ当たりはしないけど、辛く当たるかもしれない」

「それを八つ当たりって言うんじゃないやなかったでしたっけ」
「そうね。その通りだわ」

会長は一方的に会話を打ち切って歩き始めた。

周囲でこそこそ噂していた野次馬たちも、俺たちの距離が開くと途端に興味を失つていく。

会長の背中に着いて行き、その内交差点の信号に差し掛かって立ち止まった。俺たちの間には少しの距離があったが、背中越しに声が届いた。

「4500円を割り勘で2250円よ。払える？」

小銭を見る。なかった。

「250円ありません」

「それぐらいはまけるわ。女の顔よ」

「では喜んで立てさせていただきます」

「安い顔だけどね」

自嘲するような声色だった。

そんなに自分のことを卑下しなくても、全然安くなんかないんだと伝えたくなくなった。
「会長の顔は俺の手が届かないぐらい高いですよ」

「いま随分値引かれたけれど、それでもまだ高いかしら？」

「すつごい高いです。背伸びしても届かないぐらい。俺が富士山なら会長はエベレストですよ。もつと行くかもしれない。自信もつてください」

「ありがとう。でもそういう自信はいらなかな」

社交辞令でも何でもなく本心だった、上手く伝わった気はしなかった。

とりあえずさつきまでの刺々しい雰囲気は和らいでいたので、2000円を手渡す。

「土曜日授業受けてないんですね。意外です」

「ええ。まあ」

「それでテスト満点とれるもんなんですか？ コツとかあるなら教えてくださいよ」

「コツなんてないわ。毎日勉強しなさい。それだけよ」

学校の先生と一言一句同じことを言われた。

やっぱり地道に学力を上げるのが一番なんだろうか。

このまま地道に行っても満点を取れるとは思わないけど。

「私、あなたにテストの点数教えたことあったかしら」

「人に聞きました。ほとんど満点とってるらしいって」

「誰から？ 溜音？」

「石田先輩。あくまで噂って言ってましたけど」

「噂ねえ……」

会長は自分のテストの点数が知れ渡っていることへの嫌悪感でしかめ面をしていた。

「土曜日の授業を受けるよりも、瑠音と勉強した方が捗るわ。あの子凄く頭が良いから」
「でも会長の方が点数高いって聞きましたよ」

「それも噂？」

「はい」

「じゃあそれは間違いね」

それまでと一転して、なぜか勝ち誇ったような声音だった。

「実は私より瑠音の方が頭いいのよ。テストの点数もあの子は満点ばかりだけど、私はたまにしか満点は取れない。天と地ほどの差があるわけね」

自信たっぷり、それが当たり前だと言うように。

瑠音先輩の話をしていたと言うのに、会長は勘違いして誰か別の人のことを言っているのだと思った。

けれどそれが勘違いじゃないと理解して、何とか絞り出した声は我ながら疑念に満ち満ちていた。

「えー……？？」

「あなた信じてないでしょう」

「普段の瑠音先輩を見て頭いいとは思いませんよ」

ことあるごとにプロレス技で痛めつけてくるあの人が、会長より頭が良いとはとてもじゃないが思えない。

「会長が地なら俺はどこになるんですか。地底ですか」

「頑張って這い上がってきなさい」

モグラじゃないんだから、そんな所から這い上がってこれるものか。

仮に這い上がれても頭上で瑠音先輩が爛々と輝いているならげんなりする。

「普段の言動があれだから誤解されやすいのよね。噂なんてそれぞれのイメージで勝手に作られるものだし」

「勝手に馬鹿だと思っていました」

「それは否定しないけど」

馬鹿とクレバーのハイブリットか。新種というよりは珍種だろうか。

学名はデビルンで決まりだ。

「石田君が聞いた噂も、私と瑠音が引っくり返ってるんじゃないかしら」

「そうなんですかねえ」

「きつとそうよ」

瑠音先輩が頭いいねえ……。

会長がそう言うなら本当なのだろうが、やっぱり信じられない。

だってあのデビルンだぜ？

その新事実をどう受け止めればいいのか少し悩む。

このままでは俺の中に確とあった柏木瑠音という存在が根底から引っくり返りそうだった。直前まで易々浮かんでいた瑠音先輩のイメージが霞んでいく。

これはいけないと散々悩んで、やっとのこと収まりの良い答えが見つかる。

それはただの現実逃避だった。

「聞かなかったことにします」

「まあ……そうしたいなら別に止めないけど……」

余計な情報を頭の中から綺麗さっぱり消去したおかげで、柏木瑠音の顔が鮮明に思い出せるようになる。

小憎たらしい笑顔だ。今にも殴りかかってきそう。やっぱり瑠音先輩はこうでなきやいけない。

「無駄話が過ぎましたね。早く行きましょう」

「無駄……」

不服そうな会長の手を取って走り始める。

「ちよつと!？」と会長が声を上げたが無視した。

今しがた聞いたことを振り切るためにもひたすら走り続けた。

風を切って人の群れをくぐり駅に向かう。聞える足音は二つ。

途中で会長を呼ぶ声があった。けれど立ち止まらなかつた。振り向くことすらしなかつた。

振り向けばインテリ風味な溜音先輩が追いかけてきている気がして、駅に着くまでずっと走り続けた。

第17話

駅に着いた時、丁度タイミングの良いことに電車が来ていた。

急いで階段を駆け下りて、駆け込み乗車にはなるがそのまま飛び乗った。

ジリジリと発車を知らせるベルの音を聞きながら、乗り込んだ直後に扉が閉まり電車は発進する。

静かな車内。所々席が空いてるぐらいには乗客がいた。誰も飛び乗ってきた俺たちのことなど気にもしていない。

会長と俺はお互い肩で息をする。思ったよりも疲れた。

道中を思い返す。そこそこ距離はあった。けれど一度も止まらなかった。そりゃあ疲れもする。

不思議なことに今こうしている間、疲れだけでなく爽快感も湧き上がってきていた。久しぶりに運動して、身体の中に溜まっていた悪いものが全部発散されたようだった。

「どうして、走ったの……？」

「走りたくなっただけです」

嘯く俺に、会長はじとつとした目で見てくる。その視線を躲しながら二人で座れる席

を探した。

座席の真ん中らへんが空いている。座りましようとしてそこを指さした。

「次からは一人で走って」

「次があるのは嬉しいですね」

会長の視線がさらにきつくなる。

これだけ睨まれてようやく気付いた。実はかなり頭に来ていたらしい。走った事だけじゃない。一人で学校に行ったこともまだ尾を引いていたようだ。

その辺りの察しが悪すぎた結果、会長の出す警告音を聞き流し機嫌を再降下させてしまった。

あまり考え無しに行動する物じゃないと反省し、まったく同じことを反省したの思いう出す。ついさっきのことだ。まるで活かされていない。

会長はつつけどんな態度で紙袋を抱えるようにして席に座った。

「失礼しまーす」と小声で言いながらその隣に座る。何も言っただけはくれなかった。

車内のどこからか、時おり小さな話し声が聞こえてくる。だと言うのに、俺たちの間には無言の沈黙があった。痛いぐらいの沈黙。痛みを受ける側には緊急事態だったが、電車はそんなこと気にもせず進む。

「……」

「……」

妙な緊張感だった。

紙袋を抱えた会長は背筋をピンと伸ばし、移り行く窓の外を見るとはなしに見ている。

今日すでに二度怒らせた相手に声をかけるのはかなりの勇気がいることだった。

けれど後回しにすればするほど、必要な勇気の量が多くなるだろうことは雰囲気ですとなく察していた。

声をかけるなら今しかない。

「会長。謝罪と世間話どっちが良いですか？」

「謝罪するようなことを何かしたの？」

「無理矢理走らせました」

「その謝罪ならいらわないわ」

拒絶された。

ならば世間話だと開き直すことはできなかつた。

それでも何か言わなければいけないと、会話の取っ掛かりを探している内に一つ目の停車駅に止まる。

会長は立ち上がらなかつたので、俺も座ったまま降りする人たちを眺めていた。

やがて人の行き来がなくなり扉が閉まる。
心なしか乗客の数は少なくなったようだ。

何一つとして妥当な言葉を思いつかないまま、窓の外の町並みが見覚えのないものに変わっていくのを眺めていると、唐突に会長が口を開いた。

「静かね」

「電車ですから」

会話はそれだけだった。

終わってから、もう少し気の利いたことを言えたのではないかと反省する。

会長が美人さんだからみんな言葉が出ないんですよなんて下らないお世辞を思いつき、言わなくてよかったと胸をなでおろす。

二駅が過ぎ、三駅が過ぎても無難な第一声と言う物が思いつかない。

普段どんな会話をしていたのだったか。相手の機嫌が悪いと言うただそれだけのことでどうも口は回らなくなる。

人間素直が一番だろうか。空回った思考は開き直りにも近い、そんな結論に辿り着いていた。

「怒ってますか？」

「別に怒ってないわよ」

待ち構えていたように返事は素早かった。

「本当に？」

「機嫌の悪い時に走らされて、少しイラッとしただけ」

「怒ってるじゃないですか」

「もう怒ってない」

「すいませんでした」

「怒ってない」

頑なに怒ってないと繰り返す会長がとても可愛く見えるのはなぜだろう。

二歳年上のお姉さんのはずだが、目の前にいる会長は同じ年ぐらいに感じる。

ここが学校の外で、会長の格好が普段目にする制服ではなく可愛らしい私服なのが大きい。そのせいで、いつもあるはずの上下関係が薄らいでいる。代わりに悪戯心がむくむくと膨れ上がってきた。

「どうしたら許してくれますか」

「怒ってないったら」

「なんだかとても申し訳ないです……」

声だけしおらしくしてみた。

会長はびくっと反応して横目に様子を窺ってくる。

俺の表情がほとんどいつも通りなことを知り、ぷいっと視線を前に戻してしまった。「年上をからかうのがそんなに楽しい？」

「葵先輩をからかつてる時とは別の興奮がありますね」

「……」

口を真一文字に引き結び腕を組む。攻撃的な気配が滲む。臨戦態勢になった。

それは俺の全てを拒絶しているようで、状況はさらに絶望的になった。自業自得でしかない。

人間素直が一番だと言っても限度があるだろう。

「会長が怒ってる姿はなんか新鮮です」

「……」

「学校で怒るときは生徒会長の肩書で怒りますから、素で怒ってるところ見ると、年相応の女の子みたくて可愛い」

「……」

「さっき突然走り出した理由ですけど」

何も言っただけはくれないが、隣だしまあ聞いてくれているだろうと信じて言葉を重ねる。

「溜音先輩のイメージが滅茶苦茶になりそうだったんです。満点ばかり取っていると

か、会長より頭が良いとか。そんなの全然イメージと違って、頭の中が整理しきれなくなつて、がむしやらに走りたくなりました。付き合わせちゃつてすいません。一人で走ればよかつたですね。次からは一人で走ります。どこまでも行ける気がする」

俺の言葉とは裏腹に、電車の速度が落ち始めた。次の停車駅が近い。

慣性で身体が会長の方へ傾きそうになるのを必死に耐える。

本格的にブレーキが効き始めた辺りで、会長が長い沈黙を破り言葉を発した。

「それはそれで困る」

短く端的で、それだけ聞けば我が儘を言っている子供のようだった。

実際我が儘言つてるのは俺の方だ。

「じゃあ付き合つてくれますか?」

「もし次があるなら予告して」

「わかりました。走りますつて言つてから走ります」

それに意味があるかはさておき、俺たちの諍いは一先ずそんなところに落ち着いた。どう見ても会長の鬱憤は棚上げさせられている。

会長から発せられていた怒りの気配はだいぶ治まっているが、その顔は不満ありげに顰められていた。

当然だが表に出さないだけで燻つてる感情があるはずだ。今度こそ、逆撫でしないよ

うに気を付けなければ。

「どこまで行くんですか？」

「終点」

駅に着くたびに乗客は少なくなっていく。

終点ともなれば人数は数えるほどになるだろう。

「遠いですね」

「来たくなかった？」

「いえ、べつに」

「案外遠いなど思ったのは確かだが、だからと言って来なければよかったとは思ってない。」

「どれだけ遠くても、北村に会いに行くかと誘われたなら何を後回しにしても来ただろう。」

「それこそ新幹線に乗る距離であったとしても領いたはずだ。」

「そう言えば、会長と北村って幼馴染なんですよね」

「ええ」

「その割には家遠くないですか？」

「引越したって言ったでしょう」

そう言えば言っていた。

確か家まで特定されていたから引越したと。

「じゃあ元々はあの辺住んでたんですか」

「私の家の右となり」

へえ、右隣。

会長の家に行くことがあればちよつと見てみよう。

今は違う人が住んでいるんだらうけど。

「家同士付き合いがあったんですか？」

「みたいね」

「家族公認じゃないですか。羨ましいなあ」

会長と幼馴染ってだけで人生楽しそう。

そんじよそこらのつまらない人生よりは世界が輝いて見えそうだ。

「年が近いから自然と遊ぶことも多かつたけど、それだけよ。私の両親なんて何とも思っただけでしようし」

「親としては子どもに友達が出来るだけで嬉しいんじゃないですか」

「どうかしら」

その声音には拒絶の色が含まれていた。

「普通の親じゃないのよ」と小さな呟きには、色々な感情が複雑に絡み合つて詰まつている。

思わずどういふことかと聞きそうになつて口をつぐんだ。

会長が俺の家の事情を聞いて来ないように、俺も会長の事情に足を踏み入れるべきではない。それだけの分別はある。

俺たちは学校の後輩と先輩に過ぎず、それ以上の仲ではない。お互い知らないことの方が多いのだ。

大体、他所の家の事情など聞いたところでどうしようと言うのか。適当な慰めの言葉をかけた所で、会長はそんなものは求めてない。俺が求めてないのと同じように。

なんだか急に胸の中がいつぱいになつて、それから終点まで静かに過ごしていた。話をする気分じゃなくなった。会長もそうだったのだろう。

どちらも何一つ言わず、電車は終着駅に辿り着いた。

第18話

見知らぬホームに降り立つ。

基本出不精な性質だが、たまに知らない場所に出かけると胸が高鳴るぐらいには冒険心があった。その辺はやつぱり男ということだろう。

駅に人の影はまばらだった。ホームも改札もトイレすら、なに一つとして馴染みのないここは、ひと気のなさやと相まって寂れているような気がする。

まったく偏見だが、駅の終着点は過疎地というイメージがあった。

普通に考えればそれ以上延伸しても採算が取れないから終着駅なのだ。そのことを踏まえるとあながち間違っているようには思えないが、声を大にして言うことでもない。

「バスですか？」

「歩き。近いから」

駅から近いと言うのは魅力だ。

我が家はバスに乗らなければ駅まで遠い。あるいは自転車と言う手段もあるが、それよりはバスの方が早くていい。その分料金は掛かるけど。

「会長この辺来たことあるんですね」

「何回かね。招かれたの」

「夕飯に？」

「そう」

悲惨な目に遭い引越してなお付き合いは続いていたようだ。

考えてみれば、それぐらい付き合いがなければ北村の容体を伝えることもしないだろう。

家族ぐるみでのお付き合い。羨ましい。

「なんかお邪魔っぽいなあ」

「どうして？」

「だって招かれたの会長一人ですし」

「光だってあなたと話したいと思ってるわ。きつと」

北村はそう考えてそうだ。ていうかあいつが勝手に色々気を回したのだから、気にかけてなかったら殴ってやりたい。

ただ、北村の考えがどうあれ、両親がどう考えているかわからない。会長美人さんだしなあ。親としては色々期待しちゃうんじゃないだろうか。

「トイレ寄っていいですか？」

「構わないけど」

「大きい方なので、先行つても良いですよ」

「ちゃんと待つてるわ。あと、男の子なんだからそういうこと口にするのはやめなさい」
「変に取り繕つても待つ時間が長ければ気付いちやうでしょ？」

そんなやり取りをして男用のトイレに入る。

中に他の利用客はいなかった。

とりあえず出すものを出し終えた後、手を洗つて身だしなみを確認した。

ネクタイをきゅつと締め、襟足など立ってないか確認する。

一通り確認を終え、「よし」と声に出して気合を入れた。

トイレから出てすぐ正面の壁際で会長は携帯を弄っていた。俺に気づいて目を上げる。

「早かったわね」

「快便なんです」

会長の顔がゆがんだ。

下世話な話はお気に召さないらしい。

引っくり返る前は男の大好物だったのだが。

「ちゃんと手は洗いましたよ」

「行くわよ」

これ以上この話を続けるつもりはないと、会長はさつきと先に行ってしまう。その背を追いかけながら、もう一度ネクタイを締めた。

会長が指さした家は青かった。

全体的に四角くて紺色の一軒家だった。見たところ二階建てのようだ。住宅街の一角にあるその家の表札には確かに北村と書かれている。

「どこですか？」

「ええ」

何のためらいもなくインターフォンを押す会長の後ろで、俺は原因不明の緊張感を抱いていた。

友達の家に来るのが初めてだからとかそんな悲しい理由だろうか。

そもそも俺と北村は友達だろうか。思い返せば一度も学校の外で話したことはない。こんなただの同級生じゃないか。

思考は何故かマイナス方面に突っ走っている。

「はい」

「金折です」

と会長と家主と思しき人のインターフォン越しのやり取りを聞きながら、妙な不安に取りつかれ何となく辺りを見回した。

何もなかった。人っ子一人居なかった。余計不安が募る。

間もなく扉が開き、丸つとした顔の中年親父が一人顔を見せた。

たぶん父親だ。てつきり母親が出るんだと思っていたから酷く驚いてしまった。

「やあ、早織ちゃん。ご無沙汰だね」

「お久しぶりです、おじさん」

第一声からすでに仲良さげなやり取りに早くも孤独感を感じた。

そのこと察してかどうか不明だが、挨拶もほどほどに会長は俺を手で指し「私の後輩で光の同級生の七瀬君です」と紹介してくれた。

「光の同級生？」

「七瀬です。初めまして」

探る様な不躰な目で見られ身体が硬直する。

足の先から頭のとっぺんまで、何度も視線が往復する。

その視線は、会長が何か耳打ちすることで一気にフレンドリーなものに変わった。

「や、失礼。七瀬君だったね。初めまして光の父です。光がいつもお世話になってます」

「むしろ俺がお世話になってます」

正直に言つて、この変わった世界で俺と北村の関係がどう言う物かよくわからないので、ほとんど社交辞令だった。

変わる前みたいにな北村がバカやるのを特等席で面白く眺めているのなら、「むしろ楽しんでもらつてます」というのが正しいのだろうか。

「おじさん、これつまらないものですけど」

「あ、これはこれは気を遣つてもらつて」

会長から紙袋を受け取つた北村の父親は、中身を確認して「早織ちゃん大きくなつたなあ」と感慨深げに呟いた。

「家に来るのに、手土産を持ってくるようになったんだもんなあ」

「今回は光のお見舞いも兼ねてますし……。ご迷惑でしたか？」

「とんでもない！ いやほんと、すっかりした子だよ！」

父親は大げさな手ぶりで否定し、「ぎ、入って」と促した。
「お邪魔します」

と礼儀よく玄関を跨いだ会長に従って俺も「お邪魔します」と続いた。

「光は二階の部屋にいるよ。すぐに飲み物を持っていくから。あ、このスリッパ使つて」
そう言い残し、父親は奥に消えてしまう。

勝手知つたる家つて具合にスリッパを履く会長からは、かなりの頻度でこの家に来て
いる様子がかがえた。

二階に昇るといくつか扉があつて、パツと見てどれが北村の部屋なのか分からない。
一瞬迷う俺に会長が「こつち」と教えてくれた。

俺が追いつくのを待つて扉をノックする。

「なに？」と声はすぐ戻つてきた。

「光？ 私。さつき連絡した通り、七瀬君もいるわ」

いつの間にそんなことしていたのだろう。

学校に来る前か、それともさつきトイレに寄つた時だろうか。

扉の向こうから返事はなく、代わりに扉が開いた。

北村が顔を見せた。

「早織か。久しぶり」

「ええ、お久しぶり」

そんな会話。

見るところ、北村は変わっていない。

頬がこけてるとか顔色が悪いとかそんなことはなくいつも通りだった。

「七瀬も久しぶり」

「おお」

数日ぶりの会話はそんな感じで、特に気負うこともなくすんなり言葉が出た。

「入ってくれ」と言われて北村の部屋に入る。

部屋の中は本棚、学習机、ベッド、収納棚等。それだけ見れば普通なのだが、本棚からは本が転げ落ちているし。机の上はプリントや教科書でぐちゃぐちゃだ。ベッドの上には脱ぎ捨てたパジャマがほったらかしてある。

「大掃除でもしてたのか？」

「ああ、汚くて悪いな。戻ってきて色々やってんだけど、中々片付かないんだ」

嘘か真か判断付きにくい返答だった。

「早く片付けなさい」と会長が呆れ気味に言う。

「足の踏み場もない」

「いや、あるだろ」

北村は足をブルドーザーのようにして本をどけた。それを見ている会長の目が怖い。「適当に座ってくれ」

今しがた空いたスペースに俺と会長は腰を下ろす。

横にいる会長からピリピリとした空気が発せられていて、腰の据わりがもの凄く悪かった。

その空気にあてられて俺は正座した。会長は最初から正座だった。

部屋の主である北村は空気なんて目に見えないものを気にした様子はなくベッドの上に腰かけた。

「なんか買ってきたの？」

「クツキー」

「なんだ」

残念そうな声に思わずむっとした。

4500円もしたんだぞと値段のことを言いたくなる。見舞いに来てそれは、さすがにみつともないから我慢したが。

「父さんが凄くはしゃいでたんだ。早織ちゃんが来るぞって。子供みたいに」

「久しぶりだから嬉しいんでしょう」

「半年前までよく会ってたのにな」

本題に入る前の世間話だ。一般的には天気の話とかニュースの話とか、当たり障りないことで場を繋ぐ。

この二人の場合はそんなものに頼らずとも積もる話が合った。俺は二人の会話を黙って聞いていた。

いま、ここにいる二人は二人とも俺の知らない姿で、俺の知らない過去のことを話している。北村の家に来てからずっと感じていた居心地の悪さがさらに増し、なんかもうすぐ帰りたいくなった。他クラスの同窓会に参加したような気分だった。

しかしそんな最悪の気分とは言え、折角ここまで来て用件を果たさないと帰るわけにもいかないのです、逃避もかねて窓の外を見る。いい天気だった。

「本題いいかしら」

俺が逃避行している間に話は一段落付き、会長がそう切り出した。

どうぞと言う意味で北村は頷いた。

「見たところ元気そうね。良かったわ」

「ああ」

突然北村がぶつきら棒な口調になる。

あれは分かりやすくその話題を拒絶している感じだ。

自分の身体のことに触れられるのが嫌なのか。一応は了承しておいてその態度は如

何な物か。

会長は慣れているのか気にした様子もなく話を進めた。

「まずあなたに頼まれたことだけど、きちんとやつてるわ。七瀬君もそうしてほしいと言っていたから」

「そうか……。七瀬」

呼ばれたので、窓から視線を外し北村を見た。

その目には深い哀れみが宿っていた。

「勝手に早織に言つて悪かった」

「おう」

「でも、心配だったんだ。お前変に抜けてるし箱入りだし、傍から見てもカモなんだよ」
「ネギはしよつてないけどな」

俺の言葉は無視して、憂虞の籠った溜息を吐く。

それが明らかに子供に対する扱いなので、癪に障つて言い返した。

「そう言うお前はどうかんだよ。倒れてるけど」

「俺は大丈夫だ。過呼吸になっただけだから」

「フラツシユバック？」

「ああ……」

自分で聞いたといてなんだが、「ふーん」と興味なさげに相槌を打つと北村は苦笑した。

「お前もさあ、一応は痴女られたんだろ？　もう少しなんかないのか？」

「災難だなあ」

「もう一声」

「可哀そうだなあ」

「うわ、棒読みむかつく」

顔を引きつらせる北村は「お前言っておくけど運が良かったただだからな。その調子だとその内本当にやられるぞ」と負け惜しみ染みたことを言ってきた。

運がいいとか悪いとか、どっちかって言う集団痴女に狙われた北村の運が悪かったんだと思うが。

そんなことを言おうと思ったのだが、その前に横から会長が口を挟んできた。

「やっぱり、同級生の貴方から見ても七瀬君は隙だらけに見えるの？」

「見える見える。見えるなんてもんじゃない。存在が隙だらけ。こいつ女子の視線とか全然気にしてないし、べたべた触られても気づいてない。下心に自分から笑顔向けるようなもん。初めて会った時なんかこのままお持ち帰りされるんじゃないかって気が気じゃなかった」

初めて出会った時の話をされても困る。俺の記憶だとお前は木に上っていて、周りに

は誰も居なかつた。どうやら違う出会い方をしたようだ。

それから、北村は俺のこんな所がいけないと語り始める。

それはどこかで聞いたことのあるものばかりだった。

ガードが薄い。距離が近い。言動に気を付けない。自分を顧みない。他人の目を気にしない。

男として終わつてるとまで言われた。随分な言い様だった。この汚部屋に住んでいながら、よくそこまで言えるものだと感じた。

とりあえず話し半分で聞いていたが、途中から北村の語る人間がこの世のものなのか怪しくなつた。恐らく何割かは盛つて話しているはずだ。そうじゃなきゃそんな純粹培養で生まれたような奴は、とつくに変質者の餌食になつてなきやおかしい。

しかし男女ひっくり返して考えてみると確かにと思ふ意見も多くあつたのは確かだ。北村の語る人物が、裕福な家庭で何不自由なく育てられたお嬢様ならイメージにあうのだが、残念ながら奴が語っているのは俺のことだ。

世界が引っくり返つてしまつているので、俺にとつての男はこの世界では女になる。つまりイメージはあう。まったく意味は分からないけど。

そんな感じで色々と思ふ所はあつたのだが、会長の一等険しい視線を受け続けて、安易に口を挟むことは出来なかつた。身を縮こまらせ、出来る限り小さくなつた。迂闊に

動くことやられる。弱者の勤が働いた結果だ。

「とにかくそんなわけなんだから、俺は早織にお前のこと頼んだのは間違つてなかつたと思つてる」

とことんまで理由を羅列した後、それでもやつぱりどことなく言い訳染みた言い様に、何か反論をまくし立てたくなる。

しかし、その反骨心も北村の目を見て吹っ飛んだ。

「お前、本当に大丈夫だよな？」

本気の本気の本気で。心配している目だった。

自分が遭つてしまった目に、他人を遭わせたくないと言骨を砕いている顔だった。

こんな顔をされて、さすがの俺も茶化したり流したりは出来なかつた。

真摯に向き合つたその上で、嘘をついた。

「今のところ特になんもないな」

「そうか」

あからさまなホツとした顔を見て、ついつい笑つてしまう。どんだけお人好しだこいつ。

それから学校の話をし、ノートの貸し借りの約束を経て、適当な世間話に移つた。

その間会長は一切話に入つてこず、じつと考え事をしていた。何度か話題を振つたの

だが、「そうね」「ええ」と素っ気ない返事ばかりだった。

時おりじつと俺を見るその目には何か思う所があるようだったが、結局何も言つてはくれなかつた。

その会話も一段落した頃になって、扉がノックされる。

「やあ、お話し中済まないね」

丸つとした顔を覗かせたのは北村のお父さんだ。どことなく嬉々とした様子が見え隠れしていて、汗をかいているのか、額で電灯がまぶしく反射していた。

親父さんが開けたドアの隙間から良い匂いが漂ってくる。たぶん焼きそば。

「飲み物を持って行こうと思つただけど、よくよく考えればもうお昼だ。そこでどうだろう。食べていけないかい？　焼きそば」

にこつと笑い笑顔。

その誘いを受けて思わず北村の顔を見た。

「食べてけよ」と口添えしてくる。

焼きそばかちよつと考える。

「折角ですけど」

「遠慮はいらないよ？」

「いえ、実はこの後用事があるんです」

立ち上がった俺に、親父さんは「そうか。なら仕方ないね」と残念そうな顔をした。それから会長の方を向いて、

「早織ちゃんはどうだい？ 久しぶりに話も聞きたいし、食べて行かないかい？」

「私は——」

会長は逡巡する様子を見せた。

「食べてけよ」と北村が同じことを繰り返す。俺の時よりは強い口調だった。なんだか親父さんも北村も会長に残ってほしそうだだったので加勢することにした。

「俺のことは気にしないで食べて行ったらどうです？」

「え……あ」

なぜか北村が間抜けな声を出す。

ここで会長が残ると俺が一人で電車に乗ることに気づいていなかったようだ。

まあプライベートだし、そこまで面倒見てもらう必要もない。

「会長は旧交を深めて下さい。んじや、時間もないので、俺はこれで」

立ち上がった俺に北村が申し訳なさそうな顔をしている。

「悪いな」と口にまで出してきた。

「病人は早く寝ろ」

「病人じゃねえよ」

扉の前に立っていた親父さんの横をすり抜ける。

親父さんは見送るためにか後ろを着いてきた。

「大したお構いも出来なくてすまないね」

「いえ、お見舞いに來ただけですし」

玄関で靴を履く。

親父さんは笑顔で見送ってくれた。

「またいつでもおいで。歓迎するから」

「ええ。機会があれば」

ドアノブを捻って玄関を開ける。

昼を過ぎ、太陽の熱視線は増していた。

とつとと帰ろうと一歩踏み出した時、二階からバタバタと足音が聞えてきた。

「七瀬君、待つて」

そんなことを言いながら、慌ただしく降りてきたのは会長だった。

「おじさん、すいません。今日は遠慮します」

早口でそう言つて乱暴に靴を履き始める。

「あ、早織ちゃん」と呼び止める声に振り返つて、「ごめんなさい」とだけ言つた。

「いいんですか？」

「受験もあるし……」

それは明らかに取り繕った理由だったが、会長がそう言うなら俺は何も言えない。じゃあ行きますかと玄関を跨ぐ。

「早織ちゃん！」

後ろから聞えた切羽詰った声に、俺が呼ばれたわけではないのにびっくりした。

その声を出した当の本人は、口をまごまごと動かした後、継り付くような声音で言った。

「早織ちゃん、その……光のことよろしく頼むよ……。あの子はまだ、支えが必要なんだ……。誰かが支えないといけない。……だから、だから——」

「……はい。私の出来る範囲で、光を見てます。学校で何かあったら連絡します。だから安心してください」

言い終えた後、会長はキビキビとした動作で先に出て行ってしまった。

出て行く会長に手を伸ばしかけた親父さんは、しよぼくれた顔で項垂れる。

蚊帳の外の俺は、取りあえず会釈だけして会長の後を追いかけた。

何も言わない会長の横に並んで、

「いいんですか？」

もう一度聞いた。

「受験があるのよ」

会長もまた同じことを繰り返した。

そつちを聞いたんじやないんだけどなあ。いや、まあそれでもいいのか。思いながら、やつぱりそれ以上は聞かない。

早足気味な会長に置いて行かれないように、駅に向かった。

第19話

腕を引つ張られる。

強い力で。ほとんど引きずられるように。

歩いている最中、突然そんなことをされたものだから、思わず目を丸くした。

「会長？」

「……」

呼んでも答えてくれない。

振り向くことすらしてくれなかった。

引つ張つておいて無視するってどういうことなのか。せめてこっち見てほしい。

「会長。あの、痛いです」

「……」

掴まれた腕にぎゅつと力が籠つてて少し痛い。

聞こえてないはずはないのだが、やっぱり答えてくれなかった。

偶に通りがかる人の視線が突き刺さる。まあ見るよね。俺だつて人が引つ張られてたら見る。

あまり注目を浴びるのも嫌だが、会長はなにも言ってくれないし止めてくれる気配もない。俺と違って人の目は気にならないらしい。

小心者の俺は周囲の目を気にしながら、何度目かの呼び掛け。

「会長。これなんの罰ゲームですか」

「……」

「……なんか、怒ってるんですか？」

握る手に余計力が加わって、腕の痛みは増した。

それでとりあえず怒ってるらしいことは分かった。しかし何に怒っているのか。

勝手に登校したことで、突然走ったことは一先ず棚上げになったと思うのだが。

我慢出来なくなつて怒りが再燃したとかならうか。

北村の家にいる時から様子がおかしかったので、何か逆鱗に触れるようなことをした

のかとも思うのだが、思い当たる節はない。

「謝つたら許してくれますか」

その問いかけでようやく振り向いてくれる。

冷たい目。けれどその奥に悲しい感情が見え隠れしていて、それ以上何も言えなくな

る。ただ怒ってるわけではない。

会長はすぐに前を向いて、また歩き出した。

黙って着いて行く。向かっているのは駅のようにだ
駅に付き、改札口をくぐる。

それからまっすぐホームに向かうかと思つたが、会長の足は別の方向に向かつた。

「そつち電車ないですけど」

「……」

「どこ行くんすか」

無言で歩を進めるその先にはトイレがある。

来るときに立ち寄つたトイレだ。

用を足したくてこんなな急かされたのかと一瞬思う。けれど、会長は女子トイレをスルーして、男子トイレとの間にある障害者用のトイレを開けた。

「……障害者……」

言い切る前に、トイレに入つてしまふ。

もちろん手は握られたままなので、俺も一緒。

背後で閉じた扉を一瞥する。外からボタンを押せば開いたように、内側にもボタンがあつて、それを押せば開くようだ。

鍵がかかる訳でも無し。出ようと思えば簡単に出来るのだが、何だか檻に入れられた気がする。

あっちこつちに手すりのあるトイレはかなり広い。人の二〜三人は楽に横になれそうだった。こんなところで何をすると言うのか。まあ、本来の用途は一つしかないんだけど。

「会長。用を足すなら俺外に出てますよ」

「……」

「それとも、見られながらする趣味でもあるんです——っ!？」

突然強く胸を押され、思わず後ずさる。

押されて、押されて、壁際に追い詰められる。

そんなもって両手で左右の壁にドンされた。壁ドンだ。逃げ場がなくなつた。

「なんですか……」

「私の目を見なさい」

すぐ目の前に会長の顔がある。

綺麗な顔で、頑張ればまつ毛の数も数えれそうなほど近い。

見るとか見ないとか言う前に、勝手に視界に入ってくる距離だ。

こんなのドキドキしないわけがない。

「会長美人さんだから見つめたら照れますね」

「……」

視線を逸らしながらそう言う。

会長は返答がわりに短く息を吐いた。色々な感情が籠っていた。

それから、なぜか距離を詰めてくる。

既に限界一杯だった距離がさらに近くなる。自ずと体が密着し、会長の体温と呼吸を間近に感じる。この距離はやばい。間近に異性を感じる。変な気分になる。近すぎる。

「私の目を、見てなさい」

「照れます」

気を逸らすためにも口が回る。

そうしたら、ぐりつと足を踏まれた。

なりふり構っていない。ふざけるなということだろう。照れているのは本当なので、

一応ふざけてはいないのだが。

「いたいいたい」

「次はもつと痛くするから」

「そんなこと言われるとむしろ痛くしてもらいたく痛いっ！」

体重が乗って痛みが増す。

これ以上の軽口は危険だ。最悪足が千切れてしまうかもしれない。そうなったら誰が責任とってくれるんだ。

「なんか近くないですか」

「こうしないとあなた逃げるでしょう」

「逃げないので、ちよつと離れましょう」

「あなた嘘つきだから、そう言う嘘をついて逃げるつもりでしょう?」

嘘つきだと断定されてるのが悲しい。

信用がないのはこの際良いとして、ここまでされる理由がちよつと思ひ浮かばない。

なんかしたのかな。強いていうなら今朝の痴女眼鏡の件が怪しいけど、今更あれに気付かれたのはちよつと釈然としない。もしかしたら最初から気づいてたという可能性もあるが、それなら今になって責められるのはもつと違う気がする。

「今まで嘘なんかついたことがありません」

「嘘つき」

「まあ、嘘ですけど」

「……」

足が痛い。視線も痛い。

そろそろ本当に黙った方がいいだろうか。

でも黙るとこの距離を意識して胸が苦しくなるのだが。

引けば地獄。行くも地獄。俺はどうすればいいのだろう。

「聞きたいことがあるの」

「わざわざそのためにこんなことを？」

「逃げられないように考えたのよ」

それで障碍者トイレはちよつと思考がぶつ飛びすぎじゃないか。

頭に血が上りすぎてて冷静じゃないのでは。

「分かりました。家に来てください。紅茶でも飲みながらゆっくり話しましょう」

「逃がさないって言わなかった？」

「謝るので許してください」

「何を謝るの？」

何を謝ればいいんだろう。

ちよつと思いつかない。

「えーつと……」

「もういい」

じつと見てくる会長の目は透き通って綺麗だった。吸い込まれそうな目だ。

瞳の奥に俺の顔が反射して映っている。もつと見ていたい。けど見ていたくない。矛盾する気持ちを抱えて会長の言葉を待つ。

「今朝、一人で電車に乗った時、何かあったでしょう」

「なにかってなんですか？」

「それが分からないから聞いてるのよ」

会長の目は不安そうに揺れている。言葉はたどたどしく、いつもの理論整然とした口調とは程遠い。

確証はないらしい。けれど何となく勘付いてしまったようだ。何たる不運だろう。俺にとって。

「痴女には遭ってません」

「痴女に『は』？」

「言葉の綾です。ていうか細かいっすね」

ちよつと油断するとこれだ。粗を見つけて突っ込まれる。

おかげで会長の疑念はさらに増してしまった。疑い深く見てくる。

「……」

「……」

見つめあう。

トイレの中で二人つきり。女の子に壁ドンされながら至近距離で。

これだけ聞くと卑猥な妄想が浮かび上がるが、中身は尋問に近いから妄想するだけ損だった。

その労力でエッチな動画でも見た方がずっと生産性がある。いや、ないけど。

「俺は嘘なんかついてませんが、ボディタッチされたら口が軽くなる可能性が少しあるので、その上でもう一度——」

息を吐くように自然と口は回る。何を言っても足を踏まれて終わりだろうと思っていた。

痛みは思考を冷静にしてくれる。この状況ではむしろ望むところだった。

だと言うのに、待ち望んでいた痛みは訪れず、代わりに会長との距離がほとんどゼロになった。目の前をサラリと長い髪の毛が舞って、良い匂いが鼻孔を満たした。

思考は真つ白になって、いったい何がどうなっているのかわからなくなる。耳に息が吹きかかるのがこそばゆい。

「あの……」

「なに?」

「これはいったい……」

生唾を飲み込み、必死に言葉を探す。

俺たちは今抱き合う形になっている。

息を吐くたびに、会長の息が俺の耳にかかるのと同じように、俺の息も会長の耳にかかっている。

その耳は赤く染まっている。たぶん俺の耳も同じぐらい赤くなってる。

「……ボデイタツチ」

「タツチどころか全身くつついてますよ」

「細かいこと気にするなって言ったのはあなたの方よ」

「この綾は全然細かくないと思うんですけど」

話をしている内に耳がむず痒くなつて体をよじる。

それを逃げようとしていると勘違いしたのか、会長の身体はさらに密着して壁に押し付けるようにしてきた。色々などころが当たつて辛抱堪らんのですが。

「男の子に適当言われたぐらいでこんなことするなんて、会長大胆ですね」

「……」

「もっと自分の体を大事にしてください。軽々しくこんなことしてたら、その内襲われちゃいますよ」

「……っ」

会長の身体が震えた。

我に返つて離れてくれるかと思つたが、全然離れてはくれない。
むしろ俺の身体を掴む手に力が入つたようだった。

「……なんで」

「え？」

「なんで、そうなるの？」

最初は囁くような声音だったのが、段々大きくなってくる。

「今自分が何されてるか分かってないの？」

「会長と抱き合ってます」

「抱き締められてるのよ。私に、一方的に」

「光栄です。めっちゃ嬉しいです」

会長の身体がぎこちなく動く。無理矢理に理性を働かせたような感じで、一歩だけ離れてくれた。

正面から見つめあう。透き通った会長の目に確かな決意が垣間見える。

何の決意かと首を傾げながら、会長が口を開くのを見ていた。

「ねえ」

「はい？」

「レイプするから」

「……はい？」

耳を疑い、頭も疑う。

どうやら俺の頭がおかしくなったらしい。

会長の口から、女の子が言うとはとても思えない単語が出た気がした。

「すいません、もう一度お願いします」

「今から、君のことをレイプするから」

ゆっくり、自分自身に言い聞かせるようにはつきりと、会長は言葉を発し、一瞬の沈黙の後で抱きしめてくる。

背中に腕を回され、今までで一番密着した。

首筋に熱い吐息を感じる。ドクンドクンと激しい鼓動は、俺の心臓なのか、それとも会長の方なのか分からない。

その鼓動を聞きながら何をするでもなく状況に流されていると、背中に回れた手に力が籠り、耳元で歯ぎしりの音を聞いた気がした。

「どうして、抵抗しないのよ……」

「はあ……いえ、笑えない冗談だと思ひまして」

「こんなこと、冗談なわけないでしょ。笑い事じゃないのよ」
「でも……」

「でもじゃない！」

床に引きずり倒されそうになる。

トイレの床は汚い。さすがにそれは嫌だと手すりを掴んで抵抗した。

「抵抗しなさい！ もっともつと、抵抗して！ じゃないと本当にレイプするわよ！」
俺を押し倒そうとして、齒を食いしぼりながら会長はそう言った。

会長の言葉を聞いてみると、どうやらレイプすると言うのは本気じゃないらしい。ほっとしたような、残念なような。

「なんなんですかいったい。床汚いんで、ちよつと勘弁してもらえますか」

「そんなことを気にする暇があるなら……っ！」

手すりを掴んでいた腕を叩かれる。思わず手を離し、床に尻もちついてしまった。

うえつ、汚いと心の中で思う。度が過ぎている。さすがに、こんなことをされれば止める気はないんだと察する。どこまでかは知らないが、とりあえず最後まで押し倒すつもりらしい。

それは嫌だから、仕方なく腕を伸ばす。それで会長を押し返そうとしたのだが、その腕を会長は絡めとってしまふ。

じゃあ逆の腕をとやってみたところで同じだった。両腕を掴まれ抵抗を封じられる。会長は膝を使って押し倒そうとしてきた。

上から押し掛かってくる会長を、腹の力だけで押し返すのは無理な話だった。

「すいません降参！ 降参します！」

俺の叫びに、会長は荒い息を吐くばかりで何も答えてくれない。

普段は理性の宿っている瞳が、今は獣のような怪しい光りを帯びている。

その目には見覚えがある。初めて会った時、あの痴女に感じた不安。あいつと同じ目だ。

あ、これやばいんじゃない……。

そう思った時には押し倒されていた。

腹に乗って覆いかぶさって来る会長の顔は興奮で紅潮している。

俺を組み伏せたことで支配欲が刺激されたらしい。これで終わりじゃないぞとその目が告げていた。

手は抑えつけられて動かせない。足をばたつかせても意味がない。

抵抗しろとしきりに言われて、その通り抵抗しているのだが、会長自身最早そんなこと頭に残っているかも疑わしい。

何を言うでもなく、少しずつゆっくりと会長の顔が近づいてくる。

その潤んだ瞳から目を離せなかった。赤く染まった頬からも、熱い吐息のもれる唇からも。

目の前のことが全て、まるで夢の世界のように思えてきて、現実味がなくなる。

気が付いたときには抵抗するのを止めていた。無力を悟ったわけではなく自然と力が抜けていた。

視界が会長の顔で一杯になる。何も考えられなくなる。完全に受け入れていた。

口と口が重なる寸前、トイレの扉がノックされた。

「駅員ですが、大丈夫ですか？」

そんな声がトイレの中に響き、意識は現実に戻還する。

我に返った会長は体を起こし扉を見た。

真つ青な顔でわなわなと震えている口から言葉は出てこない。

何も言えない間に、もう一度ノックの音が響く。

「大丈夫ですか？」

——どうしよう。

その表情は不安でいっぱいだった。

自分がしようとしていたことを思い出し、罪悪感で押しつぶされそうになっている。

動揺しきっている会長にこの場を乗り切る知恵は出てこないだろう。

代わりに俺が返事をした。

「はい、すいません。大丈夫です！」

駅員から開けていいかと訊ねられる。

未だに腹の上に乗っていた会長を立たせ、扉に向かった。

こちらから扉を開き、駅員と対面する。

「すいません、本当に。ちょっと怪我しちゃって」
かしこまり頭を下げながら、一つ嘘をついたのだった。

第20話

怪我をしたので、障害者用トイレで傷を見てもらってた。

駅員についた嘘だ。駅員は疑わしそうな顔をしていたが、それ以上詮索はしてこなかった。

むしろ、駅員室で治療するかと好意を見せてきた。そんなに酷くないしいいですと断ったが。

一しきり謝罪の言葉を吐き、ホームのベンチで電車を待つ間、会長は俯いて何も言わなかった。

罪悪感がひしひし押し寄せているようなので、何か声を掛けようとは思ったのだが、かける言葉は何も見つからない。

その内電車が来て、手近な座席に座る。

重たい沈黙が漂う車内で吊り広告を見て暇を潰していたら、会長がおもむろに口を開いた。

「ごめんなさい。……私どうかしてたわ」

まったくその通りで、まさか本気でレイプされかけるとは夢にも思わなかった。

この先、ことあるごとにからかいたくて仕方がないのだが、そうするにはちよつと重いかなど言う気もする。

からかうたびに沈み込まれては本気で苛めてるみたいで気分が悪い。会長には笑つてほしい。

「怒りで我を忘れましたか？」

「それもあるのかも……。でも、それだけじゃない」

囁くような声音だったが、受け答えはしっかりしていた。

熱に浮かされた感じはもうない。

「今日、朝起きたとき、携帯に君のメッセージが入つて……。土曜日の授業のことなんかすっかり忘れてたから、かなり慌てたの。君が一人で電車に乗つて、もし何かあつたらどうしようつて不安で不安で仕方がなくて。何度連絡しても繋がらないし、追いかけてようとも思つたけど、時計を見たら授業が始まつてる時間で、どう考えても遅いし……。学校に行こうとしたら、今度は光から連絡があつて会いたいつて。もうどうしていいかわからなくなつて……」

「会長案外テンパりますね」

「予想外のこと弱い。それと感情的になりやすいつて言うのが私の短所。受験で必要とは言え、皮肉な自己分析よね」

まあ、今日一日で分かったことだ。

会長は案外短気だ。その割に懐が深くて、怒りを収めやすいから勘違いされるのかもしれないけど。もしくは、ただ単純に感情の発散が下手なだけなのかもしれない。溜めて溜めて、一気に爆発させる。今日みたいに。

「本当にごめんなさい。光にあなたのことを聞いて、不安になったの。私の知らないところで酷い目に遭ってるんじゃないか、大丈夫なのかって。それで試しに抱きしめたら、あなた全然抵抗しないんだもの。それで、あんなことを……」

「会長だから抵抗しなかったんですよ。滅茶苦茶信用してますから。他のやつなら取りあえず蹴ってます」

「その信用を私は失ったのね……」

全然失ってないけど。現在進行形でバリバリ信用してますけど。俺の会長への忠誠心は天井知らずなんですけど。

身振り手振りですこら辺をいくら説明しても、会長の顔は晴れない。陰鬱に下を向いている。

「……今朝、本当に何もなかった？」

「……」

その問いかけに、どうしようかなあと思考を巡らせる。

あつたと言えばあつたわけだが、素直にそれを言うとう会長がどうという反応をするか分からなくなつた。最悪死んじやう気がする。

今の会長にこれ以上心配をかけたくない。実際、今朝のあれはなんの実害もなかつた。ただ怖かつた。それも今思い返せば怒りの方が強い。

どうしようかなあ。

「あー……会長、素直に言いますね」

「……なに？」

「何かあつたかと言えばありました」

会長の目が驚きで見開かれ、次いでくしゃつと泣きそうな感じに歪む。

「やつぱりあつたんだ……」と言う呟きは、後悔やら懺悔やらの負の感情が乗つかつて、聞いているこつちが辛くなつた。そんなに悲観することじゃないですよ。

「えー。まず、痴女には遭つてません」

「……」

「酷い目にもあつてません」

「じゃあ……」

「会いたくない人に会いました」

疑問符の浮かんだ顔はどういうことかと訊ねている。

「どうでもいいことです」と前置きをする。

「二度と会いたくないぐらい嫌いな人がいて、その人に朝ホームでばったり会いました。おかげで朝から気分最悪で。でも会長の顔が見れてV字回復しました。ありがとうございます」

「……」

会長は少し考えている。

俺の言葉が嘘じゃないか疑っているようだ。

「……そんなに、嫌いな人がいるんだ」

「人間生きてれば色々あるでしょう。たかだか15年程度でも」

それから少し思い出して、

「俺は嫌だったのに、あっちは超笑顔だったのがムカつくんです。手なんか振ってきやがって、今度会ったら覚えてろって、今決意しました。覚悟してもらいましょうか」

「少し意外ね……。そんなに直截的に人の事嫌うなんて」

「まあ、小学校の頃は超いい子ちゃんでしたから、未だに人の悪口は言いにくいですけど」

もういなくなってしまうたあの人のことを思い出す。

正しく生きなくてはいけない。間違ってはいけないと、呪いのような言葉が脳裏に蘇

る。

今となつてはぼんやりと霞んでしまったその人の顔を思い出して、ふつと笑う。

「偶には面と向かつて言つてやらないといけない奴もいると思います。世の中、正しいことばかりじゃ生きていけませんから」

「……」

再び俯いてしまった会長を横目に見て、慰めの言葉をかける。

「人間誰しも間違ふことはありますよ。個人個人、それが大きいか小さいかで運不運があつて、会長はたまたま大きい方だったんじゃないですか？」

「間違つたなんて私が言つて良い言葉じゃない。そんな都合のいい言い訳でしかないじゃない……。私は、本気で君を——」

少なからず乗客の居る車内で、レイプなんて単語を出されては嫌な注目を集めるだけだった。その光景を想像するだけで背中に変な汗をかいてしまう。

だから、その単語を口に出される前に掌で会長の口を抑えた。

「ん……っ」

「そこから先は分かつてるので言わなくていいですけども」

会長は沈んだ目で俺を見ている。

今にも泣きそうだった。本気で後悔しているのはその顔を見れば分かる。

開き直っていたり、全く反省していないのであれば俺も何か言ったかもしれないが、この顔を見ればその必要はないと思う。

むしろそんな細かいことは気にせず元気出してくださいと励ましたかった。

「俺は別に気にしてません。むしろウエルカムです。またいつでもどうぞって言っておきますね」

「……」

掌の中で会長は一度口を開いた。けれど何も言わずにすぐ閉じる。

会長は口では何も言わなかったが、その目は何かを訴えている。

目は口程に物を言うなんて言葉がある。それはまったくその通りだが、伝わらないことの方がずっと多いと思う。

心で分かりあえていれば、俺も会長も、何なら北村も、こんなに拗れていないだろう。

胸の内をもっと素直な言葉にすれば、人生楽に生きれるだろうか。

「俺、会長のこと大好きですから」

掌を退けながら、冗談めかしてそう言った。

会長は頬を染めて伏目がちに目を逸らした。それに胸をときめかせながら話を戻す。

「と、言うわけで会長の不安を一つ解消したと思うんですけど、まだ何かありますか？」

「……あなたがいくら気にしないって言っても、犯しそうになった事実は消えないわ。」

あなたに対する根本的な不安も残ってる」

「まあ、その罪悪感は少しずつ消していただくとして、不安の方はどうかしたいですね。また爆発したら、傷つくの会長ですし」

とは言え、どうにか出来るかと言うとどうにも出来そうにない。

不安を取り除くのに一番手っ取り早いのは、俺がきちんとすることだ。

この世界の男子のように、ガードをもっと固くできれば何の問題もない。けれどそれは無理だと結論が出ている。

俺の場合は、越えさせてはいけない一線が他の男子よりも手前にある。

無意識で引いている線だ。一朝一夕でどうにかなるものじゃない。

どうしたものかと腕を組む。世界が変わってまだ一週間経ってないんだもんなあ。

「……指切りでもしますか?」

「え?」

「今後、何かあったら絶対に会長に教える。もちろん、一人で勝手に登校するのは無し。話を誤魔化したり、嘘をつくのも無し」

考える間を繋ぐためのおためごかしだった。本気で言ったわけじゃない。

けれど、思いのほか会長は乗ってきた。琴線に触れる何かがあったらしい。

「……もし約束を破ったら、何をしてくれる?」

「なんでもいいですよ。何なら針千本飲みましようか？」

「痛いのは、見てることの方が辛くなるからイヤ」

「じゃあ、他に……」

真面目に解決策を練る片手間で考える。

なんか適当なの。笑えるようなの。

頭半分で作ってる分、中々妙案は浮かんで来ない。普段バラエティを見ているのだから、それが少しは役立っても良いだろうに。

「思いつかない？」

「うーん。そうですわねえ……」

「————本当に、なんでもしてくれる？」

囁くような声。他の乗客に聞こえないように配慮したのだろうか。

なんでもと言う部分に淫靡な気配を感じてしまう。悲しい男の性だ。

横目にチラッと会長を見る。俯いていてその表情は窺えない。

「良いですよ」

「………いいの？」

「俺、嘘つきませんからね」

「………嘘つき」

「さあ、どうでしょう」

小指を立てる。

会長も同じようにした。

小指同士を絡ませ、リズムを取って上下に揺すった。

「ゆびきりげんまん」

「うそついたらはりせんぼんのーます」

「指切った」

これを終えるのに、時間は十秒もかかってはいなかっただろうけど、それでも周囲の視線は感じた。

乗っている人が少なくて助かったと思う反面、見せつけてやろうかとヤケクソ染みたことも考える。

この年で指切りは中々恥ずかしい。

「約束守らなきや、本当にどんなことでもしてもらおうわよ」

「男に二言はありません。任せてください」

俺の安請け合いに会長は眉をひそめ、「可笑しい言葉を使うわね」と首を傾げた。

「ちなみに聞きますけど、どんなことを？」

「死にたくなるようなこと」

「絶対守りますんで。安心してください」

その一言で、ようやく会長は笑ってくれた。

相変わらず表情に陰はあるし、微笑むぐらいの小さな笑みだったが、笑ってくれたことには変わりない。

俯くことで少し丸くなっていた姿勢も、来るときの様に真っ直ぐになった。

まだ内心整理しきれたわけではないのだろうけど、少し前向きになってくれたようで嬉しい限りだ。

人生前向きが一番だ。辛いことばかりなんだから。考えてもしようがないことは山ほどある。

この前向きさを崩さないように、俺も約束は守らないといけない。取りあえずは北村にノートを貸す約束からきっちり守っていくことにしよう。

携帯を見ると、時間は一時を過ぎていた。途端に腹の虫が気になった。

授業を受けていた時からずっと腹は空いていたのだが、色々あつて今まで忘れていた。

窓を流れる景色に目を向けながら、昼飯は何を食べようかと、そんなことに思いをはせた。

第21話

日曜日は朝早くから駅前に出かけた。

別に電車に乗ろうと言うつもりはない。ただ、その近くの店に用が出来たから、出来てしまったから、嫌々家から出たのだった。出たくないけど、出たのだった。

本当は一日家にいるつもりだった。

昨日は北村の家に遠出をしたし、ここ一週間でちよつと色々ありすぎたので、英気を養うついでに引き籠る予定だった。元々引き籠ることが日常生活の一部だったから、自然と身体もそれを望んでいた。

だと言うのに、朝早くから駅前に出発し、雑踏を掻い潜って本屋に出向き、料理本を捲っている訳と言うのは昨夜の電話が原因だった。

「はい、もしもし。」

『おー出た出た』

ひたすら無視していた着信が5く6回を越えた辺り。夜の7時を越えてなお勢いを増すばかりだったので、さすがに観念して受話器を手を取った。

電話向こうの声は直に聞くものと少しだけ違っている。そう言う仕様なんだと、マメ

知識程度に覚えていた。

『バカ息子お。何回かけたと思ってるんだい?』

「どちら様?」

夕飯のカップラーメンを気にしながら淡々と聞く。

今お湯を入れたばかりだから三分だけ時間がある。

別に三分だけ待つてやるなんて言うつもりはない。一分でも一秒でも、その時が来れば即座にブチ切る心積もりがあった。

『あつはつは! どちら様だつてえ!?! わたしの名前覚えてないのお!?!』

テンションがおかしい。言語中枢にも問題があるようだ。

これは、多分脳みそがアルコールに犯されている。その時が来てしまった。

「お疲れ」

受話器を置いて台所に戻る。

まだ出来てないカップ麺を片手にリビングへ。

テレビの電源を入れて、映った番組をぼんやり眺めた。

画面の中では、10年以上前から人気のある芸能人がなんか上手いことを言つて笑いを誘つていた。

ひな壇に並ぶ芸能人が笑い、後付けらしき観客の笑い声が響く。

それを見て別に笑うでもなく、感心するでもなく、感情を動かすことはせずただ画面を眺める。

テレビの音に混じって、背中に固定電話の着信音が聞こえてくるが、それはやっぱり無視した。

その代わり、予定の三分まで少し残したカップ麺を啜る。固めの麺が好きなのだ。

何十回と鳴る着信音はそれだけかけ直されている証拠だったが、慣れてしまえば雑音とすら感じなくなってしまう。

日常の横で普通に発生する生活音。例えるなら、車道で聞こえるエンジン音や学校で聞こえる話し声のような、そこにあって当たり前のものだと錯覚してしまう。

絶えず着信音が鳴り響く生活なんて絶対に嫌だが、諦めの境地の先には仙人のような達観が待っていた。

悟るのって案外簡単なんだなあ。

そんなことを思いながらカップ麺を啜る。

やがてついに諦めたのか、電話は留守番電話サービスに接続された。

内心で勝利の美酒に酔い、どんな世迷言を残すつもりなのかとそつちに意識を集中する。

内容は次の通りだった。

『うーす。出ないなら出ないでいいや。お前に言っておきたいことがあつてねえ。日本に帰るの、もうちよい後になるうー。一か月後ぐらいかなあ。待つてねん。ちゃんとアーニヤも連れてくからあ。あ、アーニヤはいまあたしの隣で飯食つてるよー。……まつずそんな顔してんなあ、お前。そりやあ、こんな所で食う飯が美味いわけないかあ。そう言う私は昼からうつまい酒飲んでご満悦うー!』

「ぐわつはつはつは!!」とゲスイ笑い声を響かせて留守電は終わった。

静かになつた固定電話を見据え、こつちから電話をかけてやろうかと散々迷つた。

しかし、所詮酔つ払いに何を言つたところで暖簾に腕押しにしかならず、『暖簾』という単語だけで日本酒飲みたいとかほざかれるのは目に見えてたから断腸の思いで見送つた。

酒の飲みすぎて死ぬなら勝手に死んどけと、その程度の感想しか抱かなかつたが、ただ一つ気がかりなのはまだ見ぬ妹（仮）のことだった。

あの酔つ払いに付き合わされているのもそうだが、そもそもちゃんと食えているのかも怪しい。

酒のつまみになる脂っこいものばかり食べてるんじゃないかと少々不安になつた。

妹と言うからには15歳より年下だろう。その年頃で偏つた食生活は気の毒に思う。

……一か月後ねえ。

ずっと先のことに思えて案外早い。

30日後なんてあつという間に訪れるだろう。その時に備えて何か準備は必要だろうか。

テーブルの上のカップ麺に目を向ける。テレビでは胃痛薬のコマーシャルが流れていた。

この世界は引っくり返っている。本来、男が受け持っていた役割の大部分を女が受け持っている。

逆に、女が受け持っていた役割のほとんどが男の役割になっていたりする。

最近では男女平等だとか言われているけど、まだ根強く役割分担の概念は残っている。

思い返せば、北村の家には父親はいたけれど母親はいなかった。

昼飯の焼きそばを作ったのも、どうやらあの丸顔の父親らしい。

炊事洗濯掃除を始めたとした家事はこの世界では男の役割のようだ。

元々あの酔っぱらったおばさんにその辺の能力なんか期待してはいなかったが、この世界では余計に期待できそうにない。

高々10歳そこらの子供に酒場で昼飯食わすような人間だ。親としてはとつくに論外で、人としてすら終わってる。

健康的な食生活ということであれば、俺が頑張るしかないのだろう。俺にしかできないことなんだろう。

「一緒に暮らすなら、仲良くする努力は必要か」

やらなければいけない理由を口にして、日曜日からほんの少しやる気を出すことにした結果が、朝早くから本屋に足を運んだ理由だった。

適当に手に取った料理本。塩適量。砂糖お好み。みりん少々。

ふわつとした単語が並ぶこれは本当に金をとっているのかと疑わしい。

実は無料配布じゃなからうかと裏表紙を見れば、中々良い値段が書いてある。

とりあえず、料理研究家とか言うよくわからない職業人が書いている本は買うのを止めた。

ふわつとした本の中からある程度具体的に書いてあるやつを見つけ、一冊だけあったロシア料理の本をめくる。

ボルシチやビーフストロガノフなんて料理の作り方が書いてあった。

写真を見ると、ビーフストロガノフはどう見てもシチューで、ボルシチに至っては給食で食ったことがあるような気がした。

レシピを読む限り、初心者でも比較的簡単そうな料理だ。

これも一緒に買うことにしてレジに向かった。

それから、食材を買うためにスーパーに向かう。

家から一番近いスーパーでは肉は100g150円とか書いてあった。部位にもよるのだろうが、これは果たして安いのか高いのか。

どうなんだろう。主夫生活初日の若輩者には判断がつきにくい。

肉を手にして立ち尽くす。

そもそもこれ今日使うんだっけ？

買いだめして冷凍庫に入れておこうなんて玄人ぶつたことを考える必要はないはずだ。

とりあえず必要な分だけ買っておこう。まず、今日何を作るかだ。

ハンバーグかな……。ハンバーグでいいや。

ハンバーグに使うのはひき肉か。

行き当たりばったりにその場で決めていく。

とてもじゃないが褒められた行為ではない。

この頃になるとすでに少し面倒くさくなっていた。

会ったことはおろか、見たことすらない妹のために何を頑張っているのだろうと頭の隅で思い始めていて、料理に対するやる気はやや削がれていた。

なんなら妹の存在を疑ってすらいた。酔っ払いババアの狂言の可能性を強く支持し

ていた。

アーニヤなんて名前、ロシアじゃよくある愛称だそうだ。酔っぱらった勢いで驚かしてやろうとあのおばさんが考えることに何の違和感もない。

それはともかくやりかけたことは最後までやってしまおうと、その辺の疑念から目を逸らす。

ひき肉の並ぶ一角で「合いびき肉ってなんだ」と自分の無知さをひしひし実感していた。

そんな時だった。聞きたくない声が後の方で聞こえたのは。

「あれ……? 七瀬?」

突然呼ばれた声には聞き覚えがあった。忘れたくても忘れられないぐらい記憶にへばりついている。

百歩譲って、学校ならともかくこんなところで関わりたくなかったので、第一声は肉に集中しているフリで無視した。

そのままどこかに消えてくださいと信じてない神に祈ってしまった。困った時の神頼み。

「七瀬だよね?」

次に聞こえた声はさつきよりも近づいてきていた。

これはスルーするのは無理だ。最終的に肩でも叩かれるんじゃないか。リストラに怯える社員みたいな心境で振り向く。

クソ短いショートパンツに、タンクトップみたいな袖の無い上着。清楚とはほど遠い格好をしたやつが、カートを押しながらこつちを見ていた。

「やっぱ七瀬じゃん」

「奇遇ー!」と笑顔を浮かべるそいつの横に、小学生ぐらいの男の子が胡乱気な顔で立っている。

いつだかこいつが言っていた、弟がいると言言葉思い出した。弟に弁当を作らせているとも言っていた。

なぜここにいるのかと言う疑問は、頭の中で勝手に解決してしまう。

「菊池って、この辺住んでたの……?」

「めっちゃ奇遇!」

満面のその笑顔は、俺にとっては死神の笑顔にしか見えなくて、とりあえず溜息を吐いた。

第22話

奇遇だとか何とか言つて近づいてくる菊池。その後ろにいる男の子。

たぶん小学校の高学年ぐらいだと思う。よくよく見てみれば、顔立ちだけでなく髪の色まで菊池そっくりだ。これで血の繋がりがなかったら凄い偶然。運命を疑う。

周囲の視線が二人に注がれている。

二人そろつて美形だから、鬱陶しいぐらい電灯が光っているスーパード真ん中でも目立つ。むしろスポットライトみたいになっていた。

光を浴びて一層輝いて見える菊池の笑顔。どす黒い瘴気を感じて溜息を吐く。そんなでもって胸の内を隠すことなく呟いた。

「会いたくなかった」

「うわー。初っ端からひどい」

演技がかつた素振りを見て余計に気分が落ち込んだ。すでに術中に嵌っている気がする。

「なんだって学校以外でこいつと会ってしまったんだろう。不運だ。」

「七瀬は買物？」

会話の取っ掛かりとは言え、分かり切ったことを聞いてくる。

「まあ一応。……そつちは？」

「もちろん面白い物」

菊池はカートの籠を指さしながら答えた。

中には何も入ってない。来たばかりだろうか。

「ふんふん。合いびき肉？ ハンバーグかな？」

「正解」

「ふーん……料理しないって言ってなかったっけ？ なんかつた？」

一瞬言葉に詰まった。菊池の探るような目が痛いところを突いている気がした。

いや、何もやましいことなどないので、それは完全に気のせいなのだが、こいつの言動は一々心の内を見透かしているようで不安になる。

「たまにはする」

「たまにねえ……」

下から窺うように見上げられる。

これ以上詮索されるのはたまったものじゃない。話題を変えたい。

「そつちの子は？」

丁度いいところに所在なさげに突っ立っていた男の子がいる。

視線を向けたら、緊張した顔で俯いてしまった。若干傷ついた。

「ん。弟」

「弁当作ってくれるとか言う？」

「そ。てか一人しかないし。名前はゆきと」

ゆきと。漢字にしたら幸人が行人か。ちよつと古いかな。

「雪の兎で雪兎。かわいいでしょ」

「かわいい」

俺のセンスはやつぱり古かった。予想はかすりもしていない。

脳裏に一面真っ白な雪原を跳びはねる兎が浮かぶ。そんなの可愛くないはずがない。

「よろしく雪兎くん。七瀬って言います」

「……よろしくおねがいます」

中腰になって視線を合わす。

恥ずかしかがって視線を合わせてはくれなかった。

答えてくれた声は小さい。人見知りっぽい。

菊池がフオローに入った。

「ごめん。ちよつと人見知りだから」

「かわいいじゃないか」

「それは好き好きだと思っけどね」

菊池は雪兎くんの頭を掴んで、「もう中学生なんだからシャキツとしろ！」と叱咤した。

きつい言い方だったが、その声音にどことなく愛が感じられて微笑ましかった。この間脅迫してきた奴と同一人物とは思えない。

「て言うか中学生なのか」

「今年からね。ちよつと背が小さいから小学生に思われるんだけど」

内向的な性格も災いして実年齢より若く見える。

それでも中学生だと思って改めて見てみると少し大人っぽく見えた。印象の問題か。

「こんなんでも中学生だから」

ペしペしと頭を叩かれる雪兎くんは微妙な表情をしている。

それでも嫌がっている様に見えなかった。家族仲は良好なようだ。

「じゃあ、俺買物あるから」

「え？　一緒にしてくでしょ？」

「しねえよ」

どうしてそうなるのか今一わからない。

菊池はニヤツと笑うと、

「買い物デートしようか」

「しない」

「じゃあしようがない。新婚ごっこしよっか」

「断固拒否」

ニヤニヤと笑いながら「えー？」と声だけは不服そうにしている。表情がどう見ても揶揄つている時のそれなので、相手をしてるこっちは疲労感を覚えた。

「まあまあ」

腕を掴まれ胸に抱かれる。

柔らかい感触が伝わってきたが、今更そんなものに惑わされるほど無防備ではない。会長、俺成長してます。

「放せ」

「えー?」

頭を押さえて遠ざけようとしても、俺の力なんか屁でもないのか、表情一つ変わらな
い。

むしろ余計に力が籠った。密着度が上がる。

「将来どうせ家族になるんだし、予行練習だと思ってさ」

「絶対ありえないから」

「絶対なんて100%のある人生はつまらないでしょ?」

「いま心の底から求めている」

「どれだけ拒絶しても、菊池は笑顔のままだ。」

何を言っても手ごたえがない。将来家族になるとか、プロポーズに聞こえなくもないが、金曜日の決戦を思い出せばそんなつもりがないのは馬鹿でも分かる。

こいつの言動は不可解を極めている。軽薄っていうレベルを遙か越えて、宇宙人と話しているようだ。考えるだけ無駄なのかもしれない。

「買物物は一人で済ませたい。他人がいると落ち着かない」

「そう言うルーチンワークが続くと、たまに違った刺激が欲しくなるのが人ってもんでしょ。私って言う刺激、受け入れて見ない?」

「生憎と安定を求める性質なんだ。ルーチンワークほど安心する」

「安心も慣れちゃえば飽きがくるよね? お爺ちゃんじゃないんだから、適度に刺激的なスパイスはあった方がいいと思うけどなあ」

「お前とのそれは、想像だけで刺激的過ぎてちよつと無理。遠慮する」

「何事も慣れだつて。私も初体験は気持ちよすぎて死んじゃうつて思ったし」

「聞いてない」

会話の主導権が握れない。

暖簾を押ししてるような気分だ。何たる無駄な労力だろう。

会話の内容は屁理屈のこね合いでなんら生産性がない。こねるのはハンバーグの予定が、とんでもないものをこねてしまっている。

げんなりと旗色悪い中で、唐突に突飛なことを言いだされては白旗もあげたくなくなるというものだ。

「雪兎くんもいるのに何言ってるのお前」

「うふふ」

嗜虐的に口を歪める菊池から、じんわりと勝者の気配を感じてしまった。

こんなものを感じる時点ですでに俺は負けている。勝ち負けの問題ではなかったと思うのだが。

「分かった。聞きたいこともあったし、一緒に買い物しよう。デートでも何でもない、ただの買い物しよう」

「やった！……聞きたいこと？」

菊池は大仰に喜んだあと、人差し指を頬に当てた。

「それってなに？」

「今言うようなことじゃない」

雪兎くんもいるし、他の目もある。犯罪者の心理なんてあまり大っぴらに聞けるよう

なことじゃない。

菊池の目が横にいる雪兎くんに向けられた。雪兎くんは俺たちのやり取りを蚊帳の外ですつと眺めていた。

さぞ居心地が悪かっただろうと、最近似た経験をしたので分かる。

「いいよ。出来る限りなんでも答えてあげる。上限は一日のオナニーの回数あたりかな」

「聞いてないし聞かないぞ。もう大つびらにそういうこと言わないでくれよ。本当に他人の振りしたくなる」

そう言いつつ、若干食指が動いたのは否めないが、それも知的好奇心から来るものなので、こいつに対してそう言う下心は一切ない。

スーパーのど真ん中でよくそんなことを言えるものだという感想が一番大きい。

「そう言いつつ気になってるのが手に取るようにわかっちゃうんだなあ、これが」

「妄想力逞しくて尊敬する。他人に迷惑かけない程度に大切に育んでくれ」

「これが妄想かどうかはその内分かるよ。ね？」

ぎゅつと抱かれた腕に力が込められる。

そんな日は一生来ないことを宣言しておく。来てしまったら、多分俺の人生はそこで終わりだ。その先の展望なんて100年かけても思い描けない。悪魔に魂を握られた

のとどっこいどっこいの末路を辿る気がする。

「いい加減放せ」

「あいたっ!？」

チヨツプを一発。

菊池は大げさに声を上げた。

叩かれたところを抑えて「痛いよー」と棒読み風に自己主張している。

それを無視して、俺たちのやり取りを見つめていた雪兔くんにつ訊ねた。

「こいつって家でもこんな感じなの？」

「……」

雪兔くんは答えてくれない。

ただ、何となく戸惑っているのが分かった。この反応はどういう意味だろうか。

考える視界の隅で菊池がべつと舌を出したのが見えた。

俺は溜息を吐く。こいつの相手するのしんどい。まじで。

第23話

買い物はつつがなく済ませた。

菊池が嫌にハイテンションで鬱陶しかったが、それものど元過ぎれば何とやら。

レジを通してエコバッグに詰めこむ頃には大分大人しくなっていた。

「バッグ二つ。結構買ったな」

「そう？ 5人家族ならこんなもんだと思うけどなあ。七瀬が少なすぎるんでしょ」

俺が買ったのは一食分のハンバーグを作るのに必要最小限の食材だけ。

エコバッグ一つすらいらぬくらいだ。なんなら手に持ったまま帰れる。

対して、雪兎くんは籠二つを一杯にしていた。

買い物中、人見知りの雪兎くんは意外なことにキビキビと動き、菊池の鬱陶しさのせいもあって度々置いて行かれた。

菊池と二人つきりなんて冗談じゃなかったから、置いて行かれないように必死について行ったのだ。

会計を済ませた後、菊池と雪兎くんが分担してそれを詰め込んだ結果、エコバッグ二つに収まった。

見た感じそれほど重くはなさそうだが、2リットルのお茶も入ってるから、結構重いはずだ。

「二つ持とうか？」

「……んん？」

無意識に聞いていた。筋力が落ちてることなんかすっかり忘れていた。よくよく考えれば馬鹿な話だ。

案の定、菊池はふつと笑って「大丈夫」とバッグを二つとも両肩から提げる。

「そんなに重くないし」

「ふーん」

中身を考えれば、世界が引っくり返る前の俺でも苦勞しそうだが。

しかし本人が重くないと言うならこれ以上は何も言えない。仮に言ったとしても役立たずだ。

「うーん……」

菊池は何か考え込んで顎に人差し指を当てている。

ニヤツと何か思いついた顔をして、

「雪兎ー。ちよつとジュース飲んで行こうか」

そう言つて天井を指さした。

その指に釣られて雪兎くんと一緒に天井を見る。蛍光灯が光っている。

「上にさ、確かレストスペースあつたでしょ」

「あー。あつた……かな」

このスーパールの二階には、確か百均とか服屋が入っていた。

その一角に、小さなベンチがあつたはずだ。

「いいの?」

「いいよ」

少々興奮した様子の雪兎くん。

菊池は鷹揚に頷いた。

「んじゃ、まあお金渡すから——」

「ちよい待ち」

両肩にバッグを提げる菊池が、動きづらそうに財布を取り出そうとしたのを制止する。

500円玉を雪兎くんに握らせた。

「これで好きなの買っておいで」

掌の小さな硬貨を見つめる雪兎くんに念を押しておく。

「俺は緑茶で」

頷いて、嬉しそうに走り出した雪兎くん。

その背中を見送って、菊池が言った。

「あー……悪いね。奢ってもらっちゃって」

「別にいいさ」

悪いことしたわけじゃないし。

年下の子供が喜んでるなら、むしろ良いことしたんじゃないだろうか。

「ていうか、お前はいらぬのか？」

「んー？」

「雪兎くん、俺の分と自分の分しか買ってこないんじゃないのか？」

「あー。まあ大丈夫だよ」

カラツと笑顔の菊池は、何を威張っているのかという調子で言う。

「私が飲むのはコーラって昔から決まってるの」

ふーんと興味なく頷いておく。

それから冗談交じりに訊ねた。

「コーラばかり飲んで、骨は融けたりしない？」

「融けるわけじゃないじゃん」

当然と言えば当然の返答を聞いて、二人で二階に移動した。

「どっこいせ」

爺くさい言葉を吐きながら、菊池はバッグをベンチに置いた。
「はーよっこいしょ」

そのまま腰を下ろす菊池の爺くさは留まることを知らない。
バッグに体重をかけ、立ったままの俺を見上げる。

「座りなよ」

「やだ」

ベンチは一つしかなく、空いているのは菊池の左隣だ。

本当に人が一人だけ座れる程度のスペース。

接近したくないと本音が零れる。

「んー……。ま、いつか。で、話って？ 愛の告白？ 喜んで」

「違うけど」

頭の痛くなる会話だ。

なんでこいつこんななんだろう。

見た目は良いのに、色々勿体ない。

「誰にも言うなよ」

「あ、内緒話なんだ。嬉しいなあ。私口の固さは自信があるの」

「本当か？」

「お口ちゃーつく」

ジーツとチャックを締める振りを見せられた。

「ね？」と同意を求められても、今の行動のどこに固さの根拠があるのか分からない。

「ま、割かしどうでもいいことなだけど」

前置きとしてはそんな感じ。しかし、いざ言おうとするといささか躊躇する。

太ももに肘を置いて頬杖をかく菊池は、黙って俺の言葉を待っている。

「ここまで来て今更言わないなんて選択肢はないか。」

「率直に言おうと、一週間ぐらい前、電車で痴女られたんだ」

「ふむ。……んあ？ え？ 痴女？」

「それで、昨日、痴女ってきた奴が超笑顔で手振ってきたんだよ。これどういうことだと思おう？」

「……………は？」

菊池の顔から笑顔は消え去った。口をぱっくり開けて呆けている。

理由は大体分かるが、とりあえず意味が通じなかつた可能性を考えて、自分の言葉を見直した。

「……………え、七瀬痴女られたの？」

「うん」

「で、その痴女が……………なに？　笑顔？　手振ってきた？　……………どういうこと？」

「その通りだよ」

未だに理解は追いついてないようで、眉間を揉みながら頭の中を整理しているようだった。

流石に、その様子を見せられては言葉足らずだったと反省せざるを得ない。

さて、どんな言葉を付け足せばいいだろうか。

「あ……………。まあ、俺が言いたいのは、この場合の犯罪者の心理を教えてほしいってこと」

険しい表情でじろつと睨まれる。機嫌の悪さが見て取れる。

「そんなの分かるわけじゃないじゃん。七瀬がどう思ってるのか知らないけど、私犯罪者じゃない」

「なんか完全犯罪がどうだの言ってたでしょ」

「だから、それはあ！ ……それは冗談だつて言つたじゃん」

一瞬声を荒げた菊池は、すぐに我に返つて普通の声音に戻した。

いくらひと気のない隅つこと言えど、怒鳴り声なんか出せば誰かしら人が寄つてくるだろう。

「気を悪くしたなら悪かつたよ。ただ誰かに聞きたかつただけで、誰かに吐き出したかつたんだ」

「……」

何も言わない菊池。その様子にいよいよ機嫌を損ねたのかと窺う。

下を向き、何か口元で呟いていた菊池は、突然顔を上げたかと思うと真面目な顔で尋ねてきた。

「私もいくつか聞きたいことが出来ただけど」

「なに？」

「最初に痴女られた時、どんな対応したの」

「尻触つてきたから手に平手打ちした」

「……それだけ？」

「その後すぐ逃げて行つたからな」

学校行く途中だったし、面倒ごとは避けたかった。

そう言うのと、菊池は顎に手を当て考え込む。

「んー……。それで、次にまた会った時に笑顔で手を振ってきたってこと？」

「そういうこと」

「なんで会ったの」

「なんか居た」

「偶然の出会い？」

「多分故意的出会い」

「警察行きなよ」

案外真面な答えにびつくりする。

「それで解決するか？」

「解決はしないだろうけど、やらないよりまし。舐められてるからそれ。その内絶対またやられる」

「その時はまた平手打ちするから」

次は手じゃなく顔面かな。

流石にフルスイングならふつとぶつぐらいの威力あるだろ。

それで痴女ですって周囲に知らせれば終了。大したことじゃない。

「なんかさあ……甘く見てない？」

「散々言われてるけど、別に見てない」

「聞かされる方は心配になるんだよ」

ふーっと大きく息を吐き、「痴女って……痴女か。痴女……」とよくわからない言葉を呟いている。

いきなり異性に痴女被害をカミングアウトされるのは、さすがの菊池もショックだったらしい。

こいつのことだから、こんなの何のダメージもないと思っていたのだが、目算は外れた。俺への言動を鑑みれば、なんなら加害者経験ぐらいはありそうなのに。

「……七瀬って家どこだっけ」

「お前にだけは教えたくない」

「そういうんじゃない。いや、まあ、下心はあるけど」

カミングアウトの仕方が斬新だ。

俺の場合とどっちが衝撃的だろうか。

「ストーカーにしろ何にしろ、身の安全なら保障されてるから安心してくれ」

「なにそれ」

「会長と登下校してるから」

ピタツと菊池の動きが止まる。

「会長つて、金折会長？ この間邪魔してきた人？」

「あれは邪魔じゃなくて助けに来たんだつて」

「本当に？」

「本当に」

疑り深い目を向けてくる。

「二人つて付き合つてんの？」

「付き合つてない」

「でも年上じゃん」

「だからなに」

そこに繋がる意味がよくわからない。

訝しめる俺に「えー……」といつそ面倒くさそうな声。

「彼女いないつて言つてたのに」

「いないつて」

だからと言つて、こいつだけは絶対にお断りだけど。

「生徒会は、柏木先輩に土屋先輩もいたか……うーん……」

痴女相談の時よりも深刻に考え込まれる。

俺の女性関係など、そんな重要なことではない。少なくともこいつには関係ないことだ。

むつつり黙る菊池。それを待っていた様なタイミングで、雪兎くんが足音を響かせて戻ってきた。

手にはペットボトルが二本握られている。

「あの……これ、お茶です」

「ありがとう」

走ってきたらしく息を切らす雪兎くんからお茶を受け取る。

「それとお金……」と残った代金300円ちよつとが返却された。

いっそお小遣いであげようかと思つたが、菊池の手前で変に遠慮されてしまった。仕方なしに受け取る。

で、気になるのは雪兎くんが飲み物を二本しか持つていないということだ。

「私の分は？」

「え、ないけど……」

「私のコーラはあ？」

詰問しながらぐにぐにと頬を引っ張る菊池。そんなことをしても、コーラは出てこない。

先ほど私はコーラしか飲まないと豪語していたが、今思うと滑稽に過ぎる。以心伝心でも何でもない。これが菊池姉弟の限界らしい。

「これやるよ」

まだキャップも開けてなかった緑茶を不意打ち気味に放る。

器用にキャッチした菊池は微妙そうな顔をした。

「お茶かあ」

「文句言うなよ」

「文句はないけどさあ」

文句たらたらな顔では説得力がない。

「うーん」と何か言いたげな顔でラベルを眺め、いいこと思いついたと余計なこと考えた顔を向けてくる。

「間接キスなら——」

「じゃあ俺帰るから」

バッグを持って階段に向かう。

背後から雪兎くんのお礼の言葉が聞こえてきたので、背中越しに手を振っておいた。

「また学校でご飯食べようねー。今度は邪魔はいらないうようにして」

諦めの悪い菊池の言葉は無視した。

週明けから北村が戻ってくる。それを使えばなんとでもなるだろう。

間違つても一対一にならないようにしなければいけない。

なんなら北村に押し付けてやろうか。あいつはイケメンだし、菊池も気に入るんじゃないか。

あわよくば、そつちに照準合わせてくれたら最高なのだが。

捕らぬ狸の皮算用で、少し都合のいい未来を思い描いて帰路についた。

第24話

「朝じゃねえかよちくしょう……」

寝言とも呟きともつかぬ一言が口から漏れ出る。

目に痛いぐらいのカーテン越しの清々しい朝日は、憎つくき敵のように思えた。

そんなことはないと言う正論は聞きたくもない。

どうしてこんなに怨嗟をぶちまけているのかと言うと、今日が月曜日だから。

ちつとも休んだ気がしないが、休日はいつの間にか終わって、寝て覚めたらそうなっていた。

日付は変わり曜日も変わり、世界は何も変わらず朝日が世を照らす。俺の心も照らして欲しかった。

テレビ向こうの異様な光景にはなんだか慣れてしまった。

落胆はしたがそれも言う程のものではなく、淡々と身支度をして約束の時間の五分前をめどに家を出た。

どこかでチュンチュンと雀が鳴いている。

街路樹の葉にでも隠れてるんだろう。隠れ方がうまい。目を凝らしても見つからな

い。木を揺すれば出てくるかもしれない。

日が照っているおかげか肌寒さは感じなかった。風は春の心地よさから夏の暑苦しさに変わりつつある。

思い返せば暦は6月を終え7月になっていた。カレンダーを一枚破り取らなければいけない。

それを思うと多少の暑さも仕方がないと言う気がする。

これから気温は30度を越えてセミが鳴き出す。この程度の暑苦しさと雀の声で文句を言っていたら、日本の夏は生き抜けない。

7月には期末テストがあつて、月末には夏休みに入る。

別にそれが楽しみだと言う気持ちはないけれど、高校生になつて早3カ月が過ぎたのだと考えると少し驚く。

ここ一週間の濃密さとそれ以前の3か月のあつさり感。

高校生活もこんな感じで、一部の印象だけを残して過ぎていくのかもしれない。

欠伸を噛みしめて待ち合わせ場所に着くと、T字路の真ん中に会長が立っていた。

会長は何をするでもなく空を見上げている。

何を見ているのか。空を飛ぶ小さな雀か、あるいはカラス。もしかしたら雲を見ているのかもしれない。

その視線の先にあるものを追ってみても、何を見ているのかはまるで分からない。見る物無しに眺めている。そんな気がした。

本当に何を見ているかなんて本人に聞かないと分からない。

他人のことなんて大抵はそんなものだろう。知ろうとしなければ知ることなんてないし、触れて良いことなのかも自信がない。

俺にとつては、こうして少し離れた場所で眺めるのがお似合いかもしれない。

無意識に止まっていた足に力を込める。

たった数歩近づいただけで会長は俺に気が付いた。

ふわっと儂げな笑顔を浮かべながら手を振ってくる。

その笑顔を見て、一瞬心臓がドクンと脈打った。

土曜日のことを思い出す。あの時に見た顔とは正反対。

なのに、無意識のうちにその唇に視線を向けてしまう。

あと一步と言う所まで行つたのだった。

邪魔が入らなければどこまで行つただろうか。

あんな場所だったけど、もしかしたら最後までなんて思つてしまう。

朝っぱらからそんなことを考えている。健全かもしれないが、褒められたことじゃない。

菊池のことを笑えない。いや、笑ったことなんてないけれど。

一度足元に視線を落として、何度か深く息をする。

それから顔を上げて挨拶した。

「おはようございます会長」

「おはよう」

そう言つて、左手首の腕時計に目を向けた。

「一分遅刻ね」

「うっそお」

出し抜けの言葉は強烈だ。思わず敬語が抜ける。

ちよつと失礼して会長の腕時計を見させてもらう。

言う通り、約束の時間を一分過ぎていた。

「……………」

「うわあ……………」

家の時計が少し遅れていたのだろうか。

あれ確か電波時計だった気がするんだけど。

「五分前に出たつもりなんですけどねえ」

「あなたの家からここまで五分もかかるかしら？」

からかいを含んだ問いかけ。
少し真面目に考えてみる。

心あたりはいくつかあった。

「会長空見てたでしょ」

「ええ。見ていたけど?」

「それ見てたんですよね」

理解の及ばないと言う顔。

もっと具体的に言ってしまうところなる。

「空を見上げてる会長が絵になってたんで、見惚れてたんです。綺麗でした」

言葉を区切り、会長の腕時計をじっと見る。

皮のバンドで文字盤は四角い。小さなのは女物だからか。

どれだけ見つめても針の位置は変わらなかった。

「ああ……思ってたより時間経ってたんですね」

多分そういうことだろうと思う。

家に帰ったら時計を確認しなくてはいけない。

早いならともかく、遅れているのは色々迷惑だ。時計にまで心を脅かされるなんて

真つ平ごめんだ。

「じゃあ、まあ……行きましようか」

「ええ。そうね。行きましよう」

早足気味の会長に置いて行かれないように、俺も少し早足で歩く。

後ろからだ顔が見えない。長い髪がなびいているから横顔すら覗きにくいだが、無表情で怜悯な瞳が前を見ていた。

朝から良いもの見れて眼福でしたと言え、その無表情を崩せるだろうかなんて性悪なことを思いつく。

まあ、絶対そんなことはしないけど。思うだけならタダだ。誰にも迷惑はかけはしない。

いつの間にか気分は上向いていた。これもきつと会長のおかげだ。心の中でこっそり拝んでおこう。

会長と分かれて教室に向かった。

早い時間だというのに、教室にはすでに何人か来ていてその中に北村もいた。

北村は登校してきた俺に手を挙げて「おはよう」と挨拶してくる。

「おはよう」

「ん」

催促するように差し出された手。

分かってるよと若干鬱陶しく思いながら、いくつかノートを渡す。

「あれ、これだけだっけ？」

「後は今日使う」

今日は例の国語がある。国語のノートは特に字が汚い。

解析に時間がかかるだろうから、放課後に纏めて渡すつもりだった。

「ケチくせえ」

「どうせそれ写すのにも時間かかるだろ」

「たったこんだけだぞ？　どんだけ字汚いんだ」

「手元にあるのを見ろ。とくと知れ」

北村がノートを捲り、「うおっ……」と声を漏らした。

数秒見つめたまま動かなくなつて、「あ、なんとかわかる」そう言った。

「特徴は掴んでんな」

随分な言い草だった。

具体的にどんな特徴なのか気にもなる。

「それちゃんと日本語だから」

「あとおの区別がつかねえ」

「なら文脈で判断しろ」

後は特に言うことはない。

北村は自分の席に戻つてノートを写し始める

時計の針が進むにつれて、だんだんと教室に人は増えてきた。

北村の体調を気にする声も多い。

それに笑つて答える姿は本当に大丈夫なように見える。実際どうなのかは俺の知るところではない。

「ふう……」

10分も経つて、一段落したらしい北村からノートを一冊受け取る。

することもないから、手慰みにそのノートを見返す。

「……七瀬さあ、今日も早織と来たのか？」

「来てないって言ったらどうする」

「え……どうしよう……」

考える程の冗談だったろうか。

「発起人のくせに適当だな。来たに決まってる」

「じゃあ……あいつ今学校にいるのかな？」

「帰ってなきやいるんじゃないの」

北村はふーんと素っ気ない相槌を打って、二冊目のノートに取り掛かった。

その背中を見つめる。

土曜日のことを考えれば気になるのも当たり前かもしれない。

あの時、会長は北村家のお誘いを断っていた。

しかしその話をするだけなら携帯で事足りるような気もする。

こいつと会長が普段どんな話をしているのかは想像もつかない。俺のように普段連絡こそ取り合わないが、会えば適当な話をするような安い関係ではないと思うが。

「ちよつとトイレ」

「大小どっち？」

「言えるかバカ」

教室から出ていく北村を見送る。

出ていく北村とすれ違いにまた一人登校してきた。

眼鏡をかけたクラスメイトはすれ違った北村をチラと見て席に向かった。

さすが休み時間に保健室へと担がれた男は注目度が違う。

担いだ方は別の案件で注目されているし、ある意味で運命共同体のような感じだ。俺の注目のされ方のほうが数段たちが悪いと言うのは考えないようにならなければいけないけど。

北村の場合は盲腸説が流布されたから、暇つぶしのクイズ程度に思われているんだろうか。だとしたら可哀そうなことをした。面白半分の注目ほど身に浴びて不快な物はない。

そんな事を思いながらノートを捲っていく。

早く学校に来て復習するなんて、我ながら優等生やっている。

地道に勉強するしかないと言う会長のアドバイスに従う形だ。

上下関係が身体にしっかりと染みついていて、社会に出ても上手くやっっていけるだろう。

……いや、どうだろうな。引っくり返ったこの世界では、上手くやっっていける様

に思えて、見えない落とし穴がありそうだ。

まあ、成るように成るだろうと樂觀的に考える他ない。

上手く適応できるならそれに越したことはない。

元の世界に戻るのが一番良いのだけど、今のところその予兆はない。

ある日突然戻っても、それはそれで困る話だ。どうせ戻るなら早めに戻ってもらいたい。

とつとに戻らないかな。この世界。

その後、予鈴ギリギリまで北村は戻ってこなかった。

直前になってようやく戻ってきた北村は少し不機嫌そうだった。だから聞いた。

「便秘なのか？」

「……うるせえよ」

この返答は正誤判断に困る。

むつつり黙り込む北村を見て、こつそり携帯を覗く。着信は一つもない。

俺が考えた所でどうしようもないことだと分かつてはいるのだが、しかし交わされたやり取りを目の当たりにしているから、どうしても気になってしまう。

これ以上深入りするつもりはない。でも気になる。野次馬根性丸出しだ。まったく人のことを言えたもんじゃない。

携帯の電源を切り、カバンに押し込む。
代わりに教科書を取り出した。

切り替えて地道に頑張ろう。目指せ学年一位。溜音先輩に負けないように。
ホントにあの人だけには負けたくない。いやまじでさ。

第25話

昼休み。

北村は自分で作った弁当を食べていた。

その弁当は彩りや栄養のことばかりではなく、おかずの並べ方まで整然として、母親か誰かに作ってもらったのだらうと思えて仕方がない。

しかし聞けば自分で作ったのだと言う。何ともふざけた話である。

北村の弁当に疑惑の目を向けながら、コンビニで買ってきたパンを食す。

何かを食っている時ばかりは人間誰しもが静かになる。

かつての北村もそうだった。だから昼休みが始まって10分弱。廊下に比べて静かな教室は見慣れた光景だった。日常と言ってもよかった。変なのが来るまでは。

「よっすー」

気の抜けた挨拶と共に入ってきたのは目立つ髪色。茶髪。

最近この色嫌いになってきた。フローリングの色とかこんな感じなのに。不思議なこともある。食中りかもしれない。栄養過多なんだろう。行きすぎれば毒にもなる。

「あれ、北村じゃん。元気になったの？ 良かったねえ」

様々な元凶である菊池はカラカラと笑いながら北村に話しかけていた。

「まあな」とミートボールを口に放り込みながら北村は頷いている。

こうやって普通に話している感じ、ひよつとして知り合いだったのかと驚きつつ二人の会話に耳を傾ける。

「盲腸だっけ？ 私の弟もなったことあるよー。痛いんだってね。なんか泣いてた。どんまい」

「盲腸じゃねえよ」

これで今日何度目になる訂正か。

北村は不機嫌に弁当をぱくついている。

朝からずっと機嫌が悪い。ずっと何かを引き摺っている。

盲腸だと間違った噂が流布されていたのも拍車をかけている。話しかけてきた奴がそそくさと退散するぐらいには険悪な空気が滲み出ていた。空気悪いからさっさと治してくんないかな。

「うん？ そうだっけ？ あー……そうだったかも。でも入院したことには変わりないんだよね？」

「ああ。まあ……」

「うん。じゃあどんまい」

北村の苛立ちなど素知らぬ顔の菊池は、言い方も表情も何もかもが軽い。

病み上がりの奴に話しかける時、普通は気の毒そうな顔と口調でくるものだが、菊池はそんな素振り全く見せずにいる。

北村に興味がなくて、入院したことなんてどうでもいいと言う風だ。そこにいたから一応言つとくか的なおざなり感。

この接し方はちよつと意外だった。

北村はイケメンだから、媚びるように接するものとばかり思っていた。

男でイケメンなら誰でも良い的な奴だと思つてたのに。

北村は眉をひそめて菊池を見ている。

言いたいことがあるようだったが、それについては何も言わず弁当に向く。

「心配してくれてありがとう。で、お前何しに来たんだ」

「七瀬にちよつとね」

ついに菊池の目がこつちを向く。

もそもそとパンをかじり存在感を消していたが、透明になれたわけではなかつたらしい。悔しい。

菊池は手に持っていた弁当らしき包みを俺の席に置いた。

まさかこいつここで一緒に飯食うつもりか。戦慄が走る。

助けを求めて北村を見る。北村は不思議そうな顔をしていた。役に立ちそうにない。

「これ、雪兔から」

「は？」

「お礼だって。昨日の」

理解するまでの間、包みを凝視する。

昨日。お礼。雪兔くん。

理解した。理解はしたけど……。

「……」

「受け取るよね。雪兔からの感謝の気持ち」

「いや、まあ……」

こいつの目には今俺が食べているパンはどう映っているのだろう。

もう半分ぐらい食い終わってるんだけど。弁当持ってくるのが大分遅い。

「私からじゃなくて、雪兔からだよ？ これ私なんにも関係ないし。雪兔頑張ってるんだよ。受け取るよね。ね？」

露骨に圧力をかけてくる。

溜息を吐く。どの道受け取らないなんて選択肢はないだろう。

純粋な善意に対して、気持ちだけ受け取るなんて詭弁はあまり使いたくない。

これがいつもの利己的な善意だったら好きだけ使つてやるのに。

「受け取るつつうの。雪兎くんにありがとうつて言つといて。で、お前はもつと早く持つて来い」

「ごめんね。忘れてたの。雪兎には伝えとくから」

包みを自分の方に寄せながら一つ文句を飛ばした。今更菊池がこんなことでへこたれる訳がないと分かつてはいたが、その予想は的中。悪びれもしない適当ま謝罪に辟易する。なんとも酷い理由だった。

「じゃ、放課後弁当箱回収するから、ちよつと待つてて」

「いや明日洗つて返す」

「いいよ別に。一つも二つも変わらないって」

洗うのが雪兎くんだからつて適当言つてるだろこいつ。

「しきりに間接キスがどうこう言つてる奴にまんま渡せるか。洗つて返すよ」

「あらら……。ここに來て今までの言動が仇に」

残念無念と厭らしく笑う。煽るような表情に鳥肌が立つ。

今まさに仇を作つていることにこいつは気が付いているんだろうか。

「さつさと帰れ。消えてくれ」

「ん。今日はこの辺で退散。じゃあね——」

ぱたぱたと足音が扉の向こうに消える。

うるさい奴がいなくなつて途端に静かになった。

周りの目が気になる所だが、あえて無視した方がいいだろう。どうせ何も変わらな
い。

弁当箱を持ち上げて重さを計る俺の横で、北村が「ふうん」と意味ありげに呟いてい
た。

「噂には聞いてたけど、菊池か」

「噂つて？」

「付き合つてるとか付き合つてないとか」

「ああ。全部ウソ」

結び目を解いて丸っこい弁当箱が露わになる。

想像していたより小さい。これなら今からでも全部食えそうだ。

「付き合つてなくても、熱烈なアタックを受けてるのは本当みたいだな」

「嫌がらせを受けてはいるな」

ふつと北村は笑う。

小馬鹿にしたような笑い方が癪に障る。

「いいじゃないか。菊池由香。あいつクオーターらしくて見た目整つてるし、彼女にす

ればお前の鼻も高いだろ」

「そんなクソみたいな理由で恋人は作らない」

北村は顔を顰めた。

「クソってなあ……。試しに付き合ってみればいいじゃん。あのレベルの女に言い寄れる機会はそうそうないぞ。特にお前は」

「お前が俺を馬鹿にしてんのはわかった」

実際その通りだとは思うが、一応言わずにはいられない。

単純に菊池が可愛いつてことだけ言えばいいのに、わざわざ悪口付け足すとか、一言多いやつ。

それはともかく、弁当箱の中身はおかずでいっぱいだった。

片隅に梅干しを乗せた白米があつて、それ以外は卵焼き、エビフライ、ミニトマトなどがひしめいている。

結構手が込んでるのが嬉しい。それと同時に、たかだか飲み物一本でここまでされるのも申し訳なかった。その内お返ししないといけない。

「美味いか？」

頬張る俺に北村は問いかけてくる。

答える口は一つしかなく、今は嘔むことに専念している。

飲み下して答える。

「美味しい」

「菊池は料理も出来るのか。ますます良物件」

「聞いてなかったのか。あいつが作ったわけじゃない」

卵焼きの感想を聞かれ、菊池の弟が作ったことを話す。

聞いた北村は何故か得意げな顔になった。

「外堀から埋めてんのね。堅実だけど、手口がいやらしい」

「お前もう黙れ」

美味しいものを食べている時に邪推されるのは、弁当の価値を下げている気がする。

美味しいものを美味しく食えないのは作ってくれた雪兔くんに申し訳ない。

「今時純愛なんて綺麗ごとじゃ恋人は出来ねえよ、七瀬。お前折角菊池からアプローチ

受けてるんだから、夢見ずに目の前のもの掴んどけ」

「アプローチなんて受けてねえし。噂を真に受けんな。黙って昼飯食えよ」

多少の苛立ちを表に出す。

誰しも人を怒らせたいたなんて思わない。だから大体はこれで引き下がるはずだが、北村は最後に「後悔するぞ」と念を押す様に脅ししてくる。どいつもこいつも脅すのが好きだな。

こいつは一々余計なお世話が好きすぎる。

そんなものいらなくて断つても、会長の一件みたいにごり押ししてくるし。

て言うか断つたらトラウマが悪化するかもしれないって卑怯過ぎるだろ。あれで俺も会長も安易に断れなくなった。最悪のタイミングだった。

とつとと元の世界戻らないかな。

そうすれば余計なお世話は丸々消えて、いつもの奇行で楽しませてもらえるのに。

今の北村は半端に常識人だからそこんところ期待できないんだよな。

奇行とか絶対しないよなこいつ。

丁度弁当を平らげた北村をじつと見る。

俺の視線に気が付いた北村はお茶を一口飲んで身を乗り出してきた。

「付き合っちゃえよ」

「とつととノート写せよ」

それだけ言つて、弁当の方に集中する。

北村はまだ何か言つていたようだが、俺に相手をする気がないと見ると素直にノートを写す作業に取り掛かった。

午後には国語が待ち受けている。ラスボス然として最後の試練を課してくる。

なんともやりがいがある。同時に気が滅入る。

少なくとも酷い一日であることに間違いはない。